

甲虫ニュース

No. 100 December 1992

COLEOPTERISTS' NEWS

甲虫ニュース第100号の発刊を祝って

白水 隆

チョウ屋の私に甲虫ニュース第100号記念の祝辞の依頼があったのは一寸意外であったが、チョウ屋でありながら甲虫にも愛着が強く未練たっぷりの私の心底を見すかされたためかも知れない。折角の機会でもあるので、私と甲虫のかゝりあひなど述べて、畏友黒澤良彦氏の肝煎りで1968年から始められた甲虫ニュース第100号の発行のお祝い言葉にかえたい。

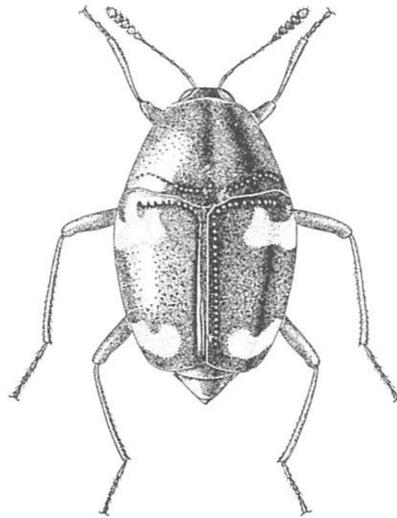
私の小学生時代はチョウはもちろん、目についた昆虫はなんでも採集した。福岡中学に入ってから先輩の吉村清一郎氏の影響もあって甲虫が興味の最高の対象になった。吉村氏はその当時、水生甲虫の研究に打ちこんでおり、後にコガシラミズムシ科の *Haliptus* の新種なども発表した。その吉村先輩に引きつれられて佐賀県基山の川にゲンゴロウ採りに行ったことが鮮明に記憶に残っている。ゲンジボタルで知られていた基山の清流の小川にはキベリマメゲンゴロウとモンキマメゲンゴロウの同属の2種が数多く混生していた。神谷一男教授が書いたゲンゴロウの美しい新種キボンケンゲンゴロウは私が中学生時代に五島列島福江島の三井楽から入った父が岳山腹の溪流で採ったもので、吉村氏の手を経て神谷教授に渡り記載された思い出の多いつかしい種である。この頃採集した甲虫でとくに印象が深かったのはフタコブリリハナカミキリで、福岡市内の南公園(当時私どもは平尾と呼んでいた)で飛行中の大形の♀を捕えてその美事にびっくりしたが、市内の小さな丘陵地でこの種が採集されたのは最初であり(Mushi, 12(1): 12, 1939)、これ以後福岡市内はもちろん、近郊の低山地からも再発見はない。その当時はこんな市中にも豊かな自然が残っていたことが痛感される。

中学を出て宮崎に3年間留学したが、記憶に残っ

ているのは霧島山でオオセンチコガネを見つけて記録したぐらいである。

ジュウナナホシハナムグリの所属が *Gnorimus* ではなく *Paratrichius* であることを書いたのは1939年であるから、数えてみると私が21才、九大に入った年のことである(Mushi, 12(2): 91)。このことに気付いたきっかけは、オオトラフコガネもジュウナナホシハナムグリも翅鞘が汚染されて斑紋が見えにくくなると、両種の区別がつけにくくなることで、このことから、両種の形態的な区別点を追及した結果であった。

九大に入ってからにはチョウの研究を進めることにしたが、私が九大農学部昆虫学教室の助手をしている時代に黒澤良彦氏が副手として研究室に入ってこられ、タマムシの研究をはじめられたので、その影響で私もタマムシが好きになり、微小なタマムシの数種の食性について数篇の短報を書いたことがあったし、またチビタマムシ類の和名の改稱について提案をしたこともあった(筑紫の昆虫, 1(2): 2-8, 1955)。ヤナギチビタマムシ、クズチビタマムシというように寄主植物の名を種名につけるのが私の主張で、現在使用されている和名がほぼこの形式に統一されているのは嬉しいことである。



Scaphidium tsushimense SHIRÔZU et MORIMOTO
ツシマデオキノコムシ♂

甲虫の中でもともと好きであったのはトゲトゲ(現在のトゲハムシ)の仲間とデオキノコムシ科であった。キベリトゲトゲと呼ばれていた種に2種が混同されていることを見つけたので、アザミにつく大形種にキベリトゲトゲ(現在のキベリトゲハムシ)の和名を残し、大胆に新種として記載したが、これは既に外国で記載されていた種であったので synonym として抹殺されたが、腹黒の小形種に私がつけた和名ヒメキベリトゲトゲはヒメキベリトゲハムシと語尾を変えて現在に生

残っている。

デオキノコムシ科の中で大形種からなる *Scaphidium* 属は標本を揃え、全形図は当時九大の学生であった黒子浩氏(現在のミクロガの専門家の大阪府大名誉教授の黒子浩博士)に描いてもらい完成させていたが、チョウの仕事に追われて私には余裕がなく、九大農学部森本桂博士(現在昆虫学教室教授)の協力をえて報文としてまとめることができた(Sieboldia, 3 (1): 55-90, 1963)。ここに示したツシマデオキノコムシの図はその報文中に記載した新種の一つで、これは私が対馬で初めて採集し、その時から新種に違いないと確信していたもの、中後脚に比べて前脚の短いのが目立つ特徴である。*Scaphidium emarginatum* に対するエグリデオキノコムシという和名は、上記報文以前から私が使っていた和名で、現在ではこれが正規の和名として用いられているのも嬉しいことである。

○触角が9節のバンナクシコメツキ

コメツキムシ類の触角は通常11節であるが、ごく少数の種に12節のものがいる。12節を有する種は日本からは未知であるが、ベトナム地方に分布する *Ceropectus messi* (CANDÈZE, 1874) や南米ブラジル地方に分布する *Hemirrhippus fascicularis* (FABRICIUS, 1789) などによく知られている。しかし、11節より少ない節を有する種はいないようで、もしいるとすれば奇形であると思われる。

筆者は今度、徳島市に在住の黒田裕次氏が1976年5月30日に石垣島で採集された触角が9節の *Melanotus bannaensis* ÔHIRA, 1978 バンナクシコメツキ(図)の雄個体を検することができた。しかも、これは両触角とも9節で全く等長同形であり、他の体の各部もすべて完全個体である。体長は18mm、触角は短く、末端は前胸背板の後角より明らかに短い。第2,3節と末節は11節を有する個体と差がないので、欠損しているとすれば第4~10節間のうちの2節であるが、どの節が欠けているのかは不明である。

このように、左右が全く同じように欠如して短くなっている例はきわめて珍しいもので、外因によ



1961年に初めて台湾の昆虫採集旅行に出かけたが、採集品はチョウより甲虫のほうが多かったと思う。この時の採集品については全国の専門家に研究して頂いて多くの新種が記載されたことは有難いことであった(Spec. Bull. Lep. Soc. Jap., (1), 1965)。その後も台湾には数回出かけて、甲虫の採集品については同様に報文を出して頂くことができた。

以上、冗長な駄文になってしまったが、思い出すまゝに甲虫とのかゝわりを述べた。近年の甲虫界の研究の進展はめざましく、古いタイプ標本の検討も進み、日本の甲虫分類学も国際的なレベルに達したと嬉しく思われる。甲虫ニュースは短篇ながらも分類、分布、生態の新知見が多く、毎号愛読して老人の私の楽しみとさえなっている。会の一層の発展と甲虫愛好家の協調を期待して駄文を終ることにしたい。

(九州大学名誉教授)

るものではなく、内因(遺伝子の欠損のようなもの)にもとづくものであると考えられる。本種は石垣島と西表島に分布することが知られている。大変興味あることなのでここに記録する。終りに標本の提供をいただいた黒田氏に心から御礼申し上げる。

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

○アカアシシウムネミヤマカミキリの台湾からの追加記録

NHISATO (1989, Jpn. J. Ent., 57, p. 496) により、台湾北部の拉々山で採集された1雌個体をもとに記録されて以降、*Plocaederus bicolor* (アカアシシウムネミヤマカミキリ)の台湾からの採集例はないが、今年になって新たに追加個体が得られ、実見することができたので、報告しておきたい。

1♀, 台湾省桃園縣下巴陵~四陵(Xia Baling~Siling), 25. vi. 1992, 葛信彦採集(新里保管)。

採集者の葛氏によれば、夜間の燈火採集の白幕にオシロカミキリなどとともに飛来した個体であるという。NHISATO (1989)の記録個体は林縁のランダムスィーピングで得られたものであるが、今回もほとんど偶然に近い採集状況のようである。台湾ではクワガタムシ採集の目的で多くの採集人が燈火採集を行なっているが、本種が採集されたという噂を聞いたことはない。いずれにしても、大型のカミキリでありながら、個体数が非常に少ないのであろう。

なお、すでにNHISATO (1989)で指摘したように、今回の記録個体も含めて、台湾産の本種の上翅端は「ゆるやかな波状」を呈する。GRESSITT (1942)の記載と全形図によれば翅端部は「狭く切断状」であり、中国大陸のものとは亜種レベルで区別すべきかも知れない。

末筆ではあるが、貴重な標本を検査する機会を与えられた葛信彦氏にお礼申し上げます。

((株)環境指標生物, 新里達也)

甲虫ニュース100号の足跡

渡辺泰明

甲虫ニュースがこの号で100号になった。当初は甲虫談話会の、そして現在は日本鞘翅学会の機関誌として発行されてきた甲虫ニュースが、この様に100号を数えるまでに育ったことは、長年本誌の編集にたずさわってきた一人として感無量の思いである。かくのごとく本誌が成長することができたのは、何と云っても積年にわたる会員諸氏の熱意とご尽力によるもので、これらの方々とともに大いに喜び合うと同時に、今後のますますの発展を心から願うものである。

前述の様に、甲虫ニュースは当初は甲虫談話会の機関誌として発行されてきたが、そのいきさつについては、甲虫談話会と日本鞘翅目学会とが合併する直前に発行された甲虫談話会最後の甲虫ニュース(83,84合併号, Suppl., 1988)に黒沢良彦博士が書かれている。それに示されている様に、甲虫ニュースの発刊が企画されたのは1967年で、その年に最初の案内状が当時世話人の一人であった須賀邦耀さんによって作られた。これには甲虫ニュース発刊の主旨、9名の編集幹事名、それに入会申込書がB4版の孔版紙に騰写印刷されている。そして、その翌

年の1月には前述の案内状の記載事項から編集幹事名を削除する一方、8項目にわたる具体的な投稿規定が箇条書にされた案内状が改めて活版印刷され、甲虫愛好者に配布された。

この様にして甲虫ニュースの発刊準備が整えられたが、紙面の体裁については黒沢博士が書かれている様に、限られたスペースの中により多くの情報を盛り込むとの意図から、その当時植物友の会の会誌であった「植物採集ニュース」の体裁を踏襲し、和文二段組、各号4頁建てとした。そして、表紙タイトルのカットは年度ごとに変えることにし、それをセンスあふれる木村欣二世話人に依頼することになった。各号の編成は巻頭に写真または全型図を伴った解説記事を、それに引き続いて速報を目的とした採集記録や生態に関する断片的報告を掲載するという原則が編集方針として建てられた。かくして、甲虫ニュース第1号が案内状の予告通り1968年2月に発行された。

当時、甲虫関係の専門誌としては大阪の甲虫学会によって年1~2回発行されていた「昆蟲學評論」があるに過ぎず、速報を目的とした甲虫ニュースの

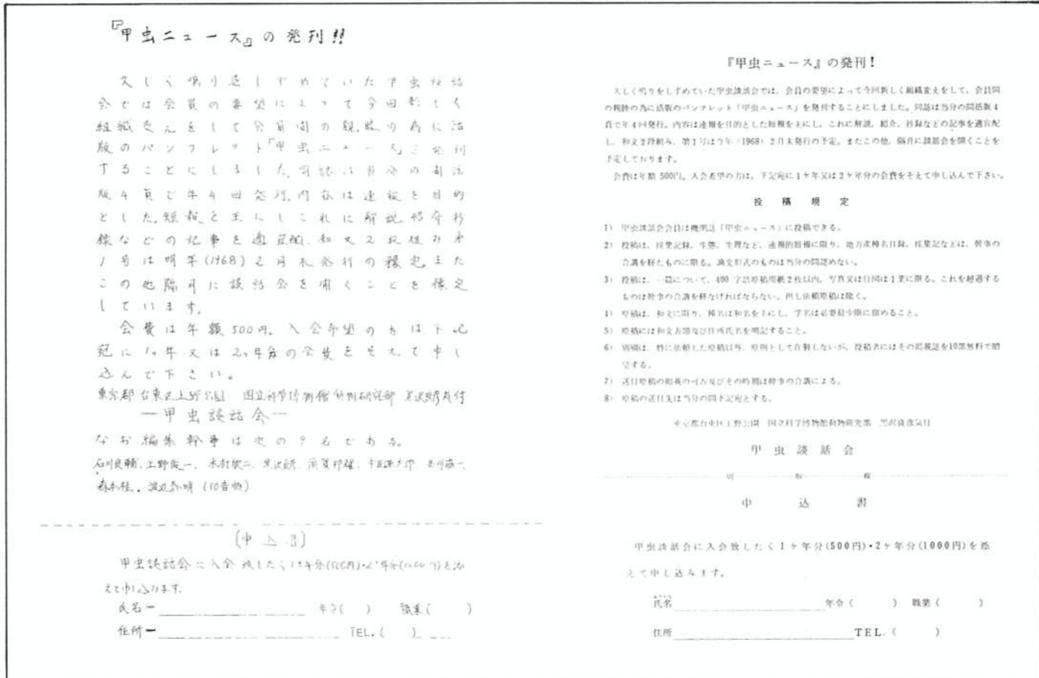


図1. 甲虫ニュース発刊案内書; 昭和42年配布(左), 昭和43年配布(右).



図2. 甲虫ニュースの組見本になった「植物採集ニュース」.

発行は、甲虫類に関する情報伝達の場として多くのアマチュア同好者の人達によって好評をもって迎えられた。そして、投稿原稿は原則としてすべて掲載することにしたり、予定していた各号4頁で、年4回発行では原稿のすべてを掲載することが困難な状況になっていった。そこで、年4回の甲虫ニュースの内の1号を6頁とすることにしたが、それでも対処できず、年ごとに増頁を行わねばならなかった。この様にして、甲虫ニュースは発刊から3年間は順調に発展して行ったが、4年目に入って大きな折の時を迎えねばならなかった。甲虫ニュースの17, 18合併号(1974)の会務報告に書かれている様に、それまで甲虫談話会の運営に尽力されてきた世話人達が、年の経過とともに社会的活動に忙殺され、そちらの面に時間とエネルギーをつぎ込まねばならないといった身辺の事情の変化が生じ、甲虫ニュースの発行はおろか会の事務処理にまで支障を招く事態となった。1972年および1973年のそれぞれの年には、甲虫ニュースが1号ずつ発行されただけで、ある会員からは「甲虫ニュースとは聞いてあきれ……」との厳しい批判をいただく始末であった。

この様な状況を打破するため、1974年以降の甲虫談話会の運営については黒沢博士と私とが中心となって対処することになった。甲虫ニュースが予定通り発行されないため、会費を積極的に徴収することができず、当時の談話会の会計は文字通り火の車の状況で、私が須賀邦耀世話人から引き継いだ

会計の残高は8,700円ほどに過ぎなかった。これでは甲虫ニュースを発行することもできないので、編集会議に出席していた木村欣二、小宮次郎、黒沢良彦、中臣謙太郎、須賀邦耀それに私を加えた6人の世話人達からそれぞれ1万円の寄附金を拠出していただき、それによって早速甲虫ニュースを発行することになった。かくして、甲虫ニュース17, 18合併号(1974)が発行され、その印刷代金48,360円を支払うことができた。そして、それ以後の甲虫ニュースの編集は世話人会の合議制とし、投稿原稿を私が整理して、それを世話人会で検討することとした。会議は世話人達が集まりやすい時間帯と場所とを配慮して品川駅前の京品グリルとし、その二階で夕食をとりながら行うことが恒例となった。

この様にして、甲虫談話会の運営と甲虫ニュースの発行を軌道に乗せることができたが、3年分の甲虫ニュースの発行の遅れを取り戻すのは容易ではなかった。やむを得ず、1974年以降の甲虫ニュースはすべて2号分の合併号とし、その代り1号分の頁数を増やすという苦肉の策を講じざるを得なかった。増頁を行うためには必然的にそれに見合うだけの原稿が必要になるので、わたしは身近な東京農大関係の人達に積極的な投稿をお願いした。今日、これらの人達は勿論のこと、ほかの多くの人達の中から有能なスペシャリストが輩出していることは大変に嬉しいことである。しかし、投稿いただいた原稿のすべてがすぐに掲載できるものではなく、中には便せんやノートの切れ端に書かれたものもあり、それらは一篇ずつ原稿用紙にリライトしなければならなかった。また、文章の推こみが不十分なものも数多くあり、それらについては、その後の投稿の際の参考になる様にとの配慮から黒沢博士がこまめに朱で添削され、それを別刷代りの10部の甲虫ニュースとともにそれぞれの投稿者に返送する様にした。しかし、この措置はかえって不評を買い、投稿に悪影響をおよぼすという話を聞き数年で取り止めることになった。

甲虫ニュースが定期的な発行される様になると会員が増加し、それに伴う会費の増収、あるいはTTS昆虫図書による厚意的なバックナンバーの分譲などによって談話会の会計が急速に改善されていった。そこで、懸案だった会員名籍を印刷して会員に配布し、また、甲虫ニュースの25, 26合併号(1975)からは写真が鮮明に印刷される様にコト紙に改めた。この様にして、甲虫ニュースは着実に発行され、1975年に発行された31, 32合併号で3年分の遅れを取り戻すことができた。そして33号(1976)からは単号による年4回の発行を恒常化することができ、それと同時に年間を通しての頁数を増加させていった。

一方、1975年からは談話会恒例の忘年会の折に、会員から寄附していただいた余剰文献や別刷などのオークションを行い、それによって得られた収入をすべて談話会への寄附金として会計に繰り入れたこ

甲虫談話会世話人会			
掲載順	投稿者	題名	発行枚数
	黒沢良彦	日本産タマムシ科解説(12)	223
	渡辺春明	コフロムシ科のヒメコシメシメの近縁種	118
	窪木幹夫	鳥の谷の Pidoron 属の記録	96
	吉田元重	和歌山県産のタマムシ科の種	112
	小沢裕和	小笠原群島の (T. 山) のヒメコシメシメ科	64
	河野東雄	トコフクミキリ属の採集例	37
	渡辺 稔	屋久島新記録のヒメコシメシメ科の種	25
	森田誠司	ゴキシメシメ科の種	28
	渡辺春明	徳島トコフクミキリ属の採集例	32
	秋小波洋	徳島県小波平のヒメコシメシメ科の種	15
		<i>Agrius sachalinicola</i> の記録	11
	世話人	連絡・報告	20

図3. 京品グリルで行われた編集会議資料

とも加わって、談話会の経済的基盤は年を追うごとに強固なものとなっていった。

この様な状況を背景にして、甲虫談話会で日本産甲虫類の目録を段階的に出版してゆこうという新たな企画が立てられ、そのための措置として1975年から特別会計口座が独自に設けられた。そして、目録の出版基金として1975年と1976年の両年にわたって25万円が一般会計から振替えられ、1977年には日本産甲虫目録の1号から7号までが第一集として一括出版された。これによって、甲虫談話会からは甲虫ニュースと日本産甲虫目録の2種類の出版物が発行されることになった。

さらに、1978年には甲虫ニュース発行10年目の節目を迎えたので、柴田泰利会員のご尽力によって、それまで発刊された甲虫ニュース1号から40号までの内容を号別、著者別、項目別に整理した総目次を発行し会員から好評を得た。

かくして、甲虫談話会は発展の一途をたどっている様に見えたが、すべてが順風満帆という訳ではなかった。1976年に黒沢博士の日本産タマムシ科概説が終了したが、その後の甲虫ニュースの紙面構成に苦慮しなければならなかった。甲虫ニュース発行当初の方針である啓蒙的解説記事と速報性を重視した短報との紙面構成を維持するためには、日本産タマムシ科概説を引き継ぐ様な内容の解説記事が是非とも必要であった。しかしながら、この様な科単位の解説は容易に書けるものではなく、会員に期待される様な紙面構成を行うことがきわめてむずかしかった。幸なことに、佐藤正孝(ミズスマシ科、ホ

ソガムシ科、マルドロムシ科)、森本桂(ミツギリゾウムシ科)、佐々治寛之(ミジンクスイムシ科、テントウダマシ科)各教授から、それぞれの専門のグループについて概説記事を書いていただくことができ、愁眉を開くことができた。

甲虫ニュース100号発行の歴史を通じ印刷所は2回変更された。発行当初は、前述の通り「植物採集ニュース」をひな形にした関係から、同ニュースを印刷していた星野精版印刷株式会社に甲虫ニュースの印刷をお願いすることになり、同社取締役の中西信雄さんには随分とお世話になった。特に、入校から発行までの時間的余裕がない場合格別の便宜を図っていただいた。いよいよ期日に追われる様な時には、わたしが印刷所のある神田まで出向いて出張校正をして間に合わせたこともあった。甲虫ニュースは邦文誌ではあるが、昆虫の学名がひんばんに使われるので、そのため活字としてボールド、ローマン、イタリック、キャピタル、スモールキャピタルなど欧文の多様な活字が使用される。そのため、初校の段階ではたくさん誤植が認められ、校正者泣かせの一面があった。ある時、校正をされていた黒沢博士の虫の居どころが極端に悪かったのか、真赤になったゲラの余白に職人さんに対する厳しい注文が書き加えられたことがあった。それが職人さんの自尊心をひどく傷つけた様で、以後甲虫ニュースの印刷は辞退したいという事態になった。10年以上も甲虫ニュースの印刷をお願いしてきた経緯もある

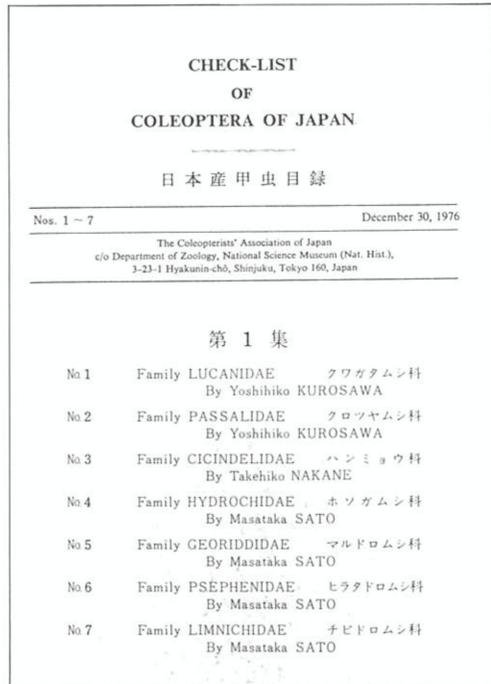


図4. 日本産甲虫目録第一集カバー。

ので、何とか以後の印刷もお願いしたが、印刷所の意向は固く、やむなく別の印刷会社を探すことになった。幸なことに、笠原須磨生会員から懇意な印刷会社として創文印刷工業株式会社を紹介していただいたが、この会社は偶然にも東京農大が定期的に発行している学術報告書を印刷している会社だったので、その後の連絡などには好都合だった。

この様に、様々な歴史の時を刻みながら甲虫ニュースは年4回の発行ペースを崩さずにきたが、1980年に入ると私が大学内の色々な事柄にかかわり合う様になり、甲虫ニュースに対して十分な時間とエネルギーを注ぎ込むことができなくなって行った。そして、遂に1981年の甲虫ニュースは2回の発行にとどまり、このままの状況では年4回の発行がおぼつかない状況になった。そこで、私はほぼ10年間にわたって努めてきた編集世話人の座を降りることにし、新しく活力に富んだ人に編集世話人をお願いすることになった。そして、1982年4月に岡島秀治、笠原須磨生両会員にバトンタッチした。この結果、甲虫談話会と日本鞘翅目学会とが合併する前年の1988年までほぼ7年間、黒沢博士を中心にこの両編集世話人によって甲虫ニュースの編集が行われ、時に合併号を余儀されたこともあったが、まずは順調に発行されていった。これには、編集会議のたびごとに遠路をもちとわず、東京農大まで足を運ばれた笠原会員のご熱意に支えられる所が大きい。

1989年、日本鞘翅学会の誕生後は規約に基づき、編集幹事が選任されることになり、阿部光典会員が第一回目の編集幹事として、その任に当たられた。そして、この時から印刷所の一本化を図るため、欧文誌のElytraを印刷している国際文献印刷社に甲虫ニュースの印刷もお願いすることになった。日本鞘翅学会の規約では、編集幹事の任期が2年と定められているため、1990年で阿部編集幹事の任期が終了し、代って1991年からは妹尾俊男会員が新たな編集幹事として選任され現在にいたっている。

かくして、1968年に発刊された甲虫ニュースは25年の年月を経て、今回100号の発行を迎えたが、この間、各号に掲載された科、亜科あるいは族単位の概説は多くの人達に親しまれ、それぞれの昆虫群を研究するための良きガイドとしての役割を果たした。また、短報は新たな生息環境や分布地探索への刺激となって、会員の調査、研究への活性化をもたらす多くの成果をあげた。

このような啓蒙的な概説を中心として、それに短報を加えたこれまでの甲虫ニュースの紙面構成を、今後ともより一層充実・発展させることは会員誰もが望んでいることで、今後に期待したい。それと同時に、甲虫同好者の誰にも開かれた会誌として、気安く接することのできる船だまり的雰囲気のある楽しい会誌に成長してゆくことを心から願って擲筆する。

(東京農大)

○ネアカチビオオキノコ奥多摩の記録

ネアカチビオオキノコ *Tritoma lewisiana* NAKANE は相模大山産の標本をもとに記載されたオオキノコで各地から報告されている。しかしその中にはオオサワチビオオキノコの同定誤りなどが含まれており、筆者はこれらの記録データを出来るだけ確認し、神奈川虫報に報告*した。すなわち、真のネアカチビオオキノコは本州と四国に分布し、本州では神奈川のみとなっていた。この報告の中で衣笠恵士氏採集の東京都奥多摩日原産の標本があるらしいが、衣笠氏の手を離れた由で確かめられなかったことにも言及した。



この報告を見た宮谷秀明氏から早速、奥多摩産の標本を御恵与頂いたので、ここに報告したい。

1頭、奥多摩町松、10. v. 1981, 宮谷秀明採集。

したがって本州での分布は箱根、丹沢と奥多摩ということになる。高尾山あたりでも採集されている可能性もある。

末筆ではあるが宮谷秀明氏に厚く御礼申し上げる。

*神奈川虫報(98): 1-10, 1992.

(神奈川県小田原市、平野幸彦)

○新潟県におけるミヤタケヒメツヤヒラタコメツキの記録

Hypoganus miyatakei ÔHIRA, 1966 ミヤタケヒメツヤヒラタコメツキは本州、四国、九州から点々と記録があるものの、個体数が少なく、生態についてもよく知られていない種である。筆者は今回、新潟県で環境調査中にライトトラップで採集された本種を見いだすことができたのでここに記録しておく。東日本では、これまでに山梨県小金沢が産地として知られているにすぎなかった。今回の産地は本種の北限にあたることになる。

1♂, 新潟県藤原町中三依付近, 31. vii. 1989.

参考文献

鈴木 互, 1981. ミヤタケヒメツヤヒラタコメツキの雌の記録. 甲虫ニュース, (54): 6.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

ゴマフニセカタゾウの正体

黒 沢 良 彦

故河野廣道博士は1942年に“Die Rüsselkäfer auf der Ins. Kashôtô”と題する論文を発表し、台湾の東海岸沖にある小島、火烧島（現在の緑島）産のゾウムシ科に属する1新属新種と1新種を記載し、カタゾウムシ類2種を記録した。このうち、新属新種として記載されたゴマフニセカタゾウ *Kashotonus multipunctatus* Kôno, gen. et. sp. n. はそれ以前からカタゾウムシ類（カタゾウムシ亜科 *Pachyrhynchinae*）の1種として知られていた種類で、現在でもそう信じている人も多い。そこで、文献に表れたこの種類についての記述を拾ってみると共に、それに対する私の意見を以下に述べてみたい。

加藤正世, 1933. 分類原色日本昆虫図鑑, 9: pl. 23, fig. 9 (東京, 原生閣)。

アヲボシカタゾウ *Pachyrhynchus* sp. として本種が図示されている。本種が文献上に表れるのはこれが最初であるが、産地が火烧島ではなく、なぜか「台湾（紅頭嶼）」となっている。紅頭嶼は現在の蘭嶼であるが、本種は火烧島（緑島）だけに特産し紅頭嶼には産しない。恐らく、加藤博士はラベルのない標本を前にして、本種をカタゾウムシ属の1種と誤認し、カタゾウムシ属は当時台湾では紅頭嶼以外からは知られていなかったため、本種も紅頭嶼産と

して図示してしまったのであろう。しかし、本種がカタゾウムシ属 *Pachyrhynchus* の種類ではないことは、その触角を見ればすぐ判ったはずである。

鹿野忠雄, 1935. *Pachyrhynchides* 群の甲虫とその地理的分布. 日本学術協会報告, 10 (1): 1~5.

第1頁に、「筆者の手許には1933年の探究の結果得た未発表の1新種を有する。すなわちそれは従来 Luzon 特産の属として知られ、わずかに2種を包括する *Apocyrtus* 属の1新種であって、これが紅頭嶼隣接の小島火烧島に産する事実より、これに *Apocyrtus kashotonis* n. sp. なる新名を付する心算である。」と記されており、他に火烧島より、スジカタゾウ *Pachyrhynchus yamianus* KANO, 1929, マルモンカタゾウ *P. saricites kotoensis* Kôno, 1930, およびソナンカタゾウ *P. sonani* Kôno, 1930, の3種を始めて記録した。3種は共に紅頭嶼から記載された同島の特産種か特産亜種である。なお、この時新名だけが与えられながら記載されなかった新種 *Apocyrtus kashotonis* KANO, n. sp. はその後も記載が発表されることがなかったため、どんなものであったか判らない。もちろん記載を欠くので、この名は無効であるが、現在国立科学博物館に保管されている故鹿野忠雄博士のコレクションの中にある火

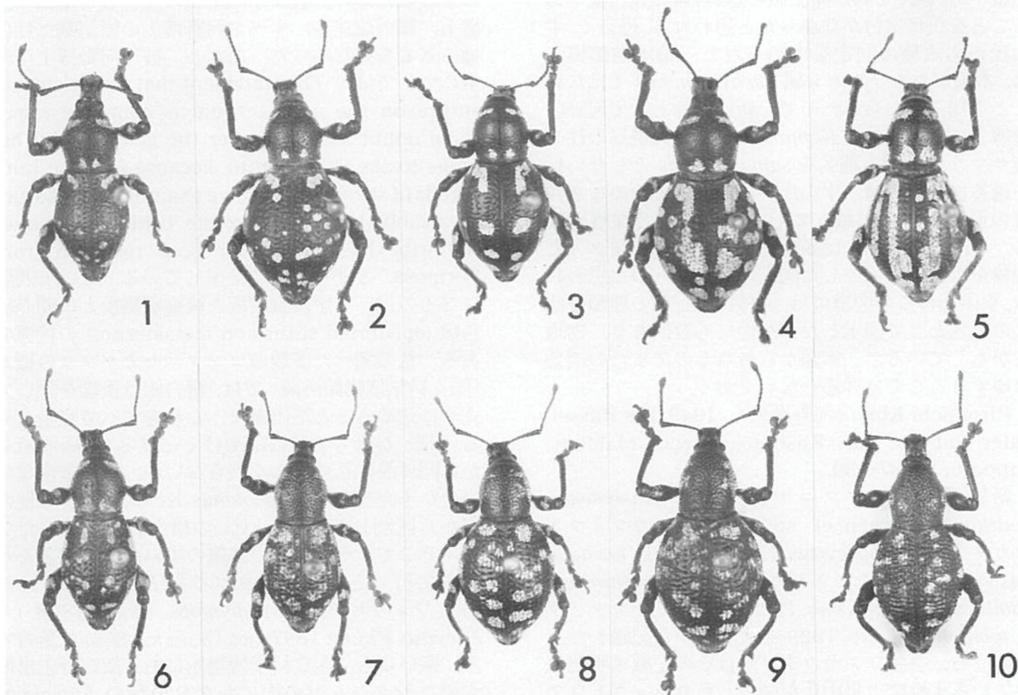


図1-10. *Eupyrigops* 属2種の変異, 1. *E. subannulatus* FAUST, 1897, 緑色型♂; 2-5. 同, ♀; 6. 同, 青色型♂ (*semperi* FAUST, 1897); 7. ゴマフニセカタゾウ♂ (火烧島産); 8-9. 同, ♀ (火烧島産); 10. 同, ♀ (Camiguin 島産)。

焼島産の後記するゴマフニセカタゾウの標本3♂♂3♀♀には、鹿野博士の筆蹟で *Apocyrus kashotonis* KANO, n. sp. というラベルが付いているので、鹿野博士の云う *Apocyrus kashotonis* もゴマフニセカタゾウを指しているのは間違いないであろう。ただし、鹿野博士が所属させた属 *Apocyrus* ERICHSON, 1834 はカタゾウムシ亜科 *Pachyrhynchinae* に属するの、ゴマフニセカタゾウはクチブトゾウムシ亜科 *Otiorrhinchinae* のヒメカタゾウムシ族 *Celeuthetini* に属し、外観は似ているが、両者は別群に属している。

平山修次郎, 1940. 原色甲虫図譜, 79, pl. 29, fig. 1 (東京, 三省堂).

第29図版第1図にカセウトウアヲゴマフザウ(雌) *Konorrhinchus samasanensis* MIWA et HIRAYAMA という新名を与えられて本種が図示されている。その解説には、「体黒色、頭胸部及翅鞘ニハ強大ナ点刻ヲ有シ、不規則ナル青色斑紋ヲ装ウ。台湾(火烧島)ニ産ス。」という一般的で短い記載がある。その中には新属としての記載もなく、新属新種の表示もないが、国際命名規約を満していると認められるので、この種名 *Konorrhinchus samasanensis* は本種の有効名としては最も古い最初のものであると認められる。平山氏は本書の巻頭で、「なお第29図版の1図も未発表のものであるのに、本書に掲載したことをお断りしておく。」と述べているが、少しでも記載があれば、それが原記載と認められ、先占権があることを氏は気付かなかったと思われる。恐らく、平山氏から本種の同定を求められた三輪勇四郎博士は、本種がカタゾウムシ属 *Pachyrhynchus* ではないことを知っておられたので、新属新種として河野広道博士に因み属名を *Konorrhinchus*。火烧島の住人のサマサ族に因み種名を *samasanensis* としたい旨を返答されたのに、平山氏が先を急いでそのまま共著の形で本書に掲載してしまったものと推察される。平山氏の念頭には多分あまり仲の良くなかった加藤正世博士の前述した図鑑があったものと思われる。平山氏のこの図譜には、同様に未記載の種類を他人の命名として図示した例が他にも数例あり、物議をかもしているが、本題から外れるのでまたの機会にゆずりここでは詳述しないでおく。

Hiroichi KONO (河野廣道), 1942. Die Rüsselkäfer auf der Ins. Kashōtō. Insecta Matsum., Sapporo, 16: 27~30.

新属新種, ゴマフニセカタゾウ *Kashotonus multipunctatus* gen. et sp. n. と新種, カショウトウカタゾウ *Metapocyrus (Trachycyrus) kashotonus* sp. n. を記載し, スジカタゾウ *Pachyrhynchus nobilis yamianus* KANO, 1929. とコウトウカタゾウ *P. tobafolius* KANO, 1929 を火烧島から記録した。このうち、ゴマフニセカタゾウはその記載に明記されているように、平山氏が図示したカショウトウアオゴマフゾウ *Konorrhinchus samasanensis* MIWA et HIRAYAMA, 1940 を無効名と見做して、新たに

命名されたもので、河野博士は“ohne Beschreibung”(無記載)としているが、前記のように、平山氏の図譜には、図と短く一般的ではあるが記載まで付いているので、この命名を有効と認めないわけにはいかない。なお、河野博士はここで始めて本種がカタゾウムシ亜科 *Pachyrhynchinae* ではなく、クチブトゾウムシ亜科 *Otiorrhinchinae* のヒメカタゾウムシ族 *Celeuthetini* に属することを明記した。

なお、本題から外れるが、河野博士はカショウトウカタゾウを *Metapocyrus (Trachycyrus) kashotonus* と綴っておられるが、これは *Metapocyrus* の誤である。また、この記録によって、紅頭嶼から記載された5種のカタゾウムシ属 *Pachyrhynchus* のうち、モンシロカタゾウ *P. insularis* KANO, 1929 を除く他の4種全部が火烧島に産することが明らかになった。

Guy A. K. MARSHALL, 1956. The Otiorrhynchine Curculionidae of the tribe Celeuthetini (Col.). British Mus., London; 134 pp.

熱帯アジア、特にフィリピンとモルッカ諸島を中心とした東南アジア、ニューギニア、太平洋諸島などに多数の属や種を含むクチブトゾウムシ亜科 *Otiorrhinchinae* のヒメカタゾウムシ族 *Celeuthetini* の再検討を行った MARSHALL は、ニセカタゾウ属 *Kashotonus* KONO, 1942 を独立した一つの属と認めたが、実際にこの属の標本を検査することが出来なかったために、彼が示した属の検索表の本属の位置も、属の記述も、すべて河野博士の原記載だけに據らざるを得なかった。ただし、彼は河野博士の記載については、“The statement that the episternal suture on the metasternum is complete raises some doubt as to whether the genus really belongs to the Celeuthetini, because in some hundreds of species that I have examined this suture invariably becomes obsolete behind; moreover the tribe has not so far been recorded from Formosa.”と述べて疑問を呈している。ここで問題になるのは、まず後胸腹板と後胸前側板との間の縫合線(episternal suture on metasternum)の状態である。私の調べた多数のゴマフニセカタゾウの標本(国立科学博物館所蔵)では、縫合線は後端を除いて完全に認めることが出来た。これをすべて完全と見る(河野)か後方で常にぼやけると見る(MARSHALL)かは門外漢の私にはよく判らないが、この縫合線の完全か不完全かで *Kashotonus* KONO, 1942 を他の属から区別した MARSHALL の検索表は役に立たない。そこで、それ以後の諸属の中に彼の検索表をたどって行くと、ニセカタゾウ属 *Kashotonus* は結局、フィリピンの属 *Eupyrigops* BERG, 1898 (= *Eucyrus* FAUST, 1897, nec DEJEAN, 1833) に落着す。幸いにも、国立科学博物館にある故鹿野忠雄博士のコレクションの中にかんりの数の *Eupyrigops subannulatus* と *E. semperi* の2種の *Eupyrigops* 属の種類標本があり、それらと比較した結果、ニセ

カタゾウ属 *Kashotonus* Kôno, 1942 はフィリピン
のルソン島から知られる属 *Eupyrigops* BERG, 1898
のシノニムと見做して差支えないであろうとの結論
に到達した。この点に関しては九州大学の森本桂教
授に標本を送って検討して頂いた結果、私の意見に
同意する旨の返事を頂いた。また、森本教授によれ
ば、左右の前基節は *semperi* ではわずかに離れてい
るが、ゴマフニセカタゾウでは完全に接しているも
のから狭く離れるものまでいろいろあり、接するか
離れるかを目安にヒメカタゾウムシ亜科 *Celeuthe-*
tini の属を分類している FAUST (1897) の検索表は
役に立たないと云う。なお、和名は河野博士に従っ
てニセカタゾウ属 *Eupyrigops* BERG, 1898 とするの
が適当であろう。

ニセカタゾウ属 *Eupyrigops* BERG, 1898 は FAUST,
1897 がフィリピン産の 3 新種 *subannulatus*, *sem-*
peri, および *granulosus* に基づいて創設した新属
Eucyrtus が DEJEAN, 1833 によって先占されている
としてその翌年 1898 に BERG が代替名を与えたもの
で、模式種として *subannulatus* (FAUST, 1897) が
FAUST 自身によって原記載の中で指定されている。
その後上記 3 種の他に *banahaonis* HELLER, 1915
と *maquilingi* HELLER, 1934 の 2 種が追加記載され
たが、前者は *semperi* のシノニムとされている。産
地はすべて Philippinen とあるだけであるが、
Banahao も Mt. Maquiling も共に Luzon 島の中
部にある。しかも FAUST の原記載に用いられた標
本は、*subannulatus* は 1♂3♀♀, *semperi* と *gran-*
ulosus は共に 1♂のみのわずかな標本に基づいて記
載されている。しかし、私の検したルソン島
(Luzon) の Banahao と Mahayhayube 産の多数の
semperi と *subannulatus* と思われる標本は前者の
斑紋が青紫色、後者のそれが緑色ないし青緑色であ
る以外に両者には構造上の差異がなく、後者の斑紋
は個体変化が激しく、両極端の変化を較べるとまる
で別種の観さえある。また、*subannulatus* は 32 頭
の標本を検したのに、そのうち♂はわずかに 1 頭の
みであって他はすべて♀であった。一方 *semperi* は
20 頭の標本を検したのに、すべて♂で♀が全くな
く、模式標本も♂、MARSHALL が♀として図示した
標本も明らかに♂であるので、♀が未知である。こ
れらの諸点から推定すると、両者は同一種で、その
♂の大部分が青紫色斑を装った *semperi* 型で、緑色
斑を装う *subannulatus* 型の♂は極めて稀、♀は全
部 *subannulatus* 型で、斑紋の個体変化が極めて大
きいと云う構図が浮んで来る。*Granulosus* も恐ら
くは斑紋が消失した古びた♂ではないかと思われ
る。また、*maquilingi* HELLER, 1935 も♀の個体変化
の幅の中に含まれてしまうのではないかと疑われ
る。従って、今までにルソン島の中部から記載され
た *Eupyrigops* 属の 5 種はすべて同 1 種ではないかと
の疑問が生じて来る。火烧島産のゴマフニセカタゾ
ウ *Eupyrigops samasanensis* (MIWA et CHÛJÔ, 1940)
も同一斑紋を持った個体はないと云えるほど上翅の

斑紋の個体変化が激しいが、構造上からはフィリ
ピン産の *subannulatus* (FAUST, 1897) に代表される
種類とは別属にするに足る特徴は見出し難い。

MARSHALL はさらにヒメカタゾウムシ族 *Celeu-*
thetini に属する種類が今までに台湾本土から 1 種
も知られていない点をニセカタゾウ属 *Kashotonus*
に対する疑問点に挙げているが、現在では、ヒメカ
タゾウムシ族に属する種類は、琉球列島、さらには
伊豆諸島や日本本土にまで分布することが知られて
いるので、この点は疑問点とはなり難い。しかも、
ゴマフニセカタゾウ *E. samasanensis* そのものも、
紅頭嶼にこそ産しないが、火烧島特産ではなく、
フィリピン北部のパプヤン諸島 (Babuyans) やパタ
ン諸島 (Batans) の一部の島にも、亜種が異なるか
も知れないが、同一種と思われる種類が産するの
ではないかと推定される。私はパプヤン諸島のカミグ
イン島 (Camiguin) 産の本種と同一種と思われる種
類の標本数頭を検した。しかし、この種類が他のフィ
リピン産の既知の種類どれかに当るかどうかは検
索することが出来なかった。しかし、*Eupyrigops* 属の
5 種のどれにも当たらないことだけは確かである。

以上、台湾の火烧島 (緑島) に産するゴマフニセ
カタゾウについて論じて来たが、本種の学名とその
シノニム関係は以下の扱になる。

Genus *Eupyrigops* BERG, 1898 ニセカタゾウ属
Eucyrtus FAUST, 1897, Stettin. ent. Ztg., 58: 255 (nec
DEJEAN, 1833).

Eupyrigops BERG, 1898, Comun. Mus. nac. B. Aires, 1: 17
(nom. nov. p. *Eucyrtus* FAUST, 1897).

Konorrhinchus MIWA et HIRAYAMA, 1940, Genshoku
Kôchû Zufu; 79, pl. 29, fig. 1 (syn. nov.).

Kashotonus Kôno, 1942, Insecta Matsum., Sapporo, 16:
28 (syn. nov.) (nom. nov. p. *Konorrhinchus* MIWA et
HIRAYAMA, 1940).

Species *samasanensis* (MIWA et HIRAYAMA,
1940) ゴマフニセカタゾウ

Pachyrrhynchus sp., KATO, 1933, Genshoku Nippon
Konchû Zukan, 9: pl. 23, fig. 9 (Botel-Tobago I. in
error).

Apocyrtes kashotonis KANO, 1935, Nippon Gakujutsu-
kyokai Hôkoku, 10: (1): 1 (Kashô-tô) (nom. nud.).

Konorrhinchus samasanensis MIWA et HIRAYAMA, 1940,
Genshoku Kôchû Zufu; 79, pl. 29, fig. 1 (Kashô-tô).

Kashotonus multipunctatus Kôno, 1942, Insecta
Matsum., Sapporo, 16: 28 (Kashô-tô) (syn. nov.).

Distr.: Formosa: Kashô-tô, Philippines: Babuyans (Cam-
iguin).

なお、平山修次郎氏と加藤正世博士との間の不仲
については多少触れておいたが、河野廣道氏がなぜ
同門の兄弟子に当たる三輪勇四郎博士が平山氏と共
著で命名したカショウトウアオゴマフゾウを否定
し、無効名として敢えて新名の命名に踏み切ったの
か、いささか疑問が残る。ここに当時の、今でもそ
うであるかも知れないが、おどろおどろした人間関
係を垣間見る思いがする。

(東京都世田谷区)

日本から最近新しく追加されたテントウムシ類*

佐々治 寛 之

日本産テントウムシ科の分類は1971年に「Fauna Japonica: Coleoptera, Coccinellidae」でまとめられ、その後7種が追加され、1985年「日本産甲虫目録 No. 26, テントウムシ科」が刊行された。同日録に収録されている種数は162種である。同年「原色日本甲虫図鑑(III)」(保育社)が発行され、大部分が含まれている。

さらに「目録」以後、10種が新たに記録されているので、図示紹介しておきたい。その記録で注目すべきことは、遠隔既知分布地から最近になって移入土着したか、比較的最近になって近隣地域から分布を拡げて来た可能性が強いことである。個々の種について詳細な分類学上の特徴や分布について記載すべきであるが、最小限の文献を掲げてそれに委ねたい。

Jauravia limbata MOTSCHULSKY

ケブカメツブテントウ

Jauravia limbata MOTSCHULSKY, 1858, Étude entom. 7: 118 (Ceylon).

Paraclitostethus ovatus OHTA, 1929, Ins. matsum., 4: 1-2 (Formosa).

日本からの記録: 沖縄島(上野輝久, 1988 b)。視検標本: 17頭, 沖縄県首里市末吉, 11. x. 1988, 佐々治採集; 3頭, 末吉, 26. ii. 1988, 上野採集。

分布: 日本(沖縄島), 台湾, 中国, ベトナム, タイ, インド, スリランカ。

体長1.8-2.6 mm, ほぼ半球形, 背面はかなり強く膨隆し, 密に被毛する。前胸背板は黄褐色, 鞘翅は黒色で周縁部は幅広く黄褐色。小顎肢末端節は円筒形で先方に少し狭くなる。触角は細く, 11節。特異な背面色彩と密な細毛で他種との区別は容易。東南アジアに広く分布し, 台湾には全島に普通に産するが南西諸島からは未発見であった。1988年に初めて採集され, 1989年には那覇市付近で多産することを確認しているが台湾からの移入の可能性が高い。

Medamatento ocularis (SASAJI)

メダマテントウ

Shirozuella ocularis SASAJI, 1988, Mem. Fac. Educ. Fukui Univ. Ser. II, (38): 14-17 (Okinawa-jima).

Medamatento ocularis: SASAJI, 1989, loc. cit., (39): 21.

日本からの記録: 奄美大島(SASAJI, 1989), 沖縄島(SASAJI, 1988)。日本固有種。

体長1.1-1.2 mm, 短卵形, 背面の被毛は疎で粗い。黒~黒褐色で, 鞘翅に2対の赤褐色紋がある。

腿節は黒く先端部が黄褐色。クチビルテントウ類のように頭盾が拡張するが, 小顎肢は細くメツブテントウ亜科に含まれる。複眼が著しく大きいことなどによって *Shirozuella* 属と区別され, *Medamatento* 属(語源「目玉」)とされた。

Medamatento secunda SASAJI

クロメダマテントウ

Medamatento secunda SASAJI, 1989, loc. cit., (39): 22-23 (Ishigaki-jima).

日本からの記録: 南西諸島(石垣島, 西表島, 久米島)(SASAJI, 1989)。日本固有種。

体長0.90-1.06 mm, 前種に似ているが, 背面は黒色で無紋。鞘翅の被毛は前種より細かい。前種とともに上野輝久氏の採集品に基づいて筆者が記載したものである。

Scymnus (Pullus) quadrillum MOTSCHULSKY

タイラヒメテントウ

Scymnus (Pullus) quadrillum MOTSCHULSKY, 1858, Étude entom., 7: 120 (Ceylon).

日本からの記録: 沖縄島(上野輝久, 1988 a)。視検標本: 1♀, 沖縄島西原町千原, 10. v. 1988, 平良智採集, 佐々治保存。1♂, 沖縄県渡名喜島, 20. v. 1989, 上野輝久採集, 佐々治保存。

分布: 日本(沖縄島, 渡名喜島), 台湾, タイ, スリランカ。

体長約2.0 mm, 卵円形で体幅は長さの3/4, 背面は黒色で, 鞘翅は黒色地に前後に並ぶ赤褐色紋があり, 後方のは前方より小形。鞘翅被毛配列はゆるやかに波曲する。前胸背板突起隆起線はほぼ直線状で前方に向かって狭くなる。日本産ヒメテントウ族の中では *Scymnus (Scymnus) marinus* ハマベヒメテントウに似ているが腿節線が完全。 *Sc. (P.) sapporoensis* サッポロヒメテントウとは前胸背面の形や点刻が異なるが再検討を要する。

Hyperaspis leechi MIYATAKE

ヨツボシツヤテントウ

Hyperaspis leechi MIYATAKE, 1961, Mem. Ehime Univ. Sect. VI, 6: 151-154 (China: Mokansan).

日本からの記録: 長崎市(佐々治, 1989 b)。視検標本: 1♀, 長崎市金比羅山, 3. v. 1989, 野田正美採集, 今坂正一保存。

分布: 日本(九州), 朝鮮半島, 中国(東北部・中部), シベリア(沿海州), モンゴル。

体長3.5-4.6 mm, 卵形で背面は無毛で強い光沢がある。鞘翅は黒色で, 前後に並ぶ比較的大形の黄褐色紋がある。前胸背板は黒色で側方は淡黄色。やや大形・無毛で一見テントウムシ亜科の種に似るが触角は短小で, 鞘翅周縁は平圧されない。

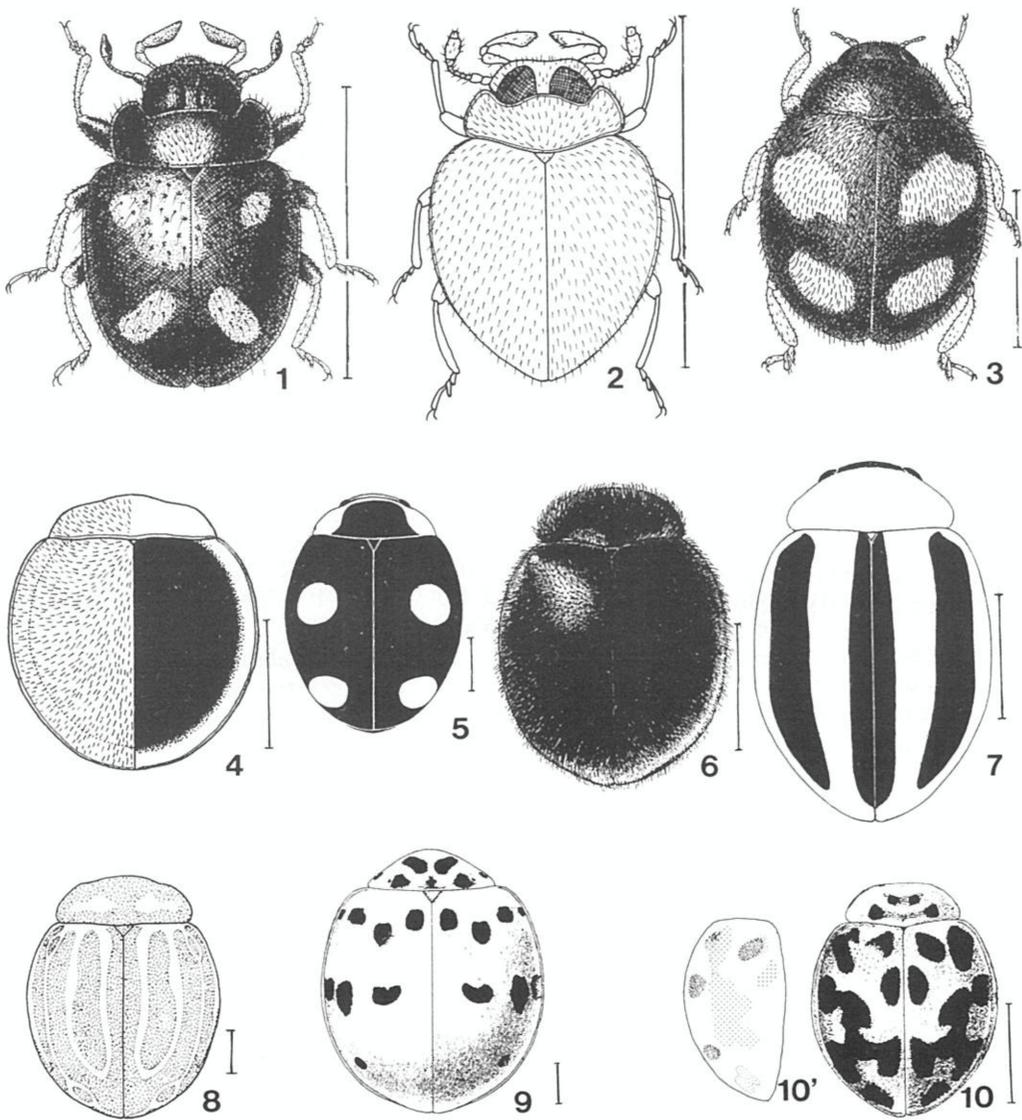
野田・今坂(1989)がギョウトクテントウとして

* Hiroyuki SASAJI: The recently new recorded ladybirds from Japan (Coccinellidae).

写真入りで、長崎から報告したものは、今坂氏の御好意で標本を見たところ本種であった。野田・今坂が記録した長崎市金比羅山は以前から良く採集されて来た場所でもあり、最近になって日本に移入された可能性が強い。

Brumoides ohtai MIYATAKE
ミスジキロテントウ

Brumoides ohtai MIYATAKE, 1970, Mem. Ehime Univ. Sect. VI, 6: 309-311 (Formosa: Taihoku).
日本からの記録：沖縄県沖縄市（東 清二, 1985）；大阪市大正区，住之江区（市川顕彦, 1986）。視検標本：19頭，1蛹脱皮殻，沖縄市，22. v. 1985，東採集，佐々治保存（上記の一部）。
分布：日本（本州，沖縄島），台湾。



1. *Medamatento ocularis* メダマテントウ；2. *Medamatento secunda* クロメダマテントウ；3. *Scymnus (Pullus) quad-rillum* タイラヒメテントウ；4. *Jauravia limbata* ケバカメツブテントウ；5. *Hyperaspis leechi* ヨツボシツヤテントウ；6. *Rhyzobius forestrieri* ハラアカクロテントウ；7. *Brumoides ohtai* ミスジキロテントウ；8. *Bothrocalvia albolineata* シロスジテントウ；9. *Olla v-nigrum* ハイイロテントウ；10. *Psyllobora vigintimaculata* クモガタテントウ。（スケールはすべて1mm）（5, 7は宮武, 1961, 1970; 6, 9, 10はGORDON, 1985; 残りは佐々治より, 3は原図）。

体長 2.7-3.4 mm, やや長目の卵形で背面は無毛光沢。頭部は♂は黄色, ♀は黒色, 前胸背板は橙黄色。鞘翅は黄色で各翅中央と会合部は幅広く黒色。色彩はクロスジチャイロテントウにやや似るが前胸背板は赤く, 体形は細長く, 頭盾は顕著に広がる。1985年に沖縄市住宅地で多数発生し, また1986年には大阪市の港湾近郊で発生したところから, 移入昆虫であることはほぼ間違いない。ただ, それ以前の記録は1906年に台北で採集された1頭だけの基準標本しか知られていないので本来の生息地を追求することは困難と思われる。

***Rhyzobius forestieri* (MULSANT)**

ハラアカクロテントウ

Platyomus forestieri MULSANT, 1853, Ann. Soc. linn. Lyon, 1: 158 (Australia).

Scymnodes forestieri: KORSCHESKY, 1931: 85.

Rhyzobius forestieri: POPE, 1981, Bull. ent. Res., 71: 26; 1985: 661.

Rhizobius ventralis sensu auct. partim not (ERICHSON, 1842).

Lindorus ventralis (ERICHSON): TIMBERLAKE, 1927: 532.

日本からの記録: 福岡市内(金鐘国・森本桂, 1987)。視検標本: 1♂1♀, 福岡市九州大学農学部内, 20. iv. 1987, 森本桂採集, 佐々治保存。

分布: 日本(九州), カリフォルニア, ハワイ, フィジー, ニューカレドニア, ニューゼーランド, オーストラリア。

体長 2.6-3.7 mm, 体幅 1.9-2.3 mm, 卵円形。背面は黒色で, 翅鞘後縁部は狭く赤褐色, 脚は黒色, 腹部赤褐色。オーストラリア原産で1892年タマカイガラムシ類防除のために北米に移入され, 現在カリフォルニア東海岸地方に定着している。*Rhizobius* (又は *Lindorus*) *ventralis* の名で天敵として良く知られているが表記が正しい (POPE, 1981)。天敵として世界的に著名な *R. lophanthae* と近縁で脚と前胸背板の色で区別される。日本には天敵として意図的に移入された記録はない。

***Bothrocalvia albolineata* (GYLLENHAL)**

シロスジテントウ

Coccinella albolineata GYLLENHAL, 1808, in SCHÖNHERR, Syn. Ins., 2: 152 (China).

Bothrocalvia albolineata: CROTCH, 1874; SASAJI, 1982: 5.

日本からの記録: 西表島上原(岡田正哉, 1986)。視検標本: 同上, 7. xii. 1980, 岡田採集・保存。

分布: 日本(西表島), 台湾, 中国。

体長 5.7 mm, ほぼ半球形, 橙赤褐色地に図のように各4条の細い淡黄色の縦縞模様があり美しく, 肩部と翅端近くに小輪状紋がある。台湾でも少く, マツにいると聞いたことがある。西表島で1例の記録があるだけである。

***Olla v-nigrum* (MULSANT)**

ハイロテントウ

Harmonia v-nigrum MULSANT, 1866, Monogr. Coccin.: 64.

Olla v-nigrum: TIMBERLAKE, 1943: 24; GORDON, 1985: 826.

Coccinella abdominalis SAY, 1824, J. Acad. Nat. Sci. Philadelphia, 2: 95 (nec *Coccinella abdominalis* THUNBERG, 1794).

Cycloneda sayi CROTCH, 1871: 6.

日本からの記録: 沖縄島本部半島今帰仁(大桃定洋・佐々治, 1989); 恩納村安富祖, 1987; 読谷村残波岬; 豊見城村と根~瀬長島(上野・佐々治, 1989); 沖縄県勝連村浜比嘉島, 本部南部で'87~88普通で, 瀬長島で多産(楠井善久, 1989)。視検標本: 1頭, 今帰仁, 30. v. 1989, 大桃採集; 2頭, 安富祖, 14. viii. 1987, 上野採集; 1頭, 残波岬, 25. vi. 1989, 上野採集, 以上佐々治保存。

分布: 日本(沖縄県), 北米, メキシコ。

体長, 体形などナミテントウに似る。背面は淡黄色を帯びた灰色で, 基本型は基方に4個, 中央に3個, 後方に1個の黒紋があり, 第2段内方の紋が大きくV字形。ナミテントウのように斑紋変異に富むが, 沖縄で見られるものはいずれも基本型。

日本(沖縄)で最初に採集された記録は1987年で, その頃すでに沖縄島南部で普通だったというし, 距離的にかなり離れた所でも生息が見られているので, 沖縄への移入はその何年前であったと思われる。*Olla* 属は1種とされていたが最近詳しい研究がなされ, 中・南米に3種が追加された(VANDENBERG, 1992)。

***Psyllobora vigintimaculata* (SAY)**

クモガタテントウ

Coccinella 20-maculata SAY, 1824, J. Acad. Nat. Sci. Philadelphia, 2: 96 (Missouri).

Psyllobora viginti-maculata: MULSANT, 1850: 183; GORDON, 1985: 826.

日本からの記録: 東京都大田区大井埠頭埋立地—24. vi. 1984以降多数; 大田区西六郷(窪木幹夫・和泉敦夫, 1985); 川崎市川崎区(松原 豊, 1986); 品川区南大井(岩田隆太郎・菅井伸一, 1989)。視検標本: 2頭, 大田区大井埠頭, 24. vi. 1984, 和泉採集, 他若干。

分布: 日本(本州), 南部アラスカ, カナダ, USA~北部メキシコ。

体長 1.75~3.0 mm, やや長目の半球形, 淡黄褐色地に黒褐~淡褐色の斑紋が基本的には前胸背板に2対, 鞘翅に各2-3-3-1があり, それぞれ融合したり, 消失したりし, また濃淡も著しく雲状を示す。白渋病菌(ウドンコ病菌)を食べ, 大井埠頭や多摩川河原ではセイタカアワダチソウ寄生の白渋病菌を食している由である。すでに分布が広がっており, 既知分布地からみて越冬も十分可能であるから定着

することは確実であろう。

以上 1985 年以降のテントウムシ科 10 種の記録を紹介したが、そのうち、メダマテントウとクロメダマテントウは新種として記載されたもので、タイラヒメテントウとシロスジテントウは広域分布種であるが従来見過ごされていたものであろう。ヨツボシツヤテントウ、ケブカメツブテントウ、ミスジキイロテントウは近隣アジア地域から、ハラアカクロテントウ、ハイイロテントウ、クモガタテントウは北米からの、特に後 2 種は外国船による移入種と考えられる。いずれも捕食性又は菌食性で害虫となる可能性はないが、生態系の攪乱という点から配慮すると喜んでだけはおれない。植物検疫制度を誇る日本でもわずか 7 年という短期間にこれだけ多くの種が新しく加わったことは驚くべきことである。

参考文献

- 東 清二, 1985. 日本未記録の美しいテントウムシ. 昆虫と自然, 20 (14): 16.
- GORDON, R. D., 1985. The Coccinellidae (Coleoptera) of America North of Mexico. *J. N. Y. entom. Soc.*, 93: 1-912.
- 市川顯彦, 1986. ミスジキイロテントウを大阪市で採集. *Nature Study*, 12: 131.
- 岩田隆太郎・菅井伸一, 1989. 東京都下におけるクモガタテントウの追加記録. 月刊むし, (226): 10.
- 金 鐘国・森本 桂, 1987. 日本新記録のテントウムシ *Rhyzobius forestieri* とその生態. 日本昆虫学会第 47 回大会講演要旨: 35.
- 窪木幹夫・和泉敦夫, 1985. 日本初記録の *Psyllobora* 属のテントウムシ. 甲虫ニュース, (67/68): 11.
- 楠井善久, 1989. ハイイロテントウ浜比嘉島(沖縄島)にも分布. 月刊むし, (226): 11-12.
- MIYATAKE, M., 1961. The East-Asian coccinellid-beetles preserved in California Academy of Sciences. Tribe Hyperaspini. *Mem. Ehime Univ. Sect. VI*, 6: 147-155.
- 1970. The East-Asian coccinellid-beetles preserved in California Academy of Sciences. Tribe Chilocorini. *Ibid.*, 14: 303-340.
- 野田正美・今坂正一, 1989. 長崎市でギョウトクテントウを採集. 月刊むし, (223): 41-42.
- 岡田正哉, 1986. 日本新記録のテントウムシ. 同上, (184): 38.
- 大桃定洋・佐々治寛之, 1989. 北米産ハイイロテントウ(新称)を沖縄本島で採集. 同上, (223): 38.
- POPE, R. D., 1981. '*Rhyzobius ventralis*' (Coleoptera: Coccinellidae), its constituent species, and their taxonomy and historical roles in biological control. *Bull. entom. Res.*, 71: 19-31.
- SASAJI, H., 1982. A revision of the Formosan Coccinellidae (III). Subfamily Coccinellinae (Coleoptera). *Mem. Fac. Educ. Fukui Univ.*, Ser. II, (31): 1-49.
- 1988. Contribution to the taxonomy of the superfamily Cucujoidea (Coleoptera) of Japan and her adjacent districts, V. *Ibid.*, (38): 5-26.
- 1989a. Ditto, VI. *Ibid.*, (39): 11-25.
- 佐々治寛之, 1989b. ヨツボシツヤテントウ(新称)日本に産す. 月刊むし, (226): 6.
- 上野輝久, 1988a. 日本から初めて記録されるヒメテントウ. 同上, (201): 38-39.
- 1988b. メツブテントウ亜科の日本新記録種. 同上, (211): 34.
- ・佐々治寛之, 1989. ハイイロテントウは沖縄本島に定着している. 同上, (223): 38.
- VANDEBERG, N. J., 1992. Revision of the New World lady beetles of the genus *Olla* and description of a new allied genus (Coleoptera: Coccinellidae). *Ann. entom. Soc. Amer.*, 85: 370-392.

(福井大学教育学部)

○シロスジコガネのオホーツク海側からの記録

北海道におけるシロスジコガネ *Polyphylla albolineata* (MOTSCHULSKY) の分布は、日本海側は留萌支庁の苫前町、太平洋側からは日高支庁の門別町までが記録されているが、オホーツク海側(網走支庁)からは未だ記録されていない。そこで、ここに最近の記録を含めて確認できたすべての記録を公表しておきたい。北海道の海岸地帯にはかなり広く分布しているようである。

網走市北浜(灯火), 1 ♂, 4. viii. 1977; 2 ♀♀, 1. ix. 1977; 1 ♀, 15. vii. 1986; 2 ♀♀, 12. viii. 1986; 2 ♀♀, 26. viii. 1986; 18♂♂3 ♀♀, 26-28. 1987; 1 ♀, 9. viii. 1987; 7 ♀♀, 16-18. viii. 1987; 10♂♂1 ♀, 31. vii. 1988; 1 ♀, 31. vii. 1990. 山田訓二採集; 網走市海岸町(灯火), 1 ♀, 31. vii. 1977, 山田訓二採集; 網走市藻琴橋(灯火), 2 ♂♂1 ♀, 28. vii. 1987, 山田訓二採集; 網走市呼人, 1 ♀, 12. viii. 1990, 山田訓二採集. 斜里郡小清水町原生花園(灯火), 1 ♂1 ♀, 27. vii. 1985; 1 ♀, 19. viii. 1986, 6 ♂♂1 ♀,

24. vii. 1987, 山田訓二採集; 斜里郡小清水町北斗, 1 ♂, 25. vii-10. viii. 1967; 3 ♂♂, 24. vii. 1992 (ブラックライト); 13♂♂4 ♀♀, 29. vii. 1992 (ブラックライト), 川原 進採集.

なお、鳥取県産の標本と雄交尾器の比較を行ったが、ほとんど差異は見出だせなかった。体長も 30 mm 前後で、目立って小型の個体も見られなかった。これらの標本は、山田氏採集のものは同氏が保管し、他は川原と加藤が保管している。また、一部の標本は北見市立北網圏北見文化センターで保管している。

末筆ながら、貴重な資料の公表を快諾された網走市の山田訓二氏に心から感謝する。また、日頃からたいへんお世話になっている同センターの職員の方々にも深謝する。

参考文献

- 清水昭平, 1992. 月刊むし, (252): 39.
(北海道北見市, 加藤敏行; 同斜里郡, 川原 進)

コメツキムシ科の亜科・族の高次分類について

大平仁夫

CROWSON (1961) はその論文で LACORDAIRE (1857) が「La classification de la famille présente des difficultés excessives et peut-être insolubles」と述べていると書いているが、LACORDAIRE (1801-1870) 以後 CANDÈZE (1827-1898) や FLEUTIAUX (1858-1951) など、その生涯を本科の研究に打ち込んだ研究者の努力にもかかわらず、本科の高次分類体系はまだその緒についたばかりの印象を受ける。一方、幼虫の形態からの分類は HYSLOP (1917) や GLEN (1950) や DOLIN (1978) などを始め多くの研究者により試みられてきたが、成虫に比して種名が判明しているのはまだごくわずかなため、全体像を確立するまでには至っていない。しかし、これら幼虫と成虫の分類を総合的に扱いて、体系化を試みたのが CROWSON (1961) の研究であり、それを基盤にして再構築を試みたのが STIBICK (1979) の研究である。この STIBICK の研究の概要は菊田 (1984) が紹介している。さらに、STIBICK の高次分類体系を部分的に手直したのが KISHII (1987) の研究である。また、日本に STIBICK の体系を最初に導入したのは岸井・山屋 (1987) である。筆者は STIBICK (1979) のこの体系に興味を持って研究を続けてきたが、ここでは日頃考えている 2・3 の問題にふれてみたいと思う。

1. 中肢基節腔をとりまく中胸腹板と後胸腹板の形態

中肢基節腔が中胸腹板と後胸腹板とによって完全に囲まれている (図, A, B, C) か、外方が開いている (図, D, E, F) かは本科の系統を推察する形態として古くから注目されてきており、STIBICK (1979) はこれによって本科は 2 系統に分類されるとしている。完全に囲まれているのはサビキコリ類 (図, A), ミズギワコメツキ類 (図, B) とハナコメツキ類 (図, C) である。KISHII (1987) の研究も STIBICK の体系にほぼ沿ったものであるが、サビキコリ類 (図, A) も同様な特徴を有することから族から亜科に昇格して位置付けている。

中肢基節腔をとりまくこれら中・後胸腹板の形態

は、本科の系統を推察する上での重要な特徴であることは間違いないが、外方部 (図の↑印) が閉じているか開いているかの形態には種々の段階が見られる。開いているのか閉じる方向の場合は例外なく後胸腹板の内角部が厚味を増し、そこが拡大・伸長することにより中胸腹板に接近または達している (図, D, E)。ここが閉じているか開いているかということは、中胸後側板 (mesepimeren) の形態も含め、種の分化過程で二次的に生じたもののようで、STIBICK (1979) や KISHII (1987) が考えたように本科を 2 系統に分けるための最も基本的な特徴にはならないように思われる。幼虫の研究においても、成虫のこの形態による分類との符号性が一部にしか見られないことは、この形態をもとに系統を分ける基本的なものとして扱うには若干の無理があることを示しているように思われる。

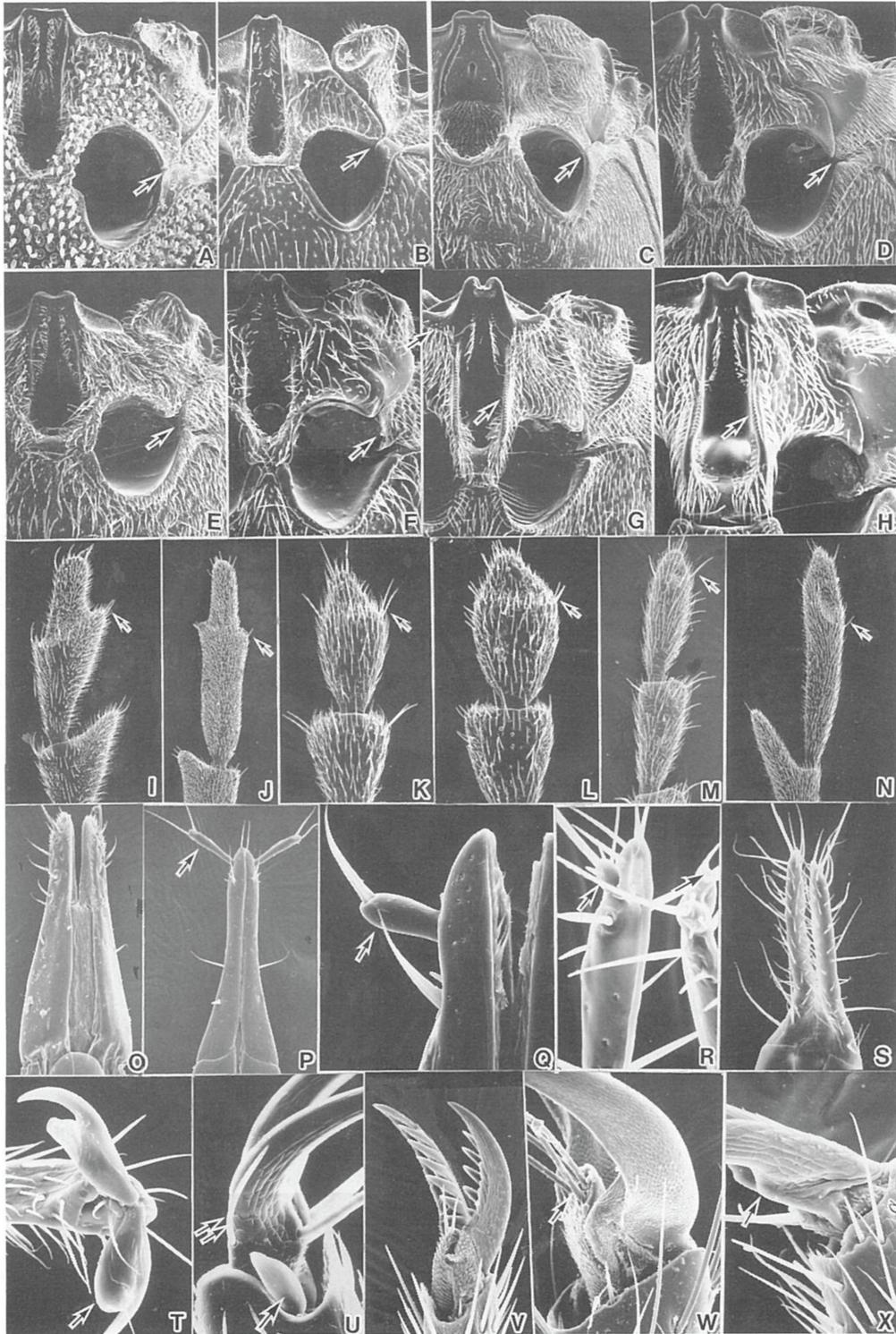
2. 中胸腹板溝側縁の形態

筆者は幼虫の研究において、クチプトコメツキ属 (*Parasilesis*) やクチボソコメツキ属 (*Glyphonyx*) は極めて近縁で、これらは同属でも不自然ではないことを示したが、さらにカバイロコメツキ属 (*Agriotes*) やムナボソコメツキ属 (*Ectinus*) とも近縁であることは、幼虫の研究を待つまでもなく、成虫の中胸腹板溝縁の形態の相同性からも示されている。これらは図 G, H に示したように、共通して側縁にヤスリ状の段刻が生じている。図 G はキアシムナボソコメツキ (*Ectinus sepes*) で図 B はクチプトコメツキ (*Parasilesis musculus*) である。KISHII (1987) による系統表では、これらの所属は Elaterini 族をよんで両側に置かれているだけでなくクチプトコメツキ属は Adrastini 族にムナボソコメツキ属は Agriotini 族に含めているが、これは実体に合わない位置であると考えられる。

3. 触角の末端節の形態

コメツキムシ類の触角は通常 11 節で、日本では未知であるが稀に 12 節のものが分布しており、東南アジアに分布する *Ceropectus messi* などはその代表種である。11 節より少ないのは奇形と考えら

図説明 A~E, 中肢基節腔を囲む中胸腹板と後胸腹板: A, ヒメサビキコリ (*Agrypnus scrofa*); B, ミズギワコメツキ (*Fleutiauxellus curatus*); C, アカアシコハナコメツキ (*Paracardiophorus sequens*); D, ニセクチプトコメツキ (*Lanecarus palustris*); E, エゾヒサゴコメツキ (*Hypolithus aeneoniger*); F, メダカツヤハダコメツキ (*Hemicrepidius jactatus*). G~H, 中胸腹板溝側縁の鋸歯状部: -G, キアシムナボソコメツキ (*Ectinus sepes*); H, クチプトコメツキ (*Parasilesis musculus*). I~N, 雄触角の末端節: -I, オオナガコメツキ (*Elater sieboldi*); J, サカグチオオヒラタコメツキ (*Anthracalaus sakagutii*); K, ミヤマヒサゴコメツキ (*Hypolithus motschulskyi*); L, コガネコメツキ (*Selatosomus puncticolis*); M, アカアシコハナコメツキ (*Paracardiophorus sequens*); N, ダイミョウコメツキ (*Anostirus daimio*). O~S, 産卵管: -O, ヒメサビキコリ (*Agrypnus scrofa*); P, ヒゲナガコメツキ (*Neolrichophorus junior*); Q, アカアシクロコメツキ (*Ampedus japonicus*); R, チビヒサゴコメツキ (*Hypnoidus rivalis*); S, ジュウジミズギワコメツキ (*Fleutiauxellus cruciatus*). T~X, 後肢爪: -T, ウスチャミズギワコメツキ (*Oedostethus difficilis*); U, ヒメサビキコリ (*Agrypnus scrofa*); V, マルクビクシコメツキ (*Melanotus fortunei*); W, ヒゲコメツキ (*Pectocera fortunei*); X, カバイロコメツキ (*Ectinus sericeus*).



れる。筆者はかねてから本科の第11節(末端節)の形態に興味を持って調査を進めてきたが、すでに大平(1987)に若干紹介したように、第11節には明らかに11節と12節が融合したと思われる痕跡が見出される。ここに顕著な例としてオオナガコメツキ(*Elater sieboldi*) (図, I) とサカグチオオヒラタコメツキ(*Anthracalaus sakaguchii*) (図, J) を示した。これは第11節が途中でくびれ、そこに第10節の末端部に生ずる長毛と相同の長毛が生じている(↑印参照)。図I, Jに示したほどの明瞭なくびれが生じない種であっても、そこには長毛が必ず生じている。これは、一般に第11節と言われている節は、実際には11節と12節が融合したものであることを示していると思われる。今まで、この形態に注目した研究者はいないようであるが、これは、本科の高次分類には関わりのある古い形質を現わしている形態と考えられる。また、触角が12節の種がヒゲコメツキやクシヒゲコメツキ類に多く現れていることは、このグループが本科の中では古い型のものであることを暗示している。しかし、化石種の中でも、この節の融合過程を証拠づける例は知られていないので、融合はそれよりかなり古い時代の出来事であると思われる。

4. 産卵管の形態

本科の研究は、主として雄の形態を中心に進められてきており、交尾器の形態も雄が主役であった。最近では雌内部性生殖器の形態も一部で扱われているが、産卵管そのものの研究は少ない。

コメツキムシ類の産卵管は、図示(図, O-S)したようにさまざまな形をしているが、基本的には一対の細長い管(genital valvulus)と末端部に生ずる一対のstylus(図, P, Qの↑印)からなっている。このstylusはよく発達して棍棒状をしているもの(図, P, Q)、瘤状のもの(図, R, S)、stylusが生じないもの(図, O)などが存在する。産卵管が角質化しているものは形態の観察は容易であるが、軟弱なものでは正確な外形がつかみにくい。また、産卵管の内側は溝状になっていて、左右の管の間の溝に沿って卵が産出される。

産卵管の形態は、産卵場所(土中、朽ち木中など)には関係なく、属や族の系統と深い関連があるように思われる。例えば図Oのような産卵管を有するものはウバタマコメツキ類、サビコメツキ類、サビキコリ類、チビコメツキ類に共通しており、先端のstylusが瘤状のものはミズギワコメツキ類、ヒサゴコメツキ類、ハナコメツキ類で、残りの大部分は棍棒状のstylusを有している。この形態にもとずいて分類すれば、STIBICK(1979)の分類でのベニコメツキ亜科(Denticollinae)やコメツキ亜科(Elaterinae)などに含まれる族は更に細分されるべきで、同一族の中に、異系統のものが混在している。同様にヒサゴコメツキ亜科(Hypnoidinae)がミズギワコメツキ亜科(Negastrinae)と別の系統に置かれているのは理解出来ないし、Kishii(1987)のようにサ

ビキコリ族(Agrypnini)やチビコメツキ族(Conoderini)を亜科に昇格させることも不自然である。また、STIBICK(1979)の研究では従来のヒラタコメツキ亜科(Ctenicerinae)の種はすべてヒラタコメツキ族(Ctenicerini)のなかに一括して含めている。一例を上げれば、少なくともシモフリコメツキ属(*Actenicerus*)は異質で、成虫の産卵管の形態はもとより、幼虫の第8腹節の気門の位置、さらに幼虫が湿地嗜好であるなど、他の属と同じ位置にランクさせることには疑問を感じないわけにはいかない。

5. 爪の形態

爪は内縁部が鋸歯状を呈するもの(図, V)や内縁基部が拡大するもの(図, T, X)などであるが、基部に剛毛を生ずるもの(図, U)と生じないもの(図, W)とは古くから本科の系統を知る重要な特徴とされてきた。前述のCROWSON(1961)もこの特徴を最も重視している。STIBICK(1979)やKISHII(1987)の研究では、この形態より中肢基節腔をとりまく腹板の形態をより重くみていることは前述のとおりである。

一般に爪に剛毛を生ずるものは爪間基部にある褥板(empodium)の発達が悪いようである。爪は鎌状に湾曲、内側基部は多少とも拡大するものが多い。爪の剛毛は通常爪の基部に生ずるが、ときに背部にも生ずることがある(図, Uの↑↑印)。爪の表面には多くのしわが見られ、しわの先端が尖り、あたか魚鱗の重なりように見られるものもあるし、表面に軟毛を生じているものもある。しかし、ここでいう剛毛は毛根を有する太い毛のことであり、他の毛とは明らかに異なったものである。その他、ふ節の第5節末端縁は、一般に剛毛を生じているが、ヒメサビキコリの仲間では鱗片状の扁平状毛を生じている(図, Uの↑印)。この毛の存在については大平(1987)が紹介しているが、機能は不明である。

爪の基部に剛毛が生じているのは、KISHII(1987)の体系ではサビキコリ亜科(Agrypninae)、ウバタマコメツキ亜科(Pyrophorinae)、チビコメツキ亜科(Conoderinae)の3亜科で、STIBICK(1979)はこれらをPyrophorinaeの1亜科にまとめている。この仲間は幼虫の形態とも符号性があり、この剛毛の存在は極めて重要な特徴と考えられる。この分類体系での位置づけについてはSTIBICK(1979)の方が合理的のように思われる。

あとがき

STIBICK(1979)の論文は説明が簡略で裏面に隠されている意味を理解しないと意とするとところが解らないため、一見極めて難解であることは菊田(1984)が述べている通りであるが、この論文で最も意欲的なのは、幼虫と成虫の分類の統合を試み、CROWSON(1961)の研究をさらに発展させたことにあると考えられる。成虫に比して幼虫の研究が遅れている現状では、まとめに若干の無理が生じて止むを得ないことと思われる。また、この論文で一番難解なのは

は、ミズギワコメツキ類とハナコメツキ類とは系統では近縁としていることである。成虫における交尾器、中肢基節腔周辺の形態の類似性、さらに幼虫の気門の位置の類似性などは実際は相似であって、相同ではないのではないかと疑問が残されている。幼虫には一般に扁平状で第9腹節に urogomphus を有する型と円筒状で第9腹節には urogomphus を欠く型があることは周知のことである。ミズギワコメツキ類の幼虫は扁平型で、明瞭な urogomphus を有するし、ハナコメツキ類は円筒型で、第9腹節は円錐形状をしている。ミズギワコメツキ類の幼虫の腹節の側背板は1枚でその上縁に気門が位置しており、ハナコメツキ類も側背板は1枚で気門はその上縁に位置している。円筒型の幼虫の腹節の側背板は通常1枚で背板と一部融合している場合が多く、気門は背板中に生じている。しかし、側背板が分離しているオオナガコメツキ (*Elater sieboldi*) やヒゲナガコメツキ (*Neotrichophorus junior*) などもあり、ハナコメツキ類のそれはこれがさらに分化したものとも考えることも可能のように思われる。幼虫においては、気門の位置以外にミズギワコメツキ亜科との形態上の符号性がないのは気になることである。いずれにしても、この両亜科はコメツキムシ科の中では異質な存在であることは間違いないと思われる。また、クシコメツキ亜科 (*Melanotinae*) が円筒形状の幼虫群を束ねたコメツキ亜科 (*Elaterinae*) から分離して独立の亜科に位置しているのもよく理解できない。日本の本科の実体は、成虫の種の段階ではかなりよくわかってきたように思われるが、より上位の属、亜科の高次分類はまだ不明のところが多く残されている。その上、幼虫の研究は筆者 (1962) の研究以後の進展が殆どない状態であるので、多くの問題は今後の研究に待たなくてはならない。いずれにしても、STIBICK (1979) の研究をさらに完全なものにするためには、幼虫の研究が不可欠であると考え。

日本のコメツキムシ科を系統的にどのように分類するかは、それぞれの考えがあり、いずれは適切な位置に落ち着くものとも考えるが、命名法上では亜科の

下に族を設けなくてはならないということではない。STIBICK (1979) や KISHII (1987) の体系では、少数の亜科の下に多くの族を置いているが、本質的には従来の分類体系と著しくかけ離れたものではないと理解している。紙面の都合で意を尽くせないもので、筆者の考えはいづれ別の機会に明らかにしたいと考えている。終わりに、本文について有意義な意見をいただいた鈴木互博士に心から御礼申しあげる。

引用文献

- CROWSON, R. A., 1961. On some new characters of classificatory importance in adoult of Elateridae (Coleoptera). *Ent. monthl. Mag.*, **96**: 158-164.
- DOLIN, V. G., 1978. Table for identification of click beetles larvae of the USSR fauna: 1-127 (Kiev.) (U.S. Dep. Agr., 英訳版, 1981).
- GLEN, R., 1950. Larvae of the elaterid beetles of the Tribe Lepturoidini (Coleoptera: Elateridae). *Smith. Misc. Coll.*, **111** (11): 1-246.
- HYSLOP, J. A., 1917. The phylogeny of the Elateridae based on larval characters. *Ann. ent. Soc. Amer.*, **10**: 241-263.
- 菊田 毅, 1984. STIBICK によるコメツキムシ科の分類。コレオプテリスト, **1** (3): 1-9.
- 岸井 尚・山屋茂人, 1984. 新潟県湯沢町八木沢のコメツキムシ (新潟県湯沢町八木沢の甲虫, 第11報)。長岡市科学博物館研究報告, (9): 41-53.
- KISHII, T., 1987. A taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera) with the keys to the subfamilies, tribes and genera: 1-262, 61pls. (Kyoto)
- 大平仁夫, 1962. 日本産コメツキムシ科の幼虫の形態学的ならびに分類学的研究: 1-179, 61pls. (岡崎)
- 1987. ヒメサビキコリ類のふ節末端部の形態。北九州の甲虫, **33** (2): 74.
- 1987. サカグチオオヒラタコメツキの触角について。北九州の甲虫, **34** (3): 190.
- STIBICK, J. N. L., 1979. Classification of the Elateridae (Coleoptera). Relationships and classification of the subfamilies and tribes. *Pacific Ins.*, **20** (2/3): 145-186.

(愛知県岡崎市)

○キウチミジンクスイ埼玉県の記録

キウチミジンクスイ *Propalticus kiuchii* SASAJI, 1971 は四国面河溪産の標本に基づき記載された種で、その後福井県でも採集されている。佐々治の概説 [1979, 本誌 (48): 3.] によれば、かなり広く分布しているとされるが、微小種のためか上記以外の記録はないようである。筆者の手許に埼玉県産の標本があるので報告しておきたい。

1頭, 埼玉県秩父郡横瀬町二子山, 13. vi. 1982, 筆者採集。 (埼玉県富士見市, 小田 博)

○神奈川県におけるオカモトツヤアナハネムシの記録

オカモトツヤアナハネムシ *Tosadendroides oka-*

motoi KÔNO はかなり稀な種で、採集記録はきわめて少ないようであるが、筆者は次のとおり神奈川県において本種を採集しているので報告する。

1♂, 神奈川県丹沢三国山, 6. vi. 1992, 筆者採集。

採集された環境はブナの原生林中の下草の葉上で、つやのある上翅から、最初はヒナクリハナカミキリかハムシの一種のように見えたが、実際に捕えてみると本種であり、歓喜したものである。本種を採集するにあたってのヒントになればと報告する次第である。なお、本種は神奈川県新記録である。

末筆ながら、本種の同定を確認していただいた平野幸彦氏に厚くお礼申し上げます。

(神奈川県平塚市, 高橋和弘)

独立種ワルサワダケヒメハナカミキリについて*

齊藤秀生・宮下徳子

ワルサワダケヒメハナカミキリ *Pidonia testacea warusawadakensis* OHBAYASHI, 1959 は、静岡県悪沢岳産の4雄3雌、山梨県白根山広河原の2雄2雌により、原型では各上翅の白色斑紋が上下に二分するのに対して、これらの個体群ではこの白色斑紋が上翅中央部の会合線付近で連絡する、という点で別亜種として記載された(図1)。

その後、1963年北隆館の原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫篇)に本亜種が初めて写真で紹介され、「前胸背両側の隆起が幾分強く、上翅の黄白色紋が背面で弓形に連続する」と記述された。この図鑑によって一般に紹介された本亜種は、本来南アルプス地域のみ生息するものであったが、この形態的記述から、菅井(1966)は奥蓼科北八ヶ岳の標高1,500-1,880 mから獲られた個体群を本亜種と同定し記録した。さらに林(1969)では、*testacea* ニセフタオビチビハナカミキリを *puziloi* フタオビチビハナカミキリの亜種とした上で、*warusawadakensis* については、形態的特徴が *testacea* と判断される個体群と *warusawadakensis* と判断される個体群とが同所に共に生息しているという理由から、本個体群を *f. warusawadakensis* とし亜種より下位の form とした。同年、現在のようにカミキリムシ愛好者を増やすことに最も貢献したと考えられる、小島・林の保育社原色日本昆虫生態図鑑Iカミキリ編が発行されたが、これには *warusawadakensis* の記述はなかった。これにより、一般のカミキリムシ愛好者からは本個体群がその存在を知られることもなく、*Pidonia* 類の研究者には *warusawadakensis* と *testacea*

が長く混同されていった。これらの混同は、本個体群の特徴をあくまでも上翅斑紋としていたことが原因であった。

その後、日本のカミキリムシの総説やチェックリストにおいても、本個体群は特に注目された扱いはうけなかった。草間(1973)では大林の扱いに従い亜種として、中根(1984)では、*testacea* との違いを上翅斑紋としたうえで、*ab. warusawadakensis* とした。また、窪木(1979)は日本の *puziloi*-group の総合的な分類学的再検討を行い、この中で *testacea* について検討されており *warusawadakensis* 個体群については *testacea* に含めて検討されていたのである。この中で調査に用いられたサンプルの中に南アルプス仙丈ヶ岳産の個体群が含まれており、これらを検討した結果として、本個体群の記述を行ったのである。これによれば、標高1,500-2,400 mでは原型(*testacea* 個体群)が、2,000-3,000 mの範囲には *warusawadakensis* が現れるとされているが、結論として上翅斑紋の違いから南アルプス地域に現れる高山地域型とされた。さらに、林(1980)のチェックリストでは全く扱われず、窪木(1984)の日本産カミキリ大図鑑でも *testacea* に含めコメントしているにすぎない。

筆者の一人齊藤は、以前より下村徹氏の指摘を受け、本個体群の独立種としての根拠を模索しており、機会を得て日本産カミキリムシ検索図説の *Pidonia* 類を担当した。その際大林延夫博士のご好意により *warusawadakensis* の基準標本などを検することができた。上記の問題に対する結論はすでに *Elytra*, 20 (2) において氏が発表された通りである。

これまで *warusawadakensis* 個体群が独立種であることの実験的判明が遅れた原因は、「*Testacea* は各上翅の白色斑紋が上下に二分し、本個体群はこの白色斑紋が上翅中央部の会合線付近で連絡する」ことを最も重要な区別点としたことで、その内容は大きく次の2点に整理することができる。

第1は本個体群と *testacea* との違いや特徴を上翅の白色斑紋としたことであろう。図2に示したように、原記載に記述されている図1の左(Holotype)と右(Allotype)のように上翅の白色斑紋が顕著に弓状になる個体は全体としてはむしろ少ない。雄では中間部分でやや細くなる白色の弓状紋を有する個体が多く、前後に分断する白色紋を持つものも少なくない。雌ではほとんどの個体がこの白色紋を前後に分断しているため *testacea* と酷似するものが多い。このように真の *warusawadakensis* の中にも原記載の記述内容に合致せず、むしろ *testacea* に含まれてしまうものがあり、このことにより両種が同一種のように思われたのである。



図1. ワルサワダケヒメハナカミキリ。
左: 雄(Holotype), 右: 雌(Allotype)。

* Notes on *Pidonia warusawadakensis*.

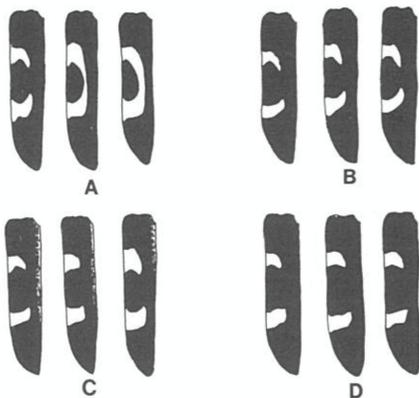


図2. *Pidonia* 2種の上翅斑紋変異。
A, B: *P. warusawadakensis*; C, D: *P. testacea*;
A, C: 雄; B, D: 雌。

第2に、もう一方の *testacea* の中にも北八ヶ岳や苗場山の個体群の一部に、この白色紋のつながる傾向を有する個体が現れるのである。したがって、本個体群のような上翅斑紋は各地で個体変異的な出現をしているように誤解されたのである。さらに、南アルプスの真の *warusawadakensis* 雄個体の前胸背が赤褐色であることと、通常の *testacea* 雄個体の前胸背が一様に黒色であるのに対し、北アルプスや紀伊半島などの高地に現れる *testacea* の雄個体が赤褐色の前胸背を有していることから、あたかも南アルプスの *warusawadakensis* もこのような *testacea* の高山型と思われたのである。

以上のように、いずれも *Pidonia* 類にありがちな上翅斑紋の形や前胸背の色彩などの変異の内容を的確に把握しきれないにもかかわらず、これらの形質を重視して分類してしまったことが、これまでこの2種が混同されていた原因である。したがって、今後この2種を正確に同定するためには次のような点を総合的に判断して行うことをおすすめする。

Warusawadakensis は上翅の白色斑紋が上翅中央部の会合線付近で連絡するという傾向はあるが、全ての個体がそうではない。*Testacea* は各上翅の白色斑紋が上下に二分するが、雄個体には稀に連絡する傾向を示すものもある。全体傾向としては、前者は雌雄ともこの白色紋は上翅の中央部に向かいそれぞれ斜めに傾くが、後者は前後の紋が平行に横に並ぶ傾向がある。雄の前胸背の色彩は両種を区別する特徴にはならない。

さらに今回の調査では、雄：前付節の第2節は、前者ではより幅広く短い、後者はより細長い。前胸背中央の点刻を欠く部分は、前者は広く円形できわめて不明瞭、後者は縦長で明瞭である。腹部先端は腹面から見て、前者は腹部第8背板の先端部が僅かに見えるが、後者は腹部第8背板が顕著に突出し

て見える。雌：触角は前者では第4, 6, 8, 9, 10節がほぼ同長で、後者は第6, 8節がほぼ同長で4, 9, 10節はこれより長い(なお、両種に似た *oyamae* オヤマヒメハナカミキリでは第6, 7節がほぼ同長で4, 8, 9, 10節がこれより短い)。前付節の第2節は、前者でより幅広く短い、後者はより細長く、この傾向は第1節ではさらに顕著である。腹部腹面は、前者で黒色後者で主に赤褐色である。また雌雄とも体長に対する触角の長さ、前者では明らかに後者より短いということも区別点になる。

また雄交尾器にも顕著な違いがある。図3のAとBのように median lobe は側方の観察から全体に前者の方がより細長く、先端部の ventral plate は背面からの観察で、Cのように前者で徐々に狭まり全体に長く尖り、Dのように後者では全体に円く最先端部分で鋭く突出する。Lateral lobes は背面からの観察で、Eのように前者では全体に幅広く、先端部の各 paramere は全体に幅広く短くて基部1/2で融合しているが、Fのように後者では全体に基部1/3で細く先端部2/3で幅広、各 paramere はより細長くそれぞれ顕著である。また、腹部第8背板の先端外縁では背面からの観察で、Gのように前者は直線的で中央部でややへこむが、Hのように後者では中央部で突出する円形である。

今年の8月11日から13日に実施した山梨県芦安村の調査では、標高1,500mの広河原では *warusawadakensis* は獲られず、大滝沢・二股コースの標高2,000mまでは *testacea* のみであり、前者が獲られたのは2,090mを越えたあたりからであった。さらに、北沢峠2,050m付近や仙水峠登山道1,980-2,100mではこの両種が共に同じ花上から獲られ、前種の方がはるかに個体数が多かった。また、北沢峠から小仙丈岳方面の登山道では、途中針葉樹林の林内に開花している花がなかったため確認できなかったが、2,480-2,500mの地点で開花しているヤグルマソウ、ヤマブキショウマから前者のみが多数獲られた。

北沢峠では、*warusawadakensis* はオニシモツケやショウマ類にも訪花しており、特に *testacea* と異なった訪花の嗜好性があるようには見えなかった。両種が混生する場所では、同じ株の花に体を接するほどの距離で全く混じって生活していた。おそらく窪木(前述)の指摘のように、「およそ2,000m標高から上部に前者が生息し、後者はやや低い2千数百m以下の範囲に生息している」という点以外は、目立った生態的なすみわけや環境選好性の違いはないように感じられた。

今回は、下村(1992)を踏まえて *Pidonia warusawadakensis* をワルサワダケヒメハナカミキリとして *Pidonia testacea* ニセフタオビヒメハナカミキリとは別の種としての扱いを支持すると共に、その形態的特徴と両種の区別点について紹介した。また、今年予備調査として行った山梨県芦安村での両種の生息状況について若干の知見をまとめて示し

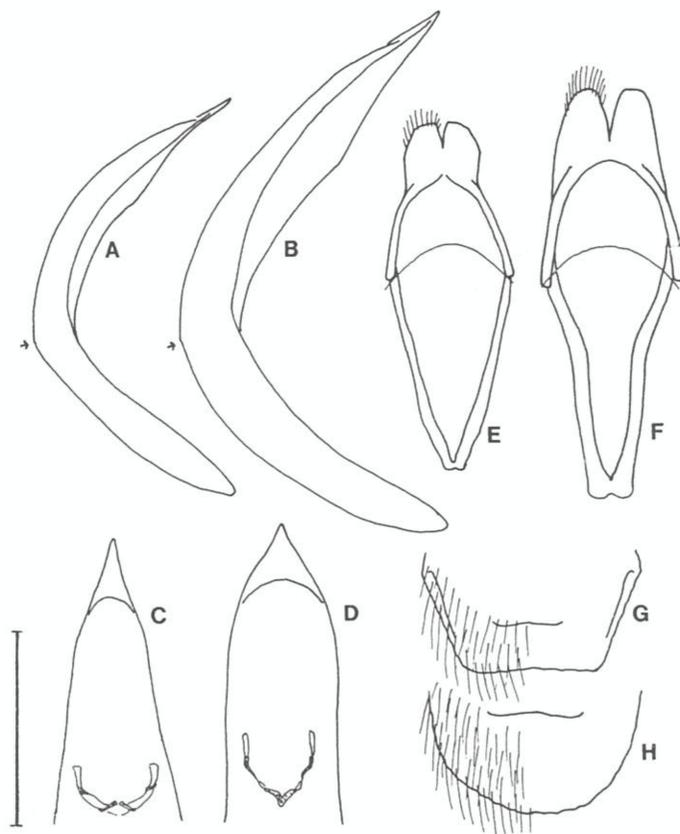


図3. *Pidonia* 2種の雄交尾器など(スケール: 0.25 mm).

A, C, E, G: *P. warusawadakensis*; B, D, F, H: *P. testacea*; A, B: median lobe (側面); C, D: median lobeの先端部(背面); E, F: lateral lobes (側面); G, H: 腹部第8背板(背面).

た。本種は南アルプス地域の高標高地に限って生息する種であり、他の山系には見られないものであると考えられるが、これまで正確に同定され記録されたことがないため、改めて分布調査を行う必要のある種である。今回の紹介によって今後、本種についての正確な知見がより多く得られることを期待する次第である。

なお、末筆ながら本種の基準標本を快く貸してくださった大林延夫博士に深く感謝すると共に、有益な助言をいただいた下村徹氏並びに現地調査で協力をいただいた山田荘一氏、特別保護地区内での採集許可の手続きを進めていただいた、富士箱根伊豆国立公園管理事務所並びに山梨県自然保護課担当諸氏に心からお礼申し上げる。

参考文献

HAYASHI, M., 1969. A monographic study of the lepturine genus *Pidonia* MULSANT (1863) with special reference to the ecological distribution and phylogenetical relation (Coleoptera: Cerambycidae) Part II. *Bull. Osaka Jonan Wom. Jr. Coll.*, 4: 94-95.

- 1980. Family Cerambycidae (Lepturinae). Check-list of Coleoptera of Japan, (19): 13.
- 小島圭三・林 匡夫, 1969. 原色日本昆虫生態図鑑 I, カミキリ編. 保育社, 大阪.
- KUBOKI, M., 1979. A taxonomic revision of the *puziloi*-group of *Pidonia* (Coleoptera: Cerambycidae) in Japan. *Kontyû, Tokyo*, 47: 249-257.
- 窪木幹夫, 1984. ヒメハナカミキリ属, 日本産カミキリ大図鑑. (p. 200). 講談社, 東京.
- 草間慶一, 1973. 日本産カミキリの生態と分布一覧表, 新しい昆虫採集案内 (III), (p. 23). 内田老鶴圃新社, 東京.
- 中根猛彦, 1984. 日本の甲虫 (14) かみきりむし科 9, 昆虫と自然, 9 (13): 7.
- OHYAYASHI, K., 1959. New Cerambycidae from Japan. (5). *Ent. Rev. Japan*, 10: 1.
- 大林一夫, 1963. カミキリムシ科, 原色昆虫大図鑑 II, (p. 237, pl. 137-2c, 2d). 北隆館, 東京.
- SHIMOMURA, T., 1992. *Pidonia* (*Omphalodera*) *warusawadakensis* OHYAYASHI (Coleoptera, Cerambycidae, Lepturinae), a distinct species. *Elytra*, 20: 235-240.
- 重井 博, 1966. 北八ヶ岳奥蔭科のカミキリ. すずむし, 16 (2-4): 32-33.
- (斉藤, 千葉市美浜区; 宮下, 埼玉県鶴ヶ島市)

ナガバヒメハナカミキリの触角にみられる変異について

窪木 幹 夫

ナガバヒメハナカミキリ *Pidonia signifera* は 1884 年、日光、大山、人吉の標本を用いて、H. W. BATES によって記載された。本種は、九州、四国、本州の低山帯から中山帯の落葉広葉樹林に生息し、二次林から原生林まで幅広い生活域を持っている。西日本地域から中部地方では出現個体数が多く、各地で普通に見られる。一方、東北地方ではヒメハナカミキリ成虫の活動期に調査しても、本種の生息を確認できない地域もあり、分布は局所的である。

S. & A. SAITO (1989) は、以前から雌の触角が白いナガバヒメハナと指摘されていた北陸地方の個体群を独立種と認め、ホクリクヒメハナカミキリ *P. jasha* として記載した。記載文によると、ホクリクヒメハナは、雌の触角 9~11 節に淡黄白色部を持ち、体全体が幅広く、触角の長さや交尾器にナガバヒメハナとは顕著な差がある。この論文では、ホクリクヒメハナは山梨県の大菩薩を含む関東地方のナガバヒメハナと比較されているので、扱われていない中間地域の中部地方太平洋地域の 5 地点を選び、触角の各形質について比較検討した。

表 1 はその結果をまとめたもので、触角の各形質は記載時に用いられたホクリクヒメハナとナガバヒメハナの区別点である。いずれの地域も雌雄それぞれ 10 個体以上を用いた。ただし、S. & A. SAITO (1989) の論文では、表 1 中の北陸地方の個体群は *P. jasha* として、関東地方の個体群は *P. signifera* として、それぞれ独立種とされている。

雌の触角 9~11 節の色

北陸地方の個体群は、雌の触角はほとんど黒色であるが、9 節の後半から 10 節そして 11 節の基部から 2/3 付近までが淡黄白色になる。この淡黄白色部は個体により変異がある。最も縮小した個体では、11 節の前半だけが淡黄褐色になるので、ルーベを使って、これを確認した。

調査した 5 個体群には、いずれも雌の触角先端付近が淡黄白色から淡黄褐色の個体が含まれていた。能郷白山(岐阜県根尾村)は、模式産地の夜叉ヶ池(福井県今庄町)の東、約 20 km にあり、両地点はともに福井・岐阜両県の県境となっている山系に位置する。ブナの原生林内の比較的明るい環境に咲くタニウツギの花から成虫が採集された。雌の触角先端付近が淡黄白色の個体は 90% を超えていた(図 1-2)。木曾山脈の南部長野県阿智村の個体群も雌の触角先端付近が淡黄褐色となる個体が、ほぼ 50% で認められた。周辺の飯田市松川入や大平の個体群にも同様な個体が発見された。天守山地の湯之奥(山梨県下部町)では、調査した 85% の雌個体の触角先端付近が淡黄白色であった(図 3-4)。富士川をはさみ、対岸の雨畑(山梨県早川町)の個体群も淡黄白色の雌個体が 80% を超えていた。触角淡黄白色個体は富士川の支流早川流域や夜叉神峠そして櫛形山のような南アルプスの前衛の山々や富士山、御坂山地でもみつかった。さらに、屏温泉(松本市)や大菩薩(塩山市)でも、ホクリクヒメハナと同じように、触角先端付近が淡黄褐色に抜ける雌個体がみつかった。雌の触角先端 9~11 節が淡黄白色から淡黄褐色になる個体は、中部地方だけでなく、紀伊半島(大台ヶ原山)、中国地方(高鉢山)、四国地方(不入山)、九州地方(深倉峯、大船林道、椎矢峠)の各個体群にも 5~35% の割合で認められた。すなわち、メラニン顆粒の減少による雌の触角先端付近の淡黄白色化現象は、程度の差はあるものの、中部地方以西に広く見られ、特に北陸地方と山梨県南部付近の個体群に高頻度で現れることが明らかになった。

雌の触角の長さ

ヒメハナカミキリの触角の長さは種によって比較的一定で、亜属や種の標徴として利用されている。

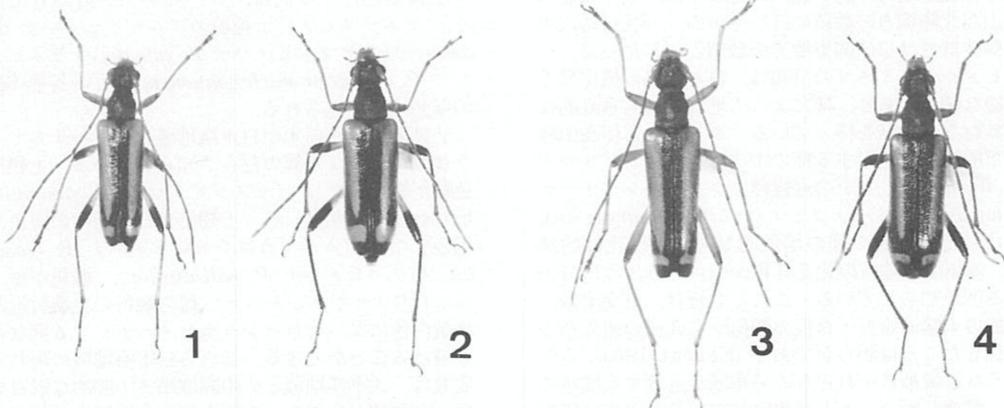


図 1~4. ナガバヒメハナカミキリ *Pidonia (Pidonia) signifera* (BATES). 1, 2: 岐阜県根尾村能郷白山産, 3, 4: 山梨県下部町湯之奥産, 1, 3: 雄; 2, 4: 雌.

表 1. 中部地方太平洋地域のナガバヒメハナカミキリの触角の比較.

触角の形質	個 体 群 名						
	北陸地方 ^{a)}	能郷白山	大日ヶ岳	阿智	櫛形山	湯之奥	関東地方 ^{a)}
[雌]							
6 節/5 節 (%)	70~80%	70~78%	71~79%	73~79%	71~78%	71~78%	70~75%
翅端に届く節数 ^{b)}	11 節	11 節時に ×	11 節	11 節時に 10 節	11 節	11 節	10 節
9~11 節の色 ^{c)}	Yb	Yb	Yb	YB	Yb	Yb	B
[雄]							
6 節/5 節 (%)	70~80%	73~82%	76~80%	75~82%	74~81%	75~82%	75~80%

a) S. & A. SAITO (1989) による. b) ×: 触角先端は翅端に届かない.

c) Yb: 淡黄白色個体の中に黒色個体が混じる個体群; YB: 淡黄白色個体と黒色個体がほぼ半々の割合でみられる個体群; B: 黒色の個体群.

一定の方法で触角を整えた標本は、充分に比較検討が可能である。標本の頭部を前胸部へ隙間なくはめ込み、口器を前方に向けて頭部を起し、触角を上翅に沿って後方へ伸ばし、翅端への到達の有無と触角のどの節で翅端を越えるかを調べた。

能郷白山の個体群は触角が短く、北陸地方の個体群と同様に 11 節で翅端に届く個体が多かったが、中には翅端に届かない個体もあった。しかし、大日ヶ岳(岐阜県高鷲村)以東の各個体群は、触角の 11 節の基部から中央付近で翅端を越える個体が多かった。阿智の個体群の中には触角が長い個体があり、10 節で翅端に届く個体もあった。このように、中部地方の雌個体の触角の長さは北陸地方と関東地方の中間的な長さになっている。

触角 5 節に対する 6 節の割合

11 節からなるヒメハナカミキリの触角のうち、5 節が最も長く、6 節以降 10 節まで次第に短くなる。各節の相対的な長さは種によって比較的一定で、種の標徴として用いられている。

中部地方の 5 個体群は、雌雄とも関東地方と北陸地方の中間的な数値になっていた。しかしながら、雌では北陸地方に近い傾向が認められ、雄では能郷白山が北陸地方の数値に近いもの、大日ヶ岳以東の個体群ではほぼ関東地方の数値と同じだった。

ヒメハナカミキリの分布は、日本列島の植生帯と密接な関係があり、種によって地理的にも垂直的にも特有な分布域を持っている。ブナ帯から亜高山性針葉樹林帯に生息する種の中にはヨコモシヒメハナ *P. insuturata* とその近縁種クロヨコモシヒメハナ *P. hayashii* やミチノクヒメハナ *P. hamadryas* のように、それぞれの種の地理的な分布域が比較的狭く、本州中部地方以北を 3 種が分けあうように分布する例が知られている。これら 3 種は、雄交尾器、雌雄の末節節腹板・背板の類似から共通の祖先から分化したことは明らかである (KUBOKI, 1981)。このような近縁種はそれぞれの分布域が近接する地域では、混棲したり、ともに生息しない分布の空白域をつくりだしたりする。混棲地では両種の垂直分布域

に差があったり、出現期がずれていたり、訪花植物に差が認められたりする (窪木, 1987)。このように、ブナ帯から亜高山帯に生息する 2 種以上の近縁種には、なんらかの地理的・生殖的隔離現象が見つかる。一方、低山帯からブナ帯に生息する種の多くは全国的に広い範囲に分布する。各地の標本を集めて比較してみると、全国型の分布をするヒメハナカミキリにはいろいろな変異が見つかる。1 つの種が広い範囲に分布域を占めれば、特定地域の個体群がその地域の環境に対して適応的变化を示す機会が多くなる。日本産ヒメハナカミキリの中では最も広い分布域を持ち、2 亜種に分けられるセスジヒメハナ *P. amentata* はその代表例であろう。本州に広く分布するキベリクロヒメハナ *P. discoidalis* も、西日本地域の個体群が赤色の前胸部を持つことで、ムネアカヒメハナという独立種とされていたこともある。

北陸地方の気候的特性がナガバヒメハナの変異をつくりだした。しかし、雌の触角が淡黄白色という形質は北陸地方だけの特徴ではなく、表日本地域にも現れることは、古い形質が中部地方の離れた地域に残されたものかもしれない。雌の触角の先端付近が淡黄白色化する例はナガバヒメハナばかりでなく、アムールヒメハナ種群のアムールヒメハナ *P. amurensis*、ヤマトヒメハナ *P. yamato*、シラネヒメハナ *P. obscurior michinokuensis* などの各個体群の雌個体にも見られる。

北陸地方以北の本州日本海地域のヒメハナカミキリには、様々な変異の存在が知られている。上翅黒色紋が縮小したり (セスジヒメハナ *P. amentata kurosawai*)、触角、肢、上翅を含む体全体の黒色が退色したり (ムネアカヨコモシヒメハナ *P. masakii*、ハクバヒメハナ *P. pallidicolor*)、触角が短くなったり (ナガバヒメハナ)、雌の触角の先端付近が淡黄白色になったり (シラネヒメハナ) する例などを挙げることができる。これら日本海地域に現れる変異は、太平洋地域との中間地域で中間的な形質を持った個体が出現し、本州の日本海地域に隔離されたものではない。その多くは太平洋地域と日本海地

域の環境の違いに対応したものである。中部地方のヒメハナカミキリは幼虫期に120~180日も土中で生活するのが普通である。日本海地域の多雪地域では、このうち60~150日も雪の下に埋もれる生活を営んでいる。この多雪気候が、日本海地域のヒメハナカミキリのいろいろな変異の要因の一つとなっていると思われる。また、これらの変異は多雪気候に対するヒメハナカミキリの適応的な形質を明らかにする重要な材料となるであろう。

北陸地方のナガバヒメハナの触角にみられる各形質は、関東地方の個体群と比較して、中間地域に中間的な個体が出現し、特に北陸地方に隔離されたものでないことが明らかになった。S. & A. SAITO (1989)によれば、ナガバヒメハナとホクリクヒメハナの雌雄交尾器には顕著な差があるとのこと、フィールドでの生態の調査も含め、ホクリクヒメハナの種の独立性を検討する必要がある。

○ムナビロナガゴミシ岡山県に産す

ムナビロナガゴミシ *Pterostichus abaciformis* STRANEQ は、前胸の基部が幅広く、雌の上翅は強い微細印刻のために鮫肌状で光沢が無い。また、雄交尾器は陰莖開口部に大きな黒色の骨片があり、一部が露出している。広義のナガゴミシ亜属のなかでも特徴的な種で、一見して他種と識別できる。分布域は、本州の中部から近畿北部にかけての山地帯で、福井県西端の青葉山が西限の分布記録として知られていた。

今年になって、筆者らは本種が岡山県に産することを確認し得たので、当県のみならず中国地方における初めての記録としてここに報告する。



1 ♀, 岡山県加茂町倉見, 3. viii. 1991, 野嶋宏一採集; 1 ♂, 岡山県中和村山乗山, 7. vi. 1992, 山地 治採集; 1 ♀, 岡山県加茂町倉見, 26. ix. 1992, 山地 治採集。

本種は、分布域が広いわりには地域変異が軽微で、岡山県産の個体も、中部地方産のそれに比較すると、やや小型で、各部にわずかな相違はあるが、

末筆ながら、ヒメハナカミキリの調査に常々ご協力いただいている武智昭一、筒井 謙、森川清志の各氏、また湯之奥のナガバヒメハナの情報を提供して下さった早川広文氏と阿智村のナガバヒメハナの標本を下さった吉沢尚広氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

BATES, H. W., 1884. Longicorn beetles of Japan. *J. Linn. Soc. London, (Zool.)*, 18: 205-262.
 KUBOKI, M., 1981. Study on the lepturine genus *Pidonia* MULSANT (Coleoptera, Cerambycidae), I. *Kontyû, Tokyo*, 49: 525-541.
 窪木幹夫, 1987. 日本の昆虫⑤ヒメハナカミキリ, 171pp + 8pls. 文一総合出版, 東京.
 SAITO, S. & A. SAITO, 1989. A new *Pidonia* (Coleoptera, Cerambycidae) from the Hokuriku district, central Japan. *Elytra, Tokyo*, 17: 193-199.

(東京都世田谷区)

とくに有意の差は認められない。なお、本種は樹林内に生息するため、溪畔や路傍の石起しではなかなか得難いが、林床に設置したトラップにはよく落ちる。今後、中国地方における追加記録を期待したい。末尾ながら貴重な標本のご援助を頂いた野嶋宏一氏に厚く御礼申し上げる。

(千葉県船橋市, 笠原須磨生; 岡山市, 山地 治)

○チャドクガの幼虫を捕食するゴミシ

ヒラタアトキリゴミシ *Parena cavipennis* (BATES, 1873) は樹上性で葉上や花上でよく見出される。捕食性であることは自明であるが具体的にどのようなものを捕食するのかについてははっきりした記録がない。しかし、本年(1992)9月6日に自宅(東京都世田谷区岡本)の庭先の寒椿に群って加害しているチャドクガ *Euproctis pseudoconsersa* (STRAND, 1914) の3令幼虫の群れの中で捕食している本種の1 ♀を発見したので記録しておく。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○ジブチ共和国(東アフリカ)のタマムシ

過日、本誌編集幹事の妹尾俊男博士より、同氏の友人が東アフリカの紅海の入口にあるジブチ(Djibouti)共和国で採集されたタマムシ1頭を頂戴した。この標本は、中近東から紅海沿岸地方にかけて分布する下記の種類であったが、まだジブチからの記録はないので、以下に記録して私の責を果したい。貴重な標本を恵下さった妹尾俊男博士に感謝する。

Lampetis catenulata (KLUG, 1829), 1 ♂, Dorale, Djibouti, E. Africa, 11. iii. 1992, Raymond Iiyama (飯山禮文) lgt. (東京都世田谷区, 黒沢良彦)

今年の春に、木村欣二氏より本誌のタイトルカットを5種類まとめて頂きました。どれも素晴らしくて本年はどれにしようかと迷いましたが、結局200号へ羽ばたいているジョウカイを選びました。

(T.S.)

日本のタمامシモドキ科に関する記録

森本 桂

タمامシモドキ科 Monommidae は日本から2種記載されているにもかかわらず、原記載以後全く採れない謎の甲虫である。台湾産の亜種は朽ち木やシイタケの柾木などから採集されているので、同好者の注意を喚起する目的で、今までの記録を整理してみた。

1: *Monomma? japonicum* MOTSCHULSKY, 1860

日本産昆虫総目録の編集を行っていた頃、気になりながらそのままにした種に MOTSCHULSKY が1860年 Khokodody (函館) から記載した *Monomma? japonicum* がある。この種はその後 LEWIS (1879), SCHÖNFELDT (1887), SCHENKLING (1931) のカタログで?をとって *Monomma* 属で記載されている。本種の原記載は下記の通りである。

Monomma? japonicum Motsch., *statura* Mon. *nigritae* Guér, *sed* *angustiore*, *elytrorum* *striis* *distincto* *punctatis*; *ovatum*, *postice* *subattenuatum*, *convexum*, *nitidum*, *nigrum*; *capite* *subconvexo*, *subtiliter* *punctulato*; *thorace* *transverso*, *convexo*, *punctulato*, *basi* *bisinuato*, *utrinque* *impresso*, *lateribus* *subarcuatis*, *angulis* *subrectis*, *anticis* *subrotundatis*, *non* *prominulis*; *elytris* *thorace* *vix* *latioribus*, *postice* *attenuatis*, *apice* *rotundatis*, *regulariter* *punctato-striatis*, *humeris* *subelevatis*. Long. $1\frac{1}{6}$ l. — lat. $\frac{4}{5}$ l.

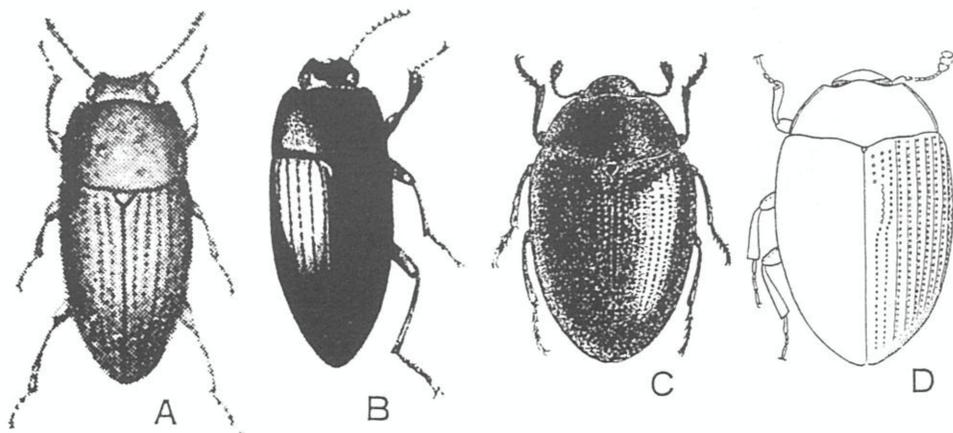
FREUDE (1955) はこの科のモノグラフで、原記載にある体長が3.5 mm で前胸前角が突出しないという点から本種を除外し、中根猛彦博士の意見のようにオオキノコムシ科の "*Tritoma nipponensis* MAAKI" (原文通り) あたりではないかとしている。原記載は確かにクロチビオオキノコに合致するが、CHŪJŌ (1969) や中根 (1958) による日本産オオキノコムシ科の総説には扱われていない。NIKITSKY

(1992) によると、本種はモスクワ大学の MOTSCHULSKY コレクションのタイプ標本になく、調査もされていないという。従って、*Monomma? japonicum* MOTSCHULSKY は所属不明のまま総目録から欠落する結果となった。

2: *Monomma glyphy sternum* MARSEUL, 1876

日本から記載されたもう1種のタمامシモドキ科は *Monomma glyphy sternum* で、LEWIS が "De Kiu-Siu, Nippon" から採集した標本に基づいて MARSEUL (1876) が記載している。この原記載に "Long. 10-11 mill., larg. 3. 3-5 mill." とした点がある。その後松村松年を混乱させた原因で、実際の体長は5-6 mm, 体幅は3-3.5 mm である (FREUDE, 1955)。松村 (1915) は日本人として初めて本科に擬吉丁蟲科の名を与えて解説し、"一見吉丁蟲に似たり" としてコメツキダマシ科とタمامシモドキ科の間に置き、また本種を初めて図示してトビイロタمامシモドキの和名を与えた。同じ図を松村 (1935) は再録し (図A), また1931年には原色で図示している (図B)。いずれの場合でも松村は体長を3分3厘または3分内外 (1分は3.03 mm) とし、図示した虫は長卵形をしている。原記載の体長が実物の2倍と誤っていたにもかかわらず、それに合う甲虫がいたということである。そして、その形からタمامシモドキという和名が与えられたのである。なお、松村や中根 (1963) らは種小名を *glyphy sternum* と綴っているが、*glyphy sternum* が原綴である。

この種は FREUDE (1955) によって詳細に研究され、台湾産の *formosanum* PIC, 1916 を含む7亜種に分割されている。この台湾亜種は三輪 (1938) によってタイワンタمامシモドキとして図示され (図



A, B: いわゆるトビイロタمامシモドキ (A: 松村, 1935; B: 松村, 1931 を複写)
C, D: 真のタمامシモドキ (C: 三輪, 1938 の台湾亜種; D: NIKITSKY, 1992 を複写)

C), またタمامシモドキとして中根(1963)と酒井(1985)が原色で図示している. NIKITSKY (1992) は本種の写生図(図D)を示したが, 日本産の原亜種であるかどうかは明らかでない.

3: オオキノコモドキへ和名改称の提案

松村が図示して本種とした甲虫の正体は, 北海道大学所蔵の標本を調べれば明らかになるが, 図から判断してゴミムシダマシ科のものである可能性が高い. 因に, *Monomma* 属は CASTELNAU (1840) によってゴミムシダマシ科に創設されている.

上述したように, 原記載の測定値に従って松村が図示した長楕円形の甲虫は, 明らかに同定の誤りで, 実物は図C, Dのように卵形をしている. 私も台湾と蘭嶼産の2種を調べたことがあるが, 松村のいうタمامシに似ているという感じはまるでなく, オオキノコムシ科のクロハバピロオオキノコやクロチビオオキノコかある種のゴミムシダマシ科に似ているというのが第一印象である. 中根や酒井の原色図を他の甲虫と見比べてほしい. 全く印象の異なる和名が本科につけられたことが, 原記載以降日本で採集されないことに多少とも関係している可能性がある. 科と *Monomma glyphysternum* の和名としてオオキノコモドキ科, オオキノコモドキと改称することを提案したい.

引用文献

- CASTELNAU, F. L., 1840. Histoire naturelle des animaux articulés. Ins. Col., II. 525pp., Paris.
- FREUDE, H., 1955. Die Monommiden der Welt. I. Teil: Die Monommiden der indo-australischen Region. *Ent. Arb. Frey*, 6 (1): 1-73, 10pls.
- LEWIS, G., 1879. A catalogue of Coleoptera from the Japanese archipelago. 31pp., London.
- MARSEUL, M. S.-A. DE, 1876. Coléoptères du Japon recueillis par M. GEORGES LEWIS. 2^e Mémoire, 2^e partie. *Ann. Soc. ent. Fr.*, [5] 6: 315-340.
- MOTSCHULSKY, V. D., 1860. Insectes du Japon. *Étud. Ent.*, 9: 4-41.
- NIKITSKY, N. B., 1992. Monommidae: 505-506. Identification of insects of the Far East of the USSR. III. Coleoptera(b). 704pp. Nauka, Sankt-Peterburg. (ロシア語)
- SCHENKLING, S., 1931. Coleopterorum catalogus, 117: Fam. Monommidae. 7pp., Berlin.
- SCHÖNFELDT, H. v., 1887. Catalog der Coleopteren von Japan. *Jrb. Nass. Verein. Naturk.*, 40: 31-204.
- 松村松年, 1915. 昆虫分類学, 下巻. 316+10pp., 4pls. 警醒社書店, 東京.
- 1931. 日本通俗昆虫図説, 第3巻. 128+183+6+4pp., 29col. pls. 春陽堂, 東京.
- 1935. 日本昆虫大図鑑. 1497+23pp., 刀江書院, 東京.
- 三輪勇四郎, 1938. 日本甲虫分類学. 202+40pp. 西ヶ原刊行会, 東京.
- 中根猛彦, 1963. 原色昆虫大図鑑, II. 443pp., 192col. pls. 北隆館, 東京.
- 酒井雅博, 1985. タمامシモドキ科. 原色日本甲虫図鑑, III. 500pp., 72col. pls.: 344. 保育社, 大阪. (九州大学農学部)

飛島のカミキリムシ

楨原 寛・鈴木祥悟

山形県飛島は, 酒田より 39.3 km の日本海に浮かぶ周囲 10.2 km, 面積 2.3 km², 最高地点でも 69 m の小島で, 行政上は酒田市に入る. 年平均気温は 12°C で山形県内で最も暖かい地域である. これまでカミキリムシは 26 種が記録されている¹⁾が, 筆者の一人鈴木は 1991, 1992 年に初記録の 9 種を含む 24 種を採集したので, ここに報告をする. なお, 1991 年は白色(採集リスト中の W), 黄色(同 Y), 黒色(同 B) の 3 種類の昆虫誘引器も用いた. 誘引剤は白, 黄にベンジルアセテート, 黒にマダラコールとエタノールを使用した. 誘引器は 1991 年 7 月 2 日に白, 黄, 黒を 1 セットとして 3 箇所に設置し, 7 月 31 日, 9 月 5 日に回収を行った. なお, 採集者はすべて鈴木である. また和名の後の * 印は初記録を示している.

Subfamily Spondyliinae クロカミキリ亜科

1. *Spondylis buprestoides* (LINNAEUS) クロカミキリ 2♂♂14♀♀, 31. vii. 1991 (B); 1♂4♀♀, 5. ix. 1991 (B); 1♀, 5. ix. 1991 (Y).

2. *Arhopalus coreanus* (SHARP) サビカミキリ 7♂♂5♀♀, 31. vii. 1991 (B); 2♀♀, 31. vii. 1991 (Y); 36♂♂32♀♀, 5. ix. 1991 (B); 3♂♂2♀♀, 5. ix. 1991 (Y); 2♂♂5♀♀, 5. ix. 1991 (W).

Subfamily Lepturinae ハナカミキリ亜科

3. *Corymbia succedanea* (LEWIS) アカハナカミキリ 1♂1♀, 31. vii. 1991 (B); 2♂♂2♀♀, 31. vii. 1991 (W); 2♀♀, 5. ix. 1991 (B); 1♂1♀, 5. ix. 1991 (Y); 2♂♂4♀♀, 5. ix. 1991 (W); 1♂, 31. vii-2. viii. 1991; 2♂♂, 20-21. vii. 1992.

Subfamily Cerambycinae カミキリ亜科

4. *Ceresium holophaeum* BATES ヨコヤマヒメカミキリ* 1♂, 5. ix. 1991 (B); 1♂1♀, 5. ix. 1991 (Y); 1♂, 5. ix. 1991 (W).

確実な記録としての北限にあたる.

5. *Chlorophorus muscosus* (BATES) フタオビミドリトラカミキリ 1♂4♀♀, 5. ix. 1991 (Y); 1♀, 31. vii-2. viii. 1991.

上翅肩部に斑紋が表れず, 対馬, 粟島, 奥尻島に

分布する個体と同じタイプである。

Subfamily Lamiinae フトカミキリ亜科

6. *Mesosa (Aphelocnemia) longipennis* BATES ナガゴマフカミキリ 2♀♀, 31. vii. 1991 (B); 3♀♀, 5. ix. 1991 (B); 1♀, 5. ix. 1991 (W); 2♂♂, 29. vi-3. vii. 1991; 6♂♂4♀♀, 31. vii-2. viii. 1991; 3♂♂5♀♀, 20-21. vii. 1992.

7. *Asaperda agapanthina* BATES シナノクロフカミキリ 3♂♂2♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 1♀, 20-21. vii. 1992.

8. *Atimura japonica* BATES コブスジサビカミキリ 2♂♂3♀♀, 31. vii-2. viii. 1991; 1♀, 20-21. vii. 1992.

9. *Pterolophia (Pterolophia) granulata* (MOTSCHULSKY) アトモンサビカミキリ 3♂♂2♀♀, 29. vi-3. vii. 1991.

10. *Pterolophia (Pterolophia) zonata* (BATES) アトジロサビカミキリ 1♀, 31. vii. 1991 (B); 12♂♂12♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 12♂♂13♀♀, 31. vii-2. viii. 1991; 5♂♂9♀♀, 20-21. vii. 1992.

11. *Pterolophia (Pterolophia) caudata* (BATES) トガリシロオビサビカミキリ 7♂♂13♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 4♀♀, 31. vii-2. viii. 1991; 2♂♂4♀♀, 20-21. vii. 1992.

12. *Anoplophora malasiaca* (THOMSON) ゴマダラカミキリ* 1♀, 5. ix. 1991 (Y); 2♂♂2♀♀, 31. vii-2. viii. 1991; 1♀, 20-21. vii. 1992.

13. *Acalolepta luxuriosa* (BATES) センノキカミキリ* 1♀, 29. vi-3. vii. 1991.

14. *Acalolepta sejuncta* (BATES) ニセピロウドカミキリ* 3♂♂1♀, 31. vii. 1991 (B); 1♂1♀, 31. vii. 1991 (Y); 2♂♂1♀, 31. vii. 1991 (W); 1♂3♀♀, 5. ix. 1991 (B); 2♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 2♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 2♂♂1♀, 31. vii-2. viii. 1991; 3♂♂, 20-21. vii. 1992.

15. *Uraecha bimaculata* THOMSON ヤハズカミキリ 1♀, 31. vii. 1991 (B); 1♀, 5. ix. 1991 (B); 2♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 2♂♂, 31. vii-2. viii. 1991; 3♂♂, 1♀, 20-21. vii. 1992.

16. *Rhodopina lewisii* (BATES) セミスジコブヒゲカミキリ* 3♂♂5♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 1♂, 31. vii-2. viii. 1991; 1♂1♀, 20-21. vii. 1992.

17. *Acanthocinus griseus* (FABRICIUS) ヒゲナガモモフトカミキリ 3♂♂2♀♀, 31. vii. 1991 (B); 1

♂, 31. vii. 1991 (Y); 9♂♂7♀♀, 5. ix. 1991 (B); 1♂, 5. ix. 1991 (Y).

18. *Exocentrus galloisi* MATSUSHITA ガロアケシカミキリ* 2♂♂, 31. vii-2. viii. 1991.

19. *Exocentrus fasciolatus* BATES クモガタケシカミキリ* 1♀, 31. vii. 1991 (B); 1♂, 29. vi-3. vii. 1991; 10♂♂8♀♀, 20-21. vii. 1992.

20. *Exocentrus guttulatus* BATES シラオビゴマフケシカミキリ* 1♀, 29. vi-3. vii. 1991; 1♀, 20-21. vii. 1992.

21. *Sciades (Miaenia) tonsus* (BATES) ケシカミキリ 1♀, 31. vii. 1991 (B); 1♀, 5. ix. 1991 (B); 10♂♂20♀♀, 29. vi-3. vii. 1991; 1♂, 31. vii-2. viii. 1991; 20♂♂44♀♀, 20-21. vii. 1992.

22. *Glenea (Glenea) relictata* PASCOE シラホシカミキリ* 1♂, 20-21. vii. 1992.

23. *Epiglenea comes* BATES ヨツキボシカミキリ 1♀, 31. vii-2. viii. 1991; 1♀, 20-21. vii. 1992.

24. *Oberea infranigrescens* BREUNING ホソキリンゴカミキリ 1♀, 20-21. vii. 1992.

この他に *Megopis (Aegosoma) sinica* (WHITE) ウスバカミキリ, *Aeolesthes (Pseudaolesthes) chrysothrix* (BATES) キマダラカミキリ, *Stenygrinum quadrinotatum* BATES ヨツボシカミキリ, *Schwarzerium quadricolle* (BATES) アオカミキリ, *Callidiellum rufipenne* (MOTSCHULSKY) ヒメスギカミキリ, *Chlorophorus diadema inhirsutus* MATSUSHITA クロトラカミキリ, *Niphona (Niphona) furcata* (BATES) ハイイロヤハズカミキリ, *Acalolepta fraudatrix* (BATES) ピロウドカミキリ, *Apriona japonica* THOMSON クワカミキリ, *Phytoecia (Phytoecia) rufiventris* GAUTIER キクスイカミキリ, *Nupserha marginella* (BATES) ヘリグロリンゴカミキリの記録がある。これで、飛島のカミキリムシは35種となり、島の面積の割には種数が多い。これは対馬海流と最上川の影響で流木のような漂着物が多いことにより、暖帯・本土系の種が定着できたと推定される。

引用文献

- 1) 日本鞘翅目学会編, 1984. 日本産カミキリ大図鑑, 565pp., 96pls. 講談社, 東京.
(森林総合研究所東北支所)

○イシガキオビハナノミの秋期の採集例

私の知る限り、日本ではこれまでオビハナノミ属の種は初夏ないし盛夏の頃に限り得られていたが、次のようにイシガキオビハナノミ *Glipa ishigakiana* KONO の9月の採集例があるので、報告しておきたい。なお、本種は八重山諸島に分布し、5-6月に採集されていた。

1♀, 西表島大富林道, 24. ix. 1992; 1♂, 同, 25.

ix. 1992, 焼田理一郎採集。

♂は尾節板を除いた体長8.3 mm, ♀は同10.3 mmであり、ともにかなり小形ではあるが、夏期の個体の変異幅に含まれる。

標本を恵与くださり、発表を委ねられた焼田理一郎氏に感謝申し上げます。

(神奈川県立博物館, 高桑正敏)

ホソナガジョウカイについて

今坂正一

中根(1992)は, WITTMER(1953)によって奈良県吉野山を基産地として記載された *Rhagonycha longipes* WITTMER について新知見を発表し, 本種を Type として新属 *Stenopodabrus* を設立し, 新たに和歌山県西牟婁郡大塔村および三重県平倉から記録した. 手許に本種と思われる標本があるので記録し, 多少気がついた事を述べておきたい. 上記両論文とも和名の提唱はないので, この機会に命名しておきたい.

Stenopodabrus longipes (WITTMER) ホソナガジョウカイ (和名新称)

神奈川県津久井郡津久井町青山, 1♂, 18. v. 1986, K. AKIYAMA leg.; 同県箱根湯河原, 1♂1♀, 29. iv. 1984, Y. HIRANO leg.; 箱根畑宿, 1♀, 12. v. 1984, Y. HIRANO leg.; 静岡県伊豆天城峠, 1♀, 2. v. 1965, Y. HIRANO leg.; 奈良県吉野郡国見山明神平, 1♂, 31. v. 1987, K. MIZUNO leg.; 同県伯母子岳, 1♂, 11. v. 1986, T. HATAYAMA leg., 1♂, 18. v. 1986, T. HATAYAMA leg., 1♂, 1. vi. 1986, T. HATAYAMA leg.; 和歌山県大塔山, 1♂, 22. iv. 1985, I. MATOBA leg.; 香川県琴南町大川山, 1♀, 31. v. 1988, N. SANO leg..

以上を総合すると, 本種は日本列島の南岸沿いに神奈川, 静岡の両県および紀伊半島の三重, 奈良, 和歌山の各県, そして四国の香川県に分布する. この事実は, 遺存的な日本固有種の典型的な分布のパターンを示しているように思われる (図1).

中根(1992)は *Stenopodabrus* 属の特徴として, 本種の形態を次のように述べている. 「頭は強く突出した目の後方で, 前胸に向って強く狭まる. 触角は長く, 糸状, 2節は3節の半分の長さ. 前胸は長さより幅が狭く, 基部から先端へ狭まる. 前胸は中央に縦溝を有し, 両側に縦長の隆起を持つ. 小腮枝の先端節は長い斧形, 前節の2倍以上の長さ. 下唇枝はほぼ三角形で, 先端半は扁平, 前節は非常に小さい. すべての肢の爪は大きな薄板状の歯状突起を備える. *Rhagonycha* 属とは, 付属歯を持つ爪の形と強く狭められた首によって, たやすく区別できる.」(図2: 23, 24, 25, 26, 27)

ところで, 今坂・山地・渡辺(1990)は岡山県のジョウカイボン相を報告したが, 考察中の岡山県

産と長崎・熊本・奈良・滋賀の各県とのファウナの比較の部分で, 奈良県産として *Micropodabrus* sp. という種を表示している. 本文中に, この種についてコメントを加えていないが, 実は本種の存在を示したのである. その時点で筆者は, 本種を *Micropodabrus* 属に含まれる種と考えていたのである. それで, 改めて本種が中根のいう *Stenopodabrus* 属の種と考えるべきかどうか考察してみたい.

Micropodabrus 属は, Pic(1920)により, Tonkin 産の *M. obscurus* Pic を基に創設された属である. WITTMER(1982)の台湾産ジョウカイボン科のレビジョンによると, *Micropodabrus* 属は *Kandyosilis Rhagonycha* 両属とともにすべての肢の爪が2裂状になり, 近縁の *Habronychus*, *Podabrus* の諸属から区別されている. さらに, *Kandyosilis* や *Rhagonycha* とは, 前胸が縦長で, 頭部が目の後方で強く狭まることなどで区別されている. この定義からすると中根のいうように, *Stenopodabrus* の爪は2裂状ではなく, 基部に三角形の歯状突起を持ち, *Micropodabrus* とは異なることになる.

しかし, 実際には台湾産 *Micropodabrus* のうち, *M. obscurior* (WITTMER) (図3: 5, 6) の爪の形状は, ♂は確かに2裂状であるが, ♀は基部に三角形の歯状突起をもち, *Stenopodabrus* の爪とほとんど差がない. さらに, この種の♂交尾器 (図3: 7, 8; 図4: 10) は, ラテラルローブ(LL)のうちのドーサルプレート(DPL)は先端が広く丸まったヘラ状で, 広く背面をおおい, 背面からはベントラルプロセス(VP)の基部の一部が側方からはみ出して見える程度. ベントラルプロセスは先端の三角は尖り, 狼の耳状, ドーサルプレートよりやや短い. メディアンフックは未発達で認められない, 等々. *S. longipes* の♂交尾器 (図2: 24; 図3: 3, 4) と基本的にはほとんど差がない. むしろ, 同じ台湾産 *Micropodabrus* 属のメンバーである *M. formosanus* (Pic) (図4: 11, 12, 13) や *M. lishanensis* WITTMER (図4: 17) の♂交尾器は前記2種とはだいぶ異なっており, ドー



図1. ホソナガジョウカイの分布. ●: 実検記録, ○: 文献記録.

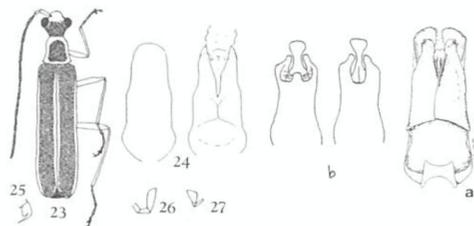


図2. 日本産 *Micropodabrus* 属3種. Nos. 23, 24, 25, 26, 27: ホソナガジョウカイ (中根, 1992より引用), a: セボンホソナガジョウカイ (ISHIDA, 1989より引用), b: ヤエヤマヒゲナガジョウカイ; a, b, 24は♂交尾器 (左: 背面, 右: 腹面).

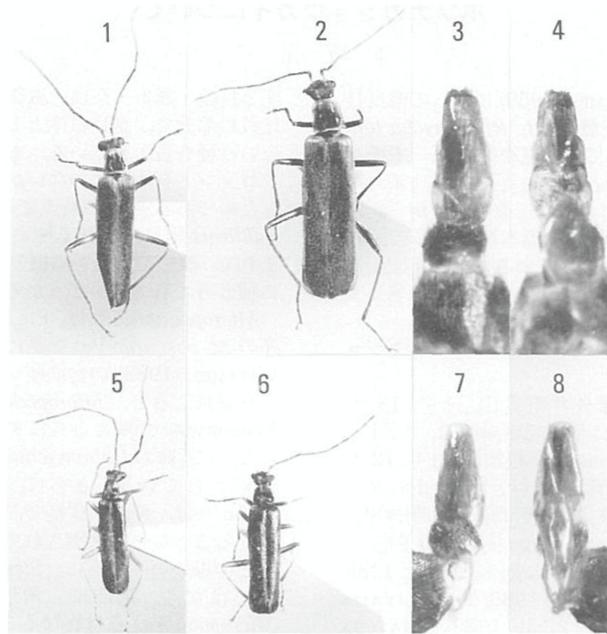


図3. ホツナガジョウカイとその近似種. 1~4: ホツナガジョウカイ, 5~8: *M. obscurior* (WITTMER); 1・5: ♂, 2・6: ♀, 3・7: ♂交尾器背面, 4・8: 同腹面.

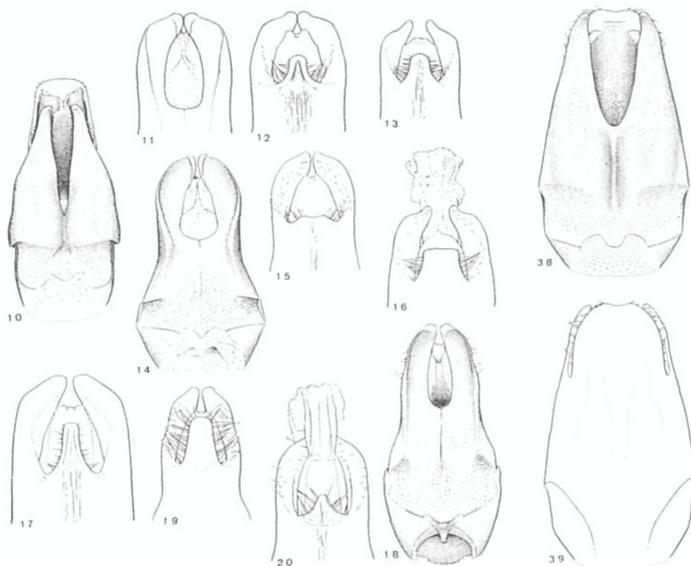


図4. 台湾産 *Micropodabrus* と *Kandyosilis* の♂交尾器 (WITTMER, 1982 の引用). 10: *M. obscurior*(WITTMER), 11-13: *M. formosanus* (PIC), 14-15: *M. pingtungensis* WITTMER, 16: *M. uenoi* WITTMER, 17: *M. lishanensis* WITTMER, 18-19: *M. fenchihuensis* WITTMER, 20: *M. kurosawai* WITTMER, 38-39: *Kandyosilis nodicornis* WITTMER.

サルプレートはごく小さく、セントラルプロセスの大部分が背面から認められる。爪の形は2種ともに♂は2裂状、♀では基部より大きく2又するが、♂

の爪とは異なり2又した爪の間が広くすいており、*Habronychus* 属の爪に似てくる。結局、*M. obscurior* は、爪の状態を除くと♂交尾器を始め、体

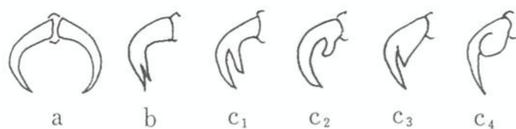


図5. 日本産ジョウカイボン亜科の爪の型。

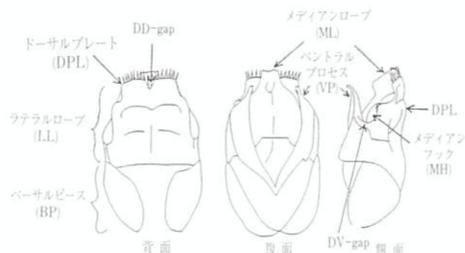


図6. ジョウカイボン亜科の♂交尾器の模式図—
Podabrus heydeni KIESENWETTER.

型、前胸の形、触角などホソナガジョウカイと酷似しており、むしろ同属の *M. formosanus* や *M. lisshanensis* の方が種々の点で差異がある。それでも *M. obscurior* とホソナガジョウカイとは属を分ける必要があるのだろうか？

WITTMER は、日本や台湾のジョウカイボンの解説では、属の区別点としてかなり爪の形を重要視している。国内の研究者も彼の考え方に影響されているようで、*Mikadocantharis* や *Yukikoa* などの属の創設は主として爪の形の違いによる。

一方、今坂(1989)は、日本甲虫学会第41回大会の講演の中で、WITTMER の分類体系は爪の形にとらわれすぎていて、属の特徴としては♂交尾器の構造をより重要視すべきとの意見を述べた。その理由として、① *Podabrus* の属内において種群により、又は♂♀により、爪の形は2裂状から付属歯をもつものまで多くの変化があること、②爪の形により別属として区別されている *Mikadocantharis japonica* と *Athemus nakanei* の♂交尾器の形が酷似し、ほとんど区別ができないにもかかわらず、同じ *Athemus* 属内で前記2種とはかなり異なる♂交尾器を持つ種が多く存在すること、③ *Athemus* 属内では多くの種で爪の形が♂♀あるいは種によって異なり、単純なものから、さまざまな段階での基部に付属歯をもつものまで変化に富むことなどをあげた。試みに日本産のジョウカイボン亜科における爪の形の一覧表を示す。ジョウカイボン亜科では、すべての脚が2本の爪を持ち、一部の群では左右非対称である。爪の形は、a: 分岐がなくて単純、b: 先端が2裂状、c: 基部に歯状突起の3つの場合があり、c はさらに、c₁: 突起は細長く伸び、b の2裂状に似るが、2裂間は大きく開く、c₂: 親指状に爪の基部に短く、細長く突出、c₃: 突起は三角形で先はとがる、c₄: 基部に大きく丸い突起をもつ、などの形が

ある(図5; 表1)。

この表より、ごく近縁の小グループ、つまり亜属単位くらいでは爪の形はほぼ一定であるが、多くの種を含む大属(*Podabrus*, *Athemus* など)では、多くの変異を持つことがわかる。また a の単純な爪をもつ属は、*Stenothemus*, *Themus*, *Yukikoa*, *Athemellus* および *Prothemus* の♀、*Athemus* の *suturcellus* 群の♂、*Wittmercantharis* の♀など多くの関連性のないグループで現われる。さらに2裂状の爪を持ち、かつては同属に入れられていた *Rhagonycha* と *Mikadocantharis* は、かなり系統的に離れている。結局、ジョウカイボン亜科に含まれるものは、原始的な爪の形としては2裂状になる b タイプをベースにして、各々の属または亜属単位で b→c₁→c₃→c₄→c₂→a の方向へ進化しているものと考えられるので、属分けのような上位分類では爪の形に基づいて分けるべきではない。

さて、ジョウカイボン亜科の♂交尾器の模式図(図6, *Podabrus heydeni*)を見ていただきたい。本亜科の最大の特徴は、ラテラルローブの部分が背面(ドーサルプレート)と腹面(ペントラルプロセス)で突出し、上下からメディアンローブを保護し、そのメディアンローブの背面基部より生じたメディアンフック(MH)とドーサルプレートによって交尾時に♀の腹節腹板をはさみこみ、腹部を固定して交尾姿勢をより強く保つ点にある。このような構造の♂交尾器は、他のあらゆる甲虫類を見渡してもまったく見られず、本亜科独自の特徴である。それで、このうちメディアンフックの発達の状態により、大きく3群に分ける事ができる。第1の未発達グループは *Rhagonycha*, *Kandyosilis*, *Micropodabrus* の3属、第3のよく発達するグループは *Mikadocantharis*, *Athemus*, *Athemellus*, *Wittmercantharis*, *Yukikoa*, *Themus* の6属、そしてこの2群の中間で種によって未発達のものからやや発達するものまでを含む第2群は、*Podabrus*, *Habronychus*, *Stenothemus*, *Prothemus* の4属を含む。これらの各群は進化の程度も系統も互いにかなり異なっているものと考えられ、♂交尾器の構造を基に考えるなら、爪の形が2裂状で似ていても、*Rhagonycha* と *Mikadocantharis* を混同することなどありえない。また爪の状態が異なってはいても、*Mikadocantharis* は *Athemus* に含めるべきだし、*Athemellus* も *Athemus* の亜属程度と考えてよいかもしれない。*Habronychus* と *Stenothemus*, *Kandyosilis* と *Micropodabrus* はそれぞれ比較的近い群のように思われる。

以上の観点から、♂交尾器の構造が似ているものは系統的に近い種であること、*Podabrus* や *Athemus* など大きな属には種々の爪の状態を持つ群(亜属単位程度で)を含むこと、台湾産の *Micropodabrus* では♂は2裂状だが♀では種により c₁ と c₃ の2つのタイプがあり、後者は *Stenopodabrus longipes* の♂♀両方の爪と同じ形(c₃)をしていることなどが解った。先に述べたように、爪以外では

表 1. 日本産ジョウカイボン亜科のグループごとの爪の形

M	H		♂			♀			
			前肢	中肢	後肢	前肢	中肢	後肢	
未 発 達	I 群	<i>Rhagonycha</i>	bb	bb	bb	bb	bb	bb	
		<i>Kandyosilis</i>	bb	bb	bb	bb	bb	bb	
		<i>Micropodabrus</i> (<i>Stenopodabrus</i>)	bb	bb	bb	c ₁ c ₁	c ₁ c ₁	c ₁ c ₁	<i>yayeyamanus</i>
			bb	bb	bb	c ₃ c ₃	c ₃ c ₃	c ₃ c ₃	<i>maculivertex (obscurior)</i>
			c ₃ c ₃						
未 発 達 ↑ ↓ 発 達	II 群	<i>Podabrus</i>	bb	bb	bb	bb	bb	bb	<i>longissimus</i>
			bb	bb	c ₃ c ₃	<i>Asiopodabrus</i> 亜属			
			bb	c ₃ c ₃	リョウコジョウカイ群				
		<i>Habronychus</i>	c ₃ c ₃	<i>heydeni</i> 群					
		<i>Stenothemus</i>	c ₁ c ₁	c ₁ c ₁	aa	c ₁ c ₁	c ₁ c ₁	aa	
		<i>Prothemus</i>	aa	aa	aa	aa	aa	aa	
			ac ₄	c ₄ a	c ₄ a	aa	aa	aa	<i>ciusianus</i>
		ac ₄	c ₄ a	aa	aa	aa	<i>ryukyuanus</i>		
よ く 発 達	III 群	<i>Mikadocantharis</i>	bb	bb	bb	bb	bb	bb	
		<i>Athemus</i>	ac ₂	c ₂ a	c ₂ a	ac ₂	c ₂ a	c ₂ a	<i>Andrathemus</i> 亜属
			ac ₂	c ₂ a	aa	ac ₂	c ₂ a	aa	<i>lineatipennis</i> 群
			aa	aa	aa	ac ₂	c ₂ a	aa	<i>suturrellus</i> 群
		<i>Athemellus</i>	aa	aa	aa	aa	aa	aa	
		<i>Wittmercantharis</i>	ac ₄	c ₄ a	c ₄ a	aa	aa	aa	
		<i>Yukikoa</i>	aa	aa	aa	aa	aa	aa	
<i>Themus</i>	aa	aa	aa	aa	aa	aa			

M. obscurior とホソナガジョウカイはほとんど形態に差がないので、これら 2 種は同属に含められるべきと考えてよいようである。結局、*Stenopodabrus* は *Micropodabrus* のシノニムと考えられる。

Genus *Micropodabrus* Pic

Type species, *M. obscurus* Pic (monotypic), 1920, *Mél. exot. -ent.*, 32: 6.

Stenopodabrus NAKANE, 1992, type species, *S. longipes* (WITTMER), *Kitakyūshū no Konchū*, 39 (2): 78-79. New synonym.

すなわちホソナガジョウカイは *Micropodabrus longipes* (WITTMER) と表示すべきと考える。

日本国内には *Micropodabrus* 属に含まれる種が他に 2 種記載されており、ヤエヤマヒゲナガジョウカイ *M. yayeyamanus* M. SATŌ が八重山に、セボンホソナガジョウカイ (和名新称) *M. maculivertex* ISHIDA が沖縄本島と奄美大島 (湯湾岳, 4♂♂3♀♀, 5. v. 1987, T. OGATA leg.), 徳之島 (天城岳, 1♀♀, 4. v. 1988, T. OGATA leg.) に分布する。両種ともメディアンフックを欠き、♂の爪が 2 裂する点では共通であるが、前者のドーサルプレートはごく小さく、背面中央に突出し、背面からベントラルプロセスが認められ、*M. formosanus* によく似る (図 2: b)。♀の爪は、爪の間が広くく 2 叉状 (c₁ タイプ) でこの点もほぼ同じで *formosanus* と特別に区別する必要はないかもしれない。一方、後者では、ドーサルプレートは広く背面をおおうが、中央で大きく

2 裂すること (図 2: a)、触角が短いこと、頭部後方の狭まり方が小さく、前胸も方形に近いこと、♀の爪は基部に三角形の歯状突起をもつ (C₃ タイプ) ことなど、日本と台湾の他の *Micropodabrus* には見られない特徴を持っている。この種よりむしろホソナガジョウカイの方がより *Micropodabrus* のメンバーとしてふさわしい気さえする。現在本属に含められている日本産 3 種は、それぞれかなり性格が異なっているようである。

末筆ながら、常日頃色々御指導いただいている中根猛彦博士を始め、貴重な標本を恵与され種々の御援助をいただいた秋山黄洋、畑山武一郎、平野幸彦、的場 績、水野弘造、緒方 健、佐野信雄の各氏に心より厚く御礼申しあげる。

参考文献

今坂正一, 1989. 日本産ジョウカイボン科について. 日本甲虫学会第 41 回大会講演要旨, 24 pp.
 ——・山地 治・渡辺昭彦, 1990. 岡山県のジョウカイボン相. *すずむし*, (125): 1-23.
 ISHIDA, K., 1989. Two new species of the cantharid beetles from Okinawa (Col. Cantharidae). *Ent. Rev. Japan*, 44: 81-85.
 中根猛彦, 1992. 日本の雑甲虫覚え書 9. 北九州の昆蟲, 39 (2): 73-79.
 WITTMER, W., 1982. Die Familie Cantharidae auf Taiwan, I. (Col.). *Ent. Rev. Japan*, 37: 119-140.
 (長崎県島原市)

S. H. CHEN (陳世驥) 博士 (1905-1988) のハムシ科の大分類

—上級分類群のランキングの任意性—*

鈴木 邦 雄

1992年6月28日～7月4日、中国北京市で第19回国際昆虫学会議が開かれた。筆者は、7月3日に行なわれた第3回国際ハムシ科シンポジウム(オーガナイザー: D. G. FURTH)で講演発表した。このシンポジウムは、国際昆虫学会議の折を利用し、第1回はハンブルグ(1984)で、第2回はヴァンクーバー(1988)で行なわれた。今回は講演数が13と前回(23)よりも少なく、会議も1日のみだったが、興味深い講演が多かった。また、毎晩宿舎の五洲大酒店のバブにハムシ研究者が集まり活発な意見交換が行なわれた。出席した主なハムシ研究者は次の通り: L. BOROWIEC (ポーランド), M. DACCORDI (イタリア), D. G. FURTH (アメリカ), T. H. HSIAO (アメリカ), P. JOLIVET (フランス), M. S. MOHAMEDSAID (マレーシア), J. PASTEELS (ベルギー), E. PETITPIERRE (スペイン), G. A. SAMUELSON (アメリカ), M. SCHMITT (ドイツ), H. SILFVERBERG (フィンランド)。なお日本からは藤山静雄、井上大成両氏と筆者が、地元中国からは YU Pei-yu, Shu-yong WANG, YANG Xing-ke の3氏が参加した。7月5日には北京市郊外でハムシ研究者だけの採集会も行なわれた。

さて、中国のハムシ研究者といえば、S. H. CHEN (陳世驥) 博士の名を第一に挙げねばなるまい。1988年1月25日に82歳で永眠され、残念ながら筆者はついに目にかかる機会がなかった。中條道夫先生は永く親交をお持ちであったと伺っている。今回の国際ハムシ科シンポジウムは、故 CHEN 博士に捧げられた。学会期間中は、CHEN 博士のお弟子である YU Pei-yu 博士を中心に、Shu-yong WANG と YANG Xing-ke の両氏が献身的にお世話下さった。6月30日には今回参加したハムシ科研究者のほぼ全員で中国科学院動物学研究所を訪ね、現在も生前の時のままになっている CHEN 博士の研究室や標本室でその偉大な業績を偲んだ。博士の業績に関しては、ハムシ科研究者のニュース・レター「Chrysomela」の Nos. 19/23, 3-10 頁に、このニュース・レターの編集者である T. N. SEENO 博士の手になる略歴とハムシ科に関する研究論文のリストが掲載されている。

CHEN 博士は、1940年以降、4度にわたってハムシ科の大分類体系に関する論文を發表している。筆者は、1974年以来、ハムシ科はカミキリムシ科およびマメゾウムシ科との関係において、多系統 polyphyly の群であるという説を展開してきたが、

* Kunio SUZUKI (Dept. Biol., Coll. Lib. Arts, Toyama Univ.): Major classification of leaf beetles by the late Dr. S. H. CHEN (1905-1988) —Arbitrariness in ranking of higher taxa.

CHEN 博士の1940年の論文を初めて読んだ時の強烈な印象は今も忘れがたい。博士の説も、ハムシ科が多系統の群であることを明確に主張するものである。筆者は、今回のハムシ科シンポジウムで、中南米のみから知られるムカシホソハムシ亜科(新称) Aulacoscelinae の系統的位置に関する最近の研究結果について報告したが、CHEN 博士のご意見をぜひ直接に伺いたかったものである。この亜科については、同じく中南米産のヒゲナガサルハムシ亜科(新称) Megascelinae と共に、材料が入りできないことによって直接研究する機会の得られなかった博士が強い関心を示されていたからである。また筆者は、最近ニュージーランドの G. KUSCHEL 博士らが創設した Palophaginae [この新亜科については稿を改めて述べる予定である] についても私見を述べたが、この群についてもおそらく強い関心を示されたにちがいない。

ハムシ科の大分類に関する博士の意見は、かなりユニークである。と同時に、詳しく検討・論議されるべき多くの問題を含んでいるように思われる。この小文では、博士の説の変遷を紹介すると共に、筆者が折に触れて論じてきた上級分類群のランキングの任意性をめぐりいくつかの問題に絞って、私見を披瀝しながら論じたい。CHEN 博士のハムシ科の大分類については、かつて同じ論点から簡単に紹介したことがある(鈴木: リンネ式階層分類と自然分類—分類群のランキングと系統分類—, Panmixia [昆虫分類学若手懇談会会報], (6): 1-4)。

なお、ハムシ上科の群そのものの認識についてはかなりコンセンサスが得られてきていると言って良いが、科や亜科など、上級分類群のランキングは、研究者によって異論がある。以下の論議では、基準となる体系がなければ混乱するので、系統関係もある程度考慮した上で示された SEENO & WILCOX (1982) の体系を基準として議論を進めようと思う。カミキリムシ科とマメゾウムシ科については、ここでは必要に応じて言及するに止めたい。また、筆者自身の体系についても、ここでは必要最小限触れるに止める。以下に紹介する CHEN 博士の体系を含め、この一般的に受容されている体系と異なる見解を持つ研究者は少なくない。筆者は、最近、ハムシ科の上級分類群の系統分類体系に関する自説を述べた論文の中で、従来の主要な説を批判的に概説したので、詳しくはそれを見られたい [SUZUKI, K., 1988. Comparative morphology of the internal reproductive system of the Chrysomelidae (Coleoptera). In JOLIVET, P. et al. (eds.), Biology of Chrysomelidae (xxiv + 615pp.): 317-355; 印刷中, Comparative morphology of the hindwing

venation of the Chrysomelidae (Coleoptera). In JOLIVET, P. et al. (eds.), Novel Aspects of Biology of Chrysomelidae (Coleoptera). いずれも, Kluwer Acad. Publ., Dordrecht/Boston/London]. なお, ここでは上述の Palophaginae 亜科については除外する.

なお, カミキリムシとマメゾウムシは, それぞれ科としてハムシ科と共にハムシ上科 Chrysomeloidea を構成するというのが一般に受容されている体系である.

ハムシ科の大分類体系

[SEENO & WILCOX (1981) による]

1. コガネハムシ亜科 Sagrinae [SAG]
2. ムカシホソハムシ亜科* Aulacoscelinae [AUL]
3. ネクイハムシ亜科 Donaciinae [DON]
4. ナガハムシ亜科 Orsodacninae [ORS]
5. モモトハムシ亜科 Zeugophorinae [ZEU]
6. カタバヒロハムシ亜科 Megalopodinae [MGL]
7. クビナガハムシ亜科 Criocerinae [CRI]
8. ヒゲナガサルハムシ亜科* Megascelinae [MGS]
9. ナガツツハムシ亜科 Clytrinae [CLY]
10. ツツハムシ亜科 Cryptocephalinae [CRY]
11. コブハムシ亜科 Chlamisinae [CHL]
12. ツヤハムシ亜科 Lamprosomatinae [LAM]
13. ホソハムシ亜科 Syntetinae [SYN]
14. サルハムシ亜科 Eumolpinae [EUM]
15. ハムシ亜科 Chrysomelinae [CHR]
16. ヒゲナガハムシ亜科 Galerucinae [GAL]
17. トビハムシ亜科 Alticinae [ALT]
18. トゲハムシ亜科 Hispinae [HIS]
19. カメノコハムシ亜科 Cassidinae [CAS]

* 和名新称

CHEN 博士のハムシ科の大分類体系

CHEN 博士は, 1940 年以降, 1964, 1973, 1985 とのべ4回にわたってハムシ科の大分類体系を提唱された. 博士が一貫して重視された分類形質は, 主として伝統的に用いられてきた成虫の外部形態, 後翅翅脈相, オスの外部生殖器, 幼虫の形態などであるが, 各論文における力点の置き方, つまり評価の仕方には自ずと違いがある. ここでは各群のランキングの違いに的を絞って年代順に見ていくとしよう.

なお, 以下の概説中, 各亜科名は, 上記リストの末尾に示した略号を用いることにする. 略号の前の小数字は, 図1にまとめた各論文における配列順を示す. カミキリムシ科 [CER] とマメゾウムシ科 [BRU] についても必要に応じて略号を使うので注意されたい. 各時点で博士の用いた分類群のランキングあるいは定義(内容)が上の SEENO & WILCOX のそれと異なっている場合は [] で示すことにす

るので特に注意されたい.

1. 1940 年論文: Attempt at a new classification of the leaf-beetles. *Sinensia*, 11: 450-481, 30 figs. [以下「第一論文」と呼ぶ]

この論文では, カミキリムシ科とマメゾウムシ科がそれぞれ独立の科として扱われているのに対し, ハムシ科は6科に分類されているのが特徴である. また, この時点では ZEU, AUL, SYN は独立の亜科とはされておらず, ZEU は MEG に包含されていた.

- (1) [Donaciidae]: ¹SAG + ²DON + ³ORS + ⁴MGS + ⁵MGL
- (2) [Crioceridae]: ⁶CRI
- (3) [Chrysomelidae]: ⁷CHR + ⁸GAL + ⁹ALT*
- (4) [Cryptocephalidae]: ¹⁰CLY + ¹¹CRY + ¹²CHL**
- (5) [Eumolpidae]: ¹³EUM
- (6) [Cassidinae]: ¹⁴HIS + ¹⁵CAS

2. 1964 年論文: Evolution and classification of the chrysomelid beetles. *Acta. Ent. Sinica*. 13: 469-483. [第2論文]

この論文では, BRU を広義のハムシ科の一員として扱い, 狭義のハムシ科に2つの系統を認め, それらを4科に分けている. 特に HIS + CAS を独立の科としているのが特徴である.

- (1) [Crioceridae]: ¹SAG + ²DON + ³CRI + ⁴MGL + ⁵ZEU + ⁶ORS + ⁷SYN
- (2) [Eumolpidae]: ⁸EUM + ⁹LAM + ¹⁰CHL + ¹¹CLY + ¹²CRY
- (3) [Chrysomelidae]: ¹³CHR + ¹⁴GAL + ¹⁵ALT
- (4) [Hispidae]: ¹⁶[(Anisoderinae)] + [HIS] + ¹⁷CAS

3. 1973 年論文: The classification of leaf beetles. *Acta. Ent. Sinica*, 16: 45-56. [第3論文]

この論文では, 第2論文における [Hispidae] をカメノコハムシ上科 [Cassidoidea] に昇格させているのが特徴である. BRU の科としての独立性も認めている.

[Chrysomeloidea]

CER

BRU

- (1) [Crioceridae]: ¹MGL + ²ZEU + ³ORS + ⁴SAG + ⁵DON + ⁶CRI
- (2) [Eumolpidae]: ⁷EUM + ⁸LAM + ⁹CHL + ¹⁰CLY + ¹¹CRY
- (3) [Chrysomelidae]: ¹²CHR + ¹³SYN + ¹⁴GAL + ¹⁵ALT

* Halticinae として.

** ¹²Chlamidini + ¹³[(Sphaerocharini)] + [Lamprosomatini]

- [Cassidoidea]
- (4) [Cassididae]: ¹⁶CAS
- (5) [Anisoderidae] |
- (6) [Hispidae] | ¹⁷[HIS]
- (7) [Callispidae] |

4. 1985年論文: Phylogeny and classification of the Chrysomeloidea. *Entomography*, 3: 465-475. [第4論文]

この論文では、第3論文における[Cassidoidea]を再び[Hispidae]に戻し、MGL+ZEU+ORSの3亜科を[Megalopodidae]として独立させ他のハム

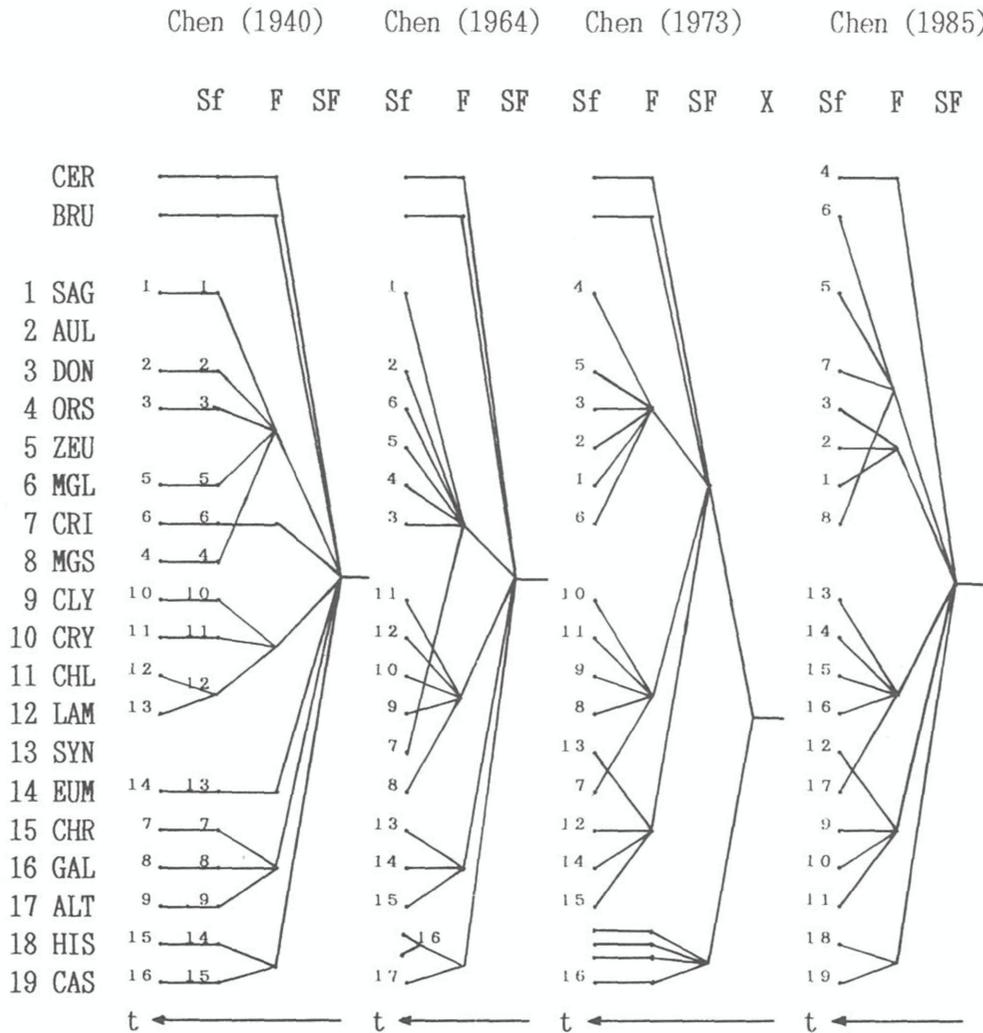


図1. CHEN博士によるハムシ科の大分類体系の変遷 (CHEN, 1940, 1964, 1973, 1985より筆者作成). CER: カミキリムシ; BRU: マメゾウムシ; SAG: コガネハムシ; AUL: ムカシホソハムシ; DON: ネクイハムシ; ORS: ナガハムシ; ZEU: モモフトハムシ; MGL: カタバシロハムシ; CRI: クビナガハムシ; MGS: ヒゲナガサルハムシ; CLY: ナガツツハムシ; CRY: ツツハムシ; CHL: コブハムシ; LAM: ツヤハムシ; SYN: ホソハムシ; EUM: サルハムシ; CHR: ハムシ; GAL: ヒゲナガハムシ; ALT: トビハムシ; HIS: トゲハムシ; CAS: カメノコハムシ. SAG, AUL, および MGS の3群は日本には産しない. 直線は包含関係を示すが、この図は90°右へ回転させれば分岐図 cladogram となるように描かれている. Sf: 亜科; F: 科; SF: 上科; t: 進化的時間. なお、CHEN (1973) における X は単に上科より上の階級を意味するにすぎない.

シ科よりもむしろカミキリムシ科に近いとする見解を表明している。BRU は SAG+DON+CRI よりなる [Crioceridae] に含め、しかも SAG と DON の間に位置づけている。

[Chrysomeloidea]

- (1) [Megalopodidae]: ¹MGL+²ZEU+³ORS
- (2) [Cerambycidae]: ⁴CER
- (3) [Crioceridae]: ⁵SAG+⁶BRU+⁷DON
+⁸CRI
- (4) [Chrysomelidae]: ⁹CHR+¹⁰GAL+¹¹ALT
+¹²SYN
- (5) [Eumolpidae]: ¹³CLY+¹⁴CRY+¹⁵CHL
+¹⁶LAM+¹⁷EUM
- (6) [Hispididae]: ¹⁸HIS+¹⁹CAS

SEENO & WILCOX (1982) を基準として、CHEN 博士の 4 体系の変遷を図 1 にまとめた。

博士は、既に第 1 論文の冒頭で、「いかなる生物群の自然分類も、彼らの起源と系統に関する完全な理解を基礎に築かれるべきである」と述べている。博士の体系を通じて筆者がまず指摘したいことは、各群のランキングを各時点で広く行なわれていた分類体系にはこだわらずに、かなり大きく変更させていることである。この点は、実は積極的に評価できる面と批判すべき面の両面があるように思われる。上級分類群のランキングを変更することは、容易ではなく、その影響も大きい。それを行なうためには当該群の内部状況はもとより、その群と近縁群との関係をも考慮する必要がある。包含する種が多い群の場合には、一人の研究者がその両面をカバーすることは極めて困難である。博士ほどの豊富な研究実践に裏打ちされて初めてそれも可能となる。一方、ランキングを変更することによって多くの困難な問題が生じるが、博士は、部分的には触れているものの、本質的な問題について立ち入った議論は避けているように思われる。

分類群のランキングと自然分類

現行のリンネ式階層分類においては、分類群 (タクソン taxon, 複数 taxa) は単系統 monophyly であることが基本的に要請されている。これは、この現行の分類方式に対する解釈に係わる問題でもある。分類群の単系統性は、分類学的研究の進展によって次第に解明されていくものである。しかし、種を属名+種名の組合せで表記する現行の分類方式では、種は、その系統的な位置が解明されていなくとも、命名・記載された時点で界へと連なる一連の階層の秩序の中に自動的に位置づけられてしまうのである。しかるに、種は、帰属する属が特定されなければ命名・記載することができない。これは現行の命名規約上の問題である。群によっては属の所屬が不明瞭な事態に頻繁に出会う。種々のケースがあるが、帰属する属が既存の属に見当たらない場合、2 通

りの処理がありうる。(1) 既存の属のどれかに所属せしめるか、あるいは (2) 新たな属を設けるかである。いずれの場合にも、当該の種の命名・記載は、ともかくも可能となるわけである。いかなる属もある科の構成員であり、その科はある目の、その目はある綱の、その綱はある門の、そしてその門はある界の構成員である。これは自明のことのように思われているが、実はここに、少なくとも 2 つの問題が潜んでいると思われる。

まず、いま上で挙げた種一属一科一目一綱一門一界の 7 個の分類階級は、いかなる生物群においても必ず用いられねばならないものであり、責任階級と呼ばれることは言うまでもない。そして、これらの階級の間任意のさまざまな階級が設定されることもまた、多くの生物群で一般的に行なわれていることである。たとえば、属と科の間に亜科が、科と目の間に亜目が設けられるという具合である。それらの任意に設定される階級の数は群によって異なっている。つまり、属 (あるいは亜属) 以上の階級の設定はまったく任意に行なわれているのである。7 個の責任階級の比重は他の任意に設定させる階級のそれよりも大きいように受けとられがちであるがそうではない。責任階級以外の任意の階級が 1 個でも設けられた状況を考えるならば、ただちに理解されよう。そのような亜階級が新たに設定されることによって、既存の責任階級に位置づけられた分類群のランキングが上下に動かざるをえないからである。これは、種々の生物群で現実に頻繁に起こっている事態である。

筆者は、生物群によっては夥しい数の任意の階級が用いられていることから、ランキングをめぐる諸問題を論じた際に、かつて「種を除く種以上の分類群」という表現をしたことがある。単に「種より上の分類群」で誤解の余地がないならば、初めからそのように書いているのであって、「種より上」と表現した場合に、われわれの言語習慣上、種を含むように受け取るむきがないにしもあらずであるからこそ、混乱や誤解を避けるために敢えてそのような表現をとったのである。たとえばショウジョウバエ科のある属では、種と属の間に〈亜セクション〉—〈セクション〉—〈種亜群〉—〈種群〉のごとく、いくつもの任意の階級設定 (あるいはグルーピング) がなされている。筆者の意味するところは極めて明瞭であったと今も考えているが、そこで論じられている問題の内容にはまったく関心を示さずに、こうした言葉の使用法が気に入らぬと筆者の言語能力にまで難癖をつける人も世の中にはいるので恐れ入る。

上級分類階級の数が生物群によってまちまちに用いられていることは、現行の分類法を採っている限り避けえないことである。と同時に、実はこの方式の最大の欠点でもあると筆者は考えるものである。

2 番目の問題は、われわれの生物群の認識とその群の系統的な位置に関する理解が、時間的に逆の順序でなされることによって生じる。現行の階層分類方

式は、多量の情報を効率よく集約し、そこから特定の情報を速やかに検索する上で、極めて便利なものであり、おそらく今後もこれに取って代わる方式が考案されるとは思われない。この方式に基づく分類体系が十全に機能するためには、正にその階層的秩序が厳密に保たれていなければならないであろう。つまり、相互包含関係が、整合的に成立していなければならない。しかし、われわれの認識過程の時間的な順序関係は逆なのである。すなわち、この方式に基づく分類体系は、当該生物群についての系統関係が十分に解明されて初めて確立されるにもかかわらず、群の認識と階層的秩序への位置づけはそれに先行して行なわれざるをえないことによつて、論理的な困難を初めから背負ってしまうのである。系統関係を反映する、別言すれば想定された系統関係と矛盾しない分類体系を自然分類体系と呼ぶならば、その構築は、設計図に従って部品を組み立てるようには運ばない。部品(分類群)の属性が十分に明らかにされていないばかりか、完成像も全体の設計図そのものも明瞭には描けていないからである。前者についての理解が進めば、後者もそれだけ確固たるものに近づけることもできる。

そもそもある分類群のランキングが妥当であるかを判定する客観的基準はない。あるのは、分類学研究者の経験に基づく分類上のバランスのようなもの、正に「ようなもの」というあいまいな言葉でしか表現できないものだけである。

分類群が、単系統群でなければならないというのは、基本的な要請であると書いた。もしも、非単系統的分類群の設定を許容してしまえば、現行のリンネ式階層分類方式の根底は崩れてしまう。分類体系というものは、生物世界についてのわれわれの理解をもっとも矛盾なく反映するものでなければならない。このへんの議論については、筆者らの最近の論考を参照されたい(鈴木邦雄・D.G. FURTH, 1990. 自然分類とは何か?—系統学的研究の現場から—。1) & (2). 生物科学(岩波書店, 東京), 42: 123-133, 42: 201-209)。

さて、以上のことを念頭に置いて、CHEN 博士のハムシ科(あるいはハムシ上科)の分類体系の変遷を図1を参照しながら見ていただきたい。

CRI, SYN, EUM の3者の位置づけが変わってきている以外に、各群相互の系統関係の理解には全体的にむしろそれほど大きな変化は認められない。問題は、各群のランキングの変化である。分類群の認識とそのランキングとが、いわば独立になされうる。博士の体系の変遷には如実に示されているように思われる。このような分類上の措置は、種々の群で頻繁になされていることでもある。筆者が、以前から繰り返し指摘している問題は、分類群のランキング如何が、当該群の系統的位置についてのわれわれの理解を甚だしく変化させるということである。

CHEN 博士の体系では、第1論文から一貫してハ

ムシ類がカミキリムシ類・マメゾウムシ類との関係において多系統の群であることが主張されているのである。

分類群が単系統でなければならないという要請に従う限り、ある分類体系はそれを前提とした系統関係についてのわれわれの理解と矛盾するものであってはならない。現時点における分類体系が完璧なものではなく、いわば仮説であることは当然であり、われわれの研究の進展によって修正されていくべきものであることもまた言うまでもない。しかし、要は、現時点における分類体系は、現時点におけるわれわれの当該群に対する系統関係の理解と矛盾するものであってはならないということである。もちろん、研究者によって異論のある状況は常に存在する。ハムシ科においてもしかりである。しかし、筆者が指摘したいことは、たとえばCHEN 博士の第1論文における分類体系は、その時点における博士の系統関係に対する理解と矛盾するものではないということである。図1は、90°右へ回転させて見ていただければ、そのまま系統樹とみなすことができるように工夫して描いてある。博士の分類体系の変遷を、系統樹における変遷として比較していただきたい。たとえば、HIS と CAS, BRU など、特定の群に焦点を絞って、それらのランキング如何と、それによって要請される系統関係とがどのように変化するかを比較されたい。以上のことは、系統論において最も重要な問題の一つであると筆者は考えている。なお、以上のような理解に立つ限り、分類体系とそれが要請する系統関係の表示である分岐図 cladogram とが相互可換的であることは当然である。筆者は、分岐主義 cladism に対しては、一貫して批判的態度をとってきたが、この点に関してはその主張を是認するものである。

すでに指摘したように(鈴木, 1984)、多くの分類学徒にとっては、たいいては属以下の種間関係、あるいはせいぜいのところ近縁属間の関係を問題とすることが多いために、實際上筆者がここで取り上げているような問題状況に遭遇する機会が少ないのである。しかし、これは階級レベルの違いはあっても、「種を除く種以上の分類群」「種より上の分類群」の間の系統関係を考察する段階で不可避的に生じる問題である。

ランキングは任意的にしか行えないが、それが単なる便宜的措置に止まるものではないことも再度指摘しておきたい。たとえば、ハムシ科の分類の大家の一人である P. JOLIVET 博士は、かつて(1957, 1959)この科の通常亜科として扱われている群を全て科に昇格させた。このような階級の昇・降格は、当該分類群の全構成員に対して一律に為される限り、そこに想定されている各構成員間の系統関係には変化が生じないのだから、いわばまったく好みの問題にすぎないと考える人がいるが、それは甚だしい誤解である。CHEN 博士の分類体系の変遷がそのへんの事情をよく例示しているように、分類群のラ

ンキングと系統関係の考察とは、実際には循環論的関係にあり、相互に強く影響しあうからである。また、ついでながら、現行のリンネ式階層分類法では、上級分類群の数は少ない方がよい。筆者は、最近、ニュージーランドの KUSCHEL 博士らが創設した Palophaginae は、独立の亜科とするのはその観点からも賛成できない。

ここでは詳しく論じる余裕がなかったが、筆者はいくつかの系統的に重要と考えられる形質の相関に基づいて、一般に19亜科に分類されている狭義のハムシ科に7つの系統群を認め、亜科数を9とする体系を提唱した(SUZUKI, 1988, 印刷中)が、それは現行の階層分類法の機能をより発揮させるためである。また、7系統群間の関係は未だ不明瞭であり、合理的に関係づけるだけの資料はない。どのような生物群同士も、時代を遡ればいずれは共通の祖先に到達する。しかし、だからといって具体的な証拠も提示しないまま、系統 lineage 同士を下方で結合させるのは安易に過ぎる処置である。それによってわれわれの理解内容が深化するわけではないからである。たとえば、MANN & CROWSON (1981) は、そのような系統樹を示しているが、基幹部を機械的に結んでいるとの感を拭えず、ほとんど内実を持っているとは思われない。こうした上級分類群の系統に関する論議は、分類学徒の全てが目指してはいても、自説を提示するにはなかなか慎重にならざるをえない。すると、たとえば上の MANN & CROWSON (1981) の説など多くの研究者に無批判に受容されてしまう傾向があるのである(ハムシ科の系統論議は、最近かなり活発になされているが、MANN & CROWSON の提示した系統樹は、既に1種の参照体系とされているようにすら思われる)。筆者がこのようなことを特に問題とするのも、具体的な論拠が提示しえない場合はむしろ正直に?(ペンディング)にしておくべきであると考えからである。筆者は、ハムシ科の上級分類群の分類・系統関係に関する諸説を検討してきたが、上の7系統群間の関係を具体的に示す論拠を見いだすことはできなかった。多くの研究者が、特定の形質に基づくアド・ホックな説明のレベルを超えていない。筆者が、それら7群を相互に関連づけないままにしておくの

は、現時点ではむしろ当然の処置であると考え、このことを筆者は今回のハムシ科シンポジウムでも最後に強調しておいた。

また、ついでながら、ドイツの M. SCHMITT 博士との議論を通して、博士との間で意見が食い違った点を紹介してこの小文の結びとしよう。博士は、今回のシンポジウムで、MGL+ZEU+Palophaginae の3群について、結論的に CHEN 博士の第4論文や筆者の最近の論考(SUZUKI, 1988)における結論と近い説を主張された。つまり、カタビロハムシとモモプトハムシは、ハムシではなく、カミキリムシであるということになる。問題は、こうした系統に関する理解と分類体系との関係についてである。筆者は、原則的な考え方として、分類体系は仮説であり、その時点で想定されるもっとも可能性の高い系統関係を反映するように常に修正を施していくべきであるとの意見に立っている。一方、SCHMITT 博士は、現時点でわれわれの考える系統関係は、まだまだ不十分な仮説の域を出ないのだから、既存の分類体系(最近では、たとえば SEENO & WILCOX (1981) が一種のスタンダードの役割を担っていることが多い)はいじらずに(特にランキングは変えずに)、系統論議は系統論議として行なっていくべきである、と主張する。この意見は博士の最近の論文(1989)でも明確に述べられている: On the phylogenetic position of the Bruchidae within the Chrysomeloidea (Coleoptera). *Entomography*, 6: 531-537. つまり、筆者のような立場は現実的ではないとする意見である。筆者は、「それでは何時になったら分類と系統を一致させるのか?」と博士に質問したが、結局この点に関しては平行線のままに終わった。この問題は、既に G. G. SIMPSON (1961: Principles of Animal Taxonomy. xxii+247 pp., Columbia Univ. Press. New York) が論じているし、筆者としては既に解決済みのことであり(たとえば鈴木: 現代分類学における cladism の位置. *Panmixia*, (2): 1-11, 1976)、分類学徒としての基本態度の選択の問題であると理解している。約半世紀にわたってハムシ科の大分類体系の構築に情熱を傾けられた CHEN 博士は、この点で筆者と立場を同じくしていると言っては不遜であろうか。(富山大学教養部生物学教室)

○カバイロコクヌスト本州の記録

標本の整理をしていたところ、カバイロコクヌスト *Ostoma ferruginea* (LINNÉ) があった。この種は本州未記録のようなので、すこし古い記録だが報告する。採集データは次の通り。

1頭, 尾瀬湿原, 27. viii. 1963, 山崎秀雄採集。

尾瀬湿原に単独ハイキングに行ったときのもので、この日、採集をしたのは大清水から長蔵小屋の間であった。従って、群馬県で採集したことになる。(千葉県市川市, 山崎秀雄)

○チビドROMシの北海道における採集例

チビドROMシ *Limnichus lewisi* NAKANE を北海道渡島半島で採集したので、分布記録として報告する。本属の種は、日本から1種のみ記録されており、前頭が明瞭な線で分けられ、触角の第2節が長く、前胸腹板突起が前基節高よりも伸長することが属の特徴であるという。データは次の通りである。

1頭, 北海道渡島支庁上磯町戸切地(へきりち)林道, 16. viii. 1992, 筆者採集。(神奈川県海老名市, 西川正明)

○房総半島におけるヤツボシハナカミキリの分布について

従来単一種 *Leptura arcuata* PANZER ヤツボシハナカミキリとされたものは、草間・高桑(1984)などにより2亜種に分けられていた。横原・斉藤・佐藤(1991)は、北海道・本州北部～山地帯・隠岐産のものを *L. mimica* BATES ヤツボシハナカミキリ、北海道日高山地・本州・佐渡・四国・九州・熊毛諸島産のものを *L. modicenotata* Pic ツマグロハナカミキリとして、それぞれを独立種とし、前者の鞘翅は明瞭な4つの黒紋部と4つ(隠岐産のみ4つ以下)の黄紋部を交互に持ち、その黒色部は黒色毛のみ、黄色部は黄色毛のみを密生し、後者の鞘翅はこのような明瞭な交互斑紋パターンを持たないことで区別され、また両種が北海道日高山地・東北～中部地方山地・紀伊半島で同所的に分布する旨図示した(以上はこれに先立ち、佐藤(1986)および岩田・横原(1990)によって予報的に紹介された)。

また岩田・横原(1990)はこの立場に立ち、紀伊半島の海岸部～山地における両種の同所的分布を具体例をもって示した。一方今坂(1991)はこの分類に異議を唱え、2者は種内の2型とした。

日本大学農獣医学部林学科卒業生の山川博史君(千葉県千倉町在住)は、昨年在学中に房総半島においてカミキリムシ相を調査し、その際横原・斉藤・佐藤(1991)のいうところの上述の2種を、同地に同時に採集した。ここでは一応横原・斉藤・佐藤(1991)の見解に立って記録を詳報する。興味深い知見をもたらした山川博史君に感謝する。

ツマグロハナカミキリ, 1♂(黒化型), 千葉県白浜町白浜ダム, 27. iv. 1991(マテバシイ枯枝採取), 4. v. 1991羽化脱出。

同種, 1♂(黒化型), 千葉県千倉町岡瀬田, 28. iv. 1991(マテバシイ枯枝採取), 6. v. 1991羽化脱出。

同種, 1♀(黒化型), 千葉県鴨川市嶺岡林道, 3. v. 1991(マテバシイ枯枝採取), 7. v. 1991羽化脱出。

同種, 2♀♀(黒紋退化型・黒化型), 千葉県館山市畑, 林道山倉線, 10~11. vi. 1991(図1~2)。

ヤツボシハナカミキリ, 1♂, 千葉県館山市畑, 林道山倉線, 10~11. vi. 1991(図3)。

山崎(1980)によると、同県内ではヤツボシハナカミキリのタイプのものとはこれまでは得られていないようである。ここに述べた両種の産地はいずれも低標高であり、海岸に近接する房総半島先端部に位置している。ヤツボシハナカミキリがこのように太平洋沿岸の海岸近くでツマグロハナカミキリと共に得られたということは極めて興味深く、岩田・横原(1990)が報じた紀伊半島における状況を想起させるものである。

今坂(1991)による異論があるように、本種群は分類学的にはかなり複雑な様相を呈し、今後全国的再検討、並びに両半島における詳しい調査研究が望

まれる。

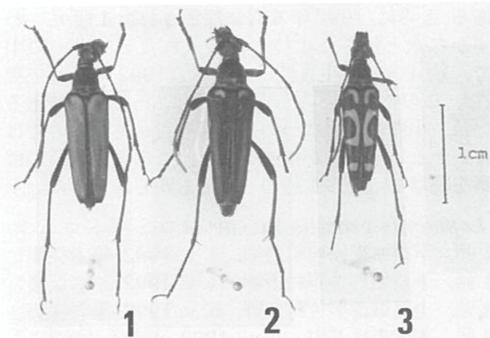


図1~3. 千葉県房総半島産のツマグロハナカミキリとヤツボシハナカミキリ。

1: ツマグロハナカミキリ黒紋退化型, 2: ツマグロハナカミキリ黒化型, 3: ヤツボシハナカミキリ。

引用文献

- 今坂正一, 1991. 月刊むし, (247): 12-18.
 岩田隆太郎・横原 寛, 1990. 月刊むし, (228): 40-41.
 草間慶一・高桑正敏, 1984. 日本産カミキリ大図鑑(日本鞘翅目学会, 編). 講談社, 東京.
 横原 寛・斉藤明子・佐藤正孝, 1991. *Elytra*, 19: 5-18.
 佐藤正孝, 1986. 原色日本甲虫図鑑(I)(森本桂, 林長閑, 編), 226-230. 保育社, 大阪.
 山崎秀雄, 1980. 千葉生物誌, 30(1): 1-22.

(日本大学農獣医学部, 岩田隆太郎)

○熊本県におけるヨコミゾドロムシの記録

筆者は熊本県において、ヨコミゾドロムシを採集しているので、すでに記録したものを含め、ここに報告しておきたい。

ヨコミゾドロムシは、レッドデータブック(環境庁編, 1991)では、絶滅危惧種に指定してある種である。また、生息地の条件として、「湧水のある清澄な池で、水草の多いことが予測される」とある。

今回筆者は、本種をすべて、淀んだ農業用溜池の朽ちた小枝や落ち葉の集まったところから得てい



る。また、採集中に、朽ちた小枝の樹皮の下の隙間から、のそのそと這い出てくるのを目撃したこともある。さらに、1992年6月に採集された4頭が、わずかな水と朽ちた小枝のみを入れたビーカーの中で、約4ヵ月も生き続けている(1992年9月末現在)。このことからみると、本種は、朽ちた小枝あるいは、小枝の表面についた藻類を食べているのではないかということが推測される。このまま本種の観察を続けて、その生態の一部でも明らかにしたい。

Leptelmis gracilis SHARP ヨコミゾドロムシ
1頭、下益城郡松橋町豊福, 4. v. 1992, 筆者採集;
1頭、下益城郡豊野村下郷, 4. v. 1992, 筆者採集;
4頭、上益城郡甲佐町竜野, 5. v. 1992, 筆者採集;
4頭、本渡市本渡町, 1. vi. 1992, 平田千乃採集;
本渡市溝端および本渡市本渡町(松井, 1992); 天草郡五和町御領(松井, 1992)。

末筆ではあるが、本種の同定をして頂いた佐藤正孝教授および標本を恵与された平田千乃さんに感謝の意を表す。

引用文献

環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物。—レッドデータブック—無脊椎動物編, 272 pp.

松井英司, 1992. 天草諸島の水生甲虫目録。熊本昆虫同好会報, 38(2): 印刷中。

(熊本県立天草農業高校, 松井英司)

○ヒラタマルゴミムシを調布市で採集

ヒラタマルゴミムシ *Cosmodiscus platynotus* (BATES) は特異な形態をした小型のナガゴミムシで、稀な種と考えられている。東京周辺では世田谷区と御蔵島(田中, 1962)、伊勢崎市(須田, 1980)、千葉県 Chiba (HABU, 1981)、三浦半島(坂本・土屋, 1983)、横浜市(田尾, 1984)、港区(黒佐, 1981)、板橋区(黒佐, 1981及び笠原, 1986)から記録されているが、1990年代の記録はないようである。筆者は最近、調布市で本種を採集したので、最近の記録として報告しておきたい。

1頭、調布市調布ヶ岡(電気通信大学裏), 26. vi. 1992.

採集地点付近は、大学、布多天神社、大正寺の三



者が隣接しており、調布市としては有数の5ha程度の緑地が形成されている。ほとんどは私有地で入れないが、中央を細い一般道路が通っており、それを横切っているところを発見したものである。本種は非常に光沢が強く、出勤のため走っていたにもかかわらず視野の外で、普通に見られるゴモクムシ類と明らかに区別できた。

本種の生息環境としては、田中が「竹藪に生息している」と述べているのが唯一の知見のようだが、上記の緑地の中でも大正寺の中にまとまった竹林があり、本種の発生源となっている可能性がある。

末筆ながら文献の入手に便宜を図って下さった鎌倉正人氏、伊藤勝彦氏、根本圭介博士に厚くお礼申し上げる。

参考文献

HABU, A., 1981. Female Genitalia of Pterostichini species mainly from Japan (II). *Ent. Rev. Japan*, 36: 33-53.
笠原須磨生, 1986. 歩行虫類。板橋区昆虫類等実態調査: 53-55.

黒佐和義, 1981. 自然教育園で得られた土壌昆虫について (II). 自然教育園報告, (12): 77-87.

坂本繁夫・土屋裕志, 1983. 三浦半島の歩行虫(予報)。神奈川県自然史資料, (4): 7-17.

須田 亨, 1980. 伊勢崎市とその周辺に産する歩行虫類。昆虫ト, 31(2): 53-65.

田中和夫, 1962. 螢光燈に飛来した歩行虫類。自然科学と博物館, (29): 109-131.

田尾美野留, 1984. 横浜市北部の歩行虫目録(I)。神奈川虫報, (73): 1-9.

(神奈川県川崎市, 芳賀 馨)

○コルリアトキリゴミムシを横浜市舞岡町で多数採集

コルリアトキリゴミムシ *Lebia viridis* SAY は北米からの移入種として最近その分布を広げているゴミムシである。特に神奈川県では各地からの採集例が報告されている。筆者は本種を舞岡町の谷戸で生態観察することが出来たのであわせて報告する。

本種は休耕田に成育していたチョウジタデ(アカバナ科)の葉上に飛来し葉上や茎を敏速に歩行していた。この植物にはキタカミナリハムシ *Altica japonica* OHNO とアカバナトビハムシ *A. oleracea* LINNÉ の2種のハムシが棲息しており、これらの卵を食している可能性が強いと思われる。また8月15日にはアカバナトビハムシの群棲していた同じアカバナ科のメマツヨイグサのスィーピングで4雄を採集することができた。このことより各地のアカバナ科の植物のルッキングやスィーピングによりさらに多くの産地が見つかるものと思われる。

3♂♂1♀, 神奈川県横浜市戸塚区舞岡町, 8. viii. 1992, 和泉敦夫採集; 7♂♂10♀♀, 同上, 11. viii. 1992, 和泉敦夫採集; 4♂♂10♀♀, 同上, 15. viii. 1992, 和泉敦夫採集。

(東京都大田区, 和泉敦夫)

甲虫ニュースと私

☆私を育ててくれた甲虫ニュース

甲虫ニュースが100号を迎える。黒沢良彦博士を筆頭に、これまで本誌の発行に尽力くださった方々には、改めて頭の下がる思いである。

今でこそ私は、神奈川県立博物館の名を借りて大きな顔をしているが、甲虫ニュースの創刊時は横浜の片田舎に住む小心な学生であった。その私を投稿という面で支えてくれたのが甲虫ニュース、それに Insect Magazine とはばたきであったが、京浜昆虫同好会の後2誌の休刊に伴い、もっぱら甲虫ニュースに採集記録を出すようになった。

その最初の1篇は3号(1968年)に掲載された「屋久島のカミキリ2種の記録」である。しかしこれは、実際には須賀邦輝氏が書いてくださったものであり、私自身の手によるものは、6号(1969年)の「山梨県で採れたフタホシサビカミキリ」が初めてであった。ちなみに、この号には私の記事が3篇も掲載されており、どなたかに「高桑特集号」だと冷やかされて、恥ずかしいやら嬉しいやら、困惑した覚えがある。

はなばなしく? デビューした私は、黒沢博士や草間慶一博士、それに露木繁雄氏をはじめたくさんの方の親切な先輩たちに恵まれ、出過ぎと思われるほど甲虫ニュースに投稿した。ちなみに、40号までの総目次によれば、黒沢先生の65篇には到底かなわないとしても、渡辺泰明博士の26篇を破っての27篇、堂々第2位に位置している。この後99号までは20篇だけで、通算47篇にとどまっております、黒沢先生の122篇、それに1977年以降突如として新星?のごとく現れた笠原須磨生氏の57篇にはとても及ばないが、いちおうお二人に続く第3位を保持している。

黒沢・渡辺両先生や笠原大先輩と比較するなど無礼者! と一喝されそうである。おまけに、私の記事は短篇ばかりでたいしたこと書いていない。けれど、掲載数第3位という数字は、私のひそかな誇りとなっているのはもちろんだが、私を育ててくれたたくさんの方々がたへの感謝の返礼でもある。今ある私は、まさに甲虫ニュースのおかげと感謝せざるを得ない。(神奈川県立博物館、高桑正敏)

☆『甲虫ニュース』を飲む

1974年東京農大に入学した私は7月、奥日光仁加又沢へ採集に行った。湯元から金精峠を越えたあたりで側溝を覗き込んでみると、大型のハネカクシがミミズを食べている。がっしりとくわえたミミズを引き離してハネカクシだけを毒びんに入れた。

帰京して、研究室の渡辺泰明先生にこの話をすると、「ハネカクシのホストの報告はあまりないから『ニュース』に書け」というと、すらすらと大筋を作ってくださいました。それに日付や場所を入れて出来上がったのが Nos. 21/22 に掲載された短報である。

この一件では、短報を書く視点を教えられたが、それにもまして、原稿を作らせるテクニックに感心させられた。

当時『甲虫ニュース』は渡辺編集世話人のもとで、それまでの発行の遅れを取り戻すためダブルナンバーで勢力的に発行を続けていた。原稿の手入れ、割り付け、校正、著者校送り、印刷上がりの発送と端で見ていても大変な作業であった。1976年のNo. 33から遅れを取り戻し正常発行となったが、この間の渡辺先生の編集作業は特筆されるべきものであろう。

『甲虫ニュース』にはその後いろいろな形でお世話になったが、原稿を書くに10部貰えるという特典は、我々貧乏学生にはありがたかった。余分を東京通販(現TTS昆虫図書)の前波さんに買ってもらい、それで文献を買うのである。確か『甲虫ニュース』数部で『Pacific Insects』が1vol. 手に入ったように記憶している。もちろんそれだけではなく、白状してしまえばそれだけでいぶ酒も飲んだ。『甲虫ニュース』を飲んだ所以である。

大学卒業後、編集のお手伝いをする約束であったが、出版を本業に選んでしまい果たせなかった。そのうちなんらかの形で恩返しせねばと思うこの頃であるが、いつになることやら。

『ニュース』は鞘翅学会の発行物として編集幹事の仕事となったが、基本的にボランティアであることに変わりはない。現編集長も本業の傍らでご苦労も多いことと思うが、『甲虫ニュース』の今後益々のご発展をお祈りしたい。

(千葉県野田市、久保田正秀)

☆甲虫ニュースは採集品のランクを知る物差し

私にとって甲虫ニュースの想い出が最も多いのは、東京農業大学の昆虫学研究室の時代である。当時は私の学年の室員が最も多く、全室員でも甲虫屋が最も多い時代であった。私の研究室でも、御多分にもれず、室員が採集地から帰ってくると、同輩や後輩には自慢話をし、また先輩や一部の同輩からは採集品のチェックを受るといふ具合であった。

誰かが珍しい甲虫を採集してくると、それだけでつまみ無しで飲みながら先輩達と話ができただけであった。その後、採集品が本人の手元に残ったかどうかは定かではないが、そして、特に貴重な記録となる甲虫が採集された場合は、その記録が採集者への謝辞入りで甲虫ニュースに載ることになる。当初は、もっぱら故沢田玄正先生や渡辺先生、岡島先生を初めとする諸先輩が投稿されていたが、じきに我々も投稿しようとするようになった。しかし、私たちの情報不足もあり、いざ投稿となると、印刷物に載せる価値のある採集品の記録などそう沢山あるものではない。貴重な記録は一個人の力では収集する機会は少ないが、研究室員全員となるとこの確率は高まる。また、他人の採集品の中にはよく宝物が埋まっているものである。このころから室員による、他人の標本採集品あら捜しが始まった。私は、

大菩薩周辺では峠付近にしか生息していない針葉樹林性のニセフタオビチビハナカミキリを同輩の下村徹氏の採集品から、群馬県清水峠産のクロヨコモンヒメハナカミキリを鈴木瓦氏の採集品からそれぞれ捜し出し、新分布地の記録として投稿した。この当時甲虫ニュースへの投稿は、貴重な標本を快く譲り受ける最もスマートな方法であった。

また、逆に私は採集から帰ってくると、採集品の中に何か記録すべき重要なものが入っていないか訪ねて廻った。普通、採集から帰ってくると室員がよってきて、欲しいものがあるといろいろと説明をした後で「これちょうだい」という。珍しいのかと尋ねるとたいていの場合、珍しくはないが所持している標本数が少ないとかこの産地のものは持っていない、という理由であることが多い。何度か繰り返すうちに、「珍しい種だからちょうだい」というレベルに達するものもある。さらに何度か珍しいものを採ると、次に「オニ珍しい」というランクになる。そして、めったに機会がない最高ランクが「甲虫ニュースに載る」なのである。こうして、当時の研究室では、採集品には「相手にされない」ものと「これちょうだい」と言われるものがあり、後者には相手の反応により「珍しい」「オニ珍しい」「甲虫ニュース」の3つのランクがあったのである。

私は、「甲虫ニュース」と聞くと雑誌のニュースよりも、いつも学生当時のこの採集品のランクを知る物差しの最高ランクとしての言葉の響きが想い出されてしまうのである。(千葉市美浜区、齊藤秀生)
☆農大、甲虫ニュース、そして台湾

私が東京農大に入学し、すぐに昆虫学研究室の門を叩いてから、やがて20年になるとする。私の在学中は、先輩に甲虫屋が沢山いてその影響が大きく、私も間もなく談話会に入会した。その当時の先輩方は、ほとんどの人が今も虫から離れずに活躍されているのは、誠に喜ばしい限りである。

入会して毎号の甲虫ニュースを見るにつけ、自分もいつか諸先輩のように、りっぱな報文を書いて載せてもらおうと、ずつと心に期してはいたものの、その頃から農大は、実質的な事務局になっていたので、専ら丁稚奉公宜しく、封筒の宛名印刷や発送のお手伝いをして、新前ながら会の一員としての実感が涌いたものである。また、全国の会員諸氏から集まってくる「生」の原稿や付図、赤ペンの校正が入ったゲラ刷りなどを直接見ることができ、胸をときめかせたのも懐かしい思い出である。最初からこのような環境にあったので、駆け出しの者としては大変貴重な経験を積むことができ、短期間にいろいろなことを修業させていただいた。大袈裟に言えば、談話会と農大に両親になってもらって育てられ、未だにスネを齧っているようなものである。

さて、その農大には台湾帰りのつわものがこれまた沢山いて、またまた影響を受けて、自ら台湾の土を踏むのにさしたる時間はかからなかった。当時の農大では、特に甲虫屋は一度でも台湾に行っていない

いと、完全に仲間はずれにされそうな雰囲気だったとは言え、日本の虫もろくに知らない10代の若造がよくも出掛けて行ったものである。台湾では下手な採集ながら、いわゆる雑甲虫でも何でも闇雲に採ったが、採れるものすべてが珍しく、すっかり甲虫の世界に魅了された。しかしながら、浅学ゆえに採った虫の名前がほとんど判らない。まして、新種なのか台湾初記録なのかはもっと判らない。有名な大形美麗種でさえ、採れた時は嬉しくても、その正確な学名を決定するには大変な知識と労力を必要とすることを、甲虫ニュースの解説から知った。いろいろな甲虫を採っていれば、新知見をもたらしてくれる種は必ず入っている筈ではあるが、それが自分では判らないもどかしさ、知っていればそれだけ採れた時の感激も違おうであろうという悔しさを度々味わい、甲虫の研究は、ある一つのグループをじっくりとこつこつ調べていくことの大切さを思い知った。

肝心のニュースへの投稿は、ムシャミヤマカミキリを拾ったり(甲虫ニュース50号)、大屯山でキョヤマセンチコガネの雄を採ったり(同54号、この時は採った瞬間“やった”と思った)、採集時の楽しさをそのまま書いたものもあるが、あともう少しで原稿が揃えば印刷にまわせるという時に、我々農大の学生に命令一下、苦しまぎれに書かされたものもあり、これもまたよい思い出である。

ここ数年、すっかりサボってしまっているが、この間も甲虫ニュースは着実に発行され、本号でついに100号を迎えた。私は25/26号あたりから会員になったので、ちょうど4分の3をともに歩んだことになる。甲虫の世界に引き込み、様々なことを教えていただいた談話会と甲虫ニュースに、心からお礼申し上げたい。(鎌倉女学院、境野広行)

☆甲虫学校

初めて「甲虫ニュース」を手にした時の印象は忘れ難い。8頁の小冊ながら洒落た体裁にぎっしり組み込んだ質の高い内容に魅了され、毎号の発行を待ち焦がれることとなった。甲虫談話会は、私のような物臭さのサボリ虫屋には少々煙たい存在ではあったが、恐る恐る例会に顔を出すと、黒沢良彦、渡辺泰明両先生をはじめ、専門家もアマの先輩諸氏も分け隔てのない和気あいあいの集まりで、いつしか常連の末席に身を置くようになった。

そのうちにニュースの発行が遅滞し始めた。心配していると、黒沢先生の優しい? 策略にかかって、東京農大の岡島秀治さん(彼も同じだという)と編集世話人をあい勤めることになってしまった。私自身は談話会とニュースで随分勉強させてもらったので、御礼奉公の積りで編集所の農大昆虫学研究室へ通った。苦労もあったが、楽しいことでもあった。今にして想えば、昆研の学生諸君は、私が現われると今夜は飲める、と手ぐすね引いて待っていたフシもあり、編集もそこに酒宴となるのが常であった。こちらら埋め草の短報を学生諸君に強要し、或る時は入院中のコメツキ博士に「至急15行頼む」と

ヒゲナガゾウ博士が使い走りして、持ち帰った原稿が穴を埋めたこともあった。さすがは昆研である。

「甲虫ニュース」の顔は、表紙の独特なカットで決る。新年度の編集を始める頃になると、木村欣二さんのお宅へ電話した。要職にある彼は夜が遅く、大抵不在であったが、私から電話があった旨伝えて下さい、と奥さんに頼んでおく。すると3日も待たずに新作の素晴らしいカットが送られて来るのだった。正に意心伝心、世話人の願いをたちどころに汲まれる“欣さん”の好意とニュースへの熱意を忘れることはないだろう。

甲虫談話会は私の甲虫学校であり、甲虫ニュースは良き参考書であった。日本鞘翅学会に引き継がれた今も、この想いは変わらない。

(千葉県船橋市、笠原須磨生)

☆100÷4=20?

甲虫ニュースの思い出となると、その発行計画の段階まで遡ります。甲虫談話会が機関誌を出すので発起人会に集まれと言われて行ってみると、黒澤良彦博士、渡辺泰明博士等コワイ先生や、小宮次郎、中臣謙太郎、須賀邦耀といった中コワの先生の顔が並び、その中で大した虫績もない私に何のご用かといふかれば、タイトルにイラストをつけるから描けと言うのがその要件でありました。どんなものを？とうかがうと「そんな事は自分で考えろ」と、極めて広汎な権限を付与して頂きました。とは言え滅多なことは出来ないのはお判かりの通り。タイトル画など描いた事もなく、考えは中々まとまりませんでした。たまたま開いた妹の雑誌の、宇野亜喜良氏のイラストを見た時に、その表現法をクワガタの大腹に應用したらどうかと思いつき、第1号のミヤマクワガタのカットを描きました。しかし、ここで又不安になり、専門誌に相応しくないと言うので処刑されてしまわない様に、ヒゲナガゾウが何かを標本画風に描いたのを一緒に持って行き、まずその標本画風を見せると「面白い」。では、ともう一方を提示したところ「採用」となったのです。そこまでは良かったのですが「こんなのが出て来るのなら毎号カットを変えるか」の発言にびっくり仰天。何しろカットは毎号同じものでズーッと通すのだと思っていたので、必死に抗議してやっと毎年変えると言う事で妥結しました。年4回発行ですから100号なら25枚描いたはずなのに、これまで4回、間に合わなくて同じタイトルが続いた事があるのです。中には3年分続いたのまでであり、大変申し訳ない次第です。お暇な方はどの号がそれに当たるかバックナンバーで調べて下さい。でもこの役目のお陰で、私にとって甲虫ニュースの100号は殊更に感慨深いものとなっています。(東京都大田区、木村欣二)

☆創刊の頃とオサムシ大発生

黒沢先生からお話があって、「甲虫ニュース」の編集をお引受けしたのは、ずいぶん昔のことで、あまりよく憶えていない。虫の印刷物を創るのが好きで、「インセクト マガジン」、「インセクトジャーナ

ル」、「やどりが」など、どちらかという、肩の凝らないやわらかいものを編集するのが楽しかった。

本誌は、解説記事を巻頭に、あとはホットな短報で埋めて4ページでスタートした。内容は堅かったが、木村欣二さんのカットで楽しい速報誌となった。

私は、本来甲虫屋ではなく(若気の至りで日本列島を掘りまくって、本人もオサムシもケルベロスと命名されたが)、本会のメンバーでもなかったので、本業の蛾屋が忙しくなるにつれ、本誌とは離れてしまった。この機会に、オサムシの好餌であるイモムシが、10年周期で異常発生して、オサムシたちを狂喜させた事実を紹介しておこう。

ここに、一枚の空中写真がある。インテルサットが8月下旬の東北地方を写したものだ。森林に変色した部分が大きく認められる。この無残な跡は、ブナアオシャチホコの異常発生のもたらしたものだ。夥しい数の幼虫が群棲して、ブナ林を蚕食した。ブナ林は、葉が一枚もなくなって、白い幹を曝し、黄金色に輝く黄葉は望めなかった。ブナアオは、ブナの固有種で、ブナの葉しか食べないから、ブナ林のほかの広葉樹、カエデ類、ミズナラ、マンサク、トチノキ、オニグルミ、オオカメノキなどは、青々と残る。大発生した幼虫群を狙って、クロカタビロオサムシ、エゾカタビロオサムシ、(ひょっとしたらアオカタビロオサ)が大集合した。捕食の記録は、10年間隔で、1980年前後と90年前後に、ブナアオの大発生地で報ぜられた。天牛屋によれば、70年にも、天城山のブナ林で、クロカタビロが多かったという。(神奈川県横浜市、中臣謙太郎)

☆甲虫ニュース100号の発行にあたり

甲虫ニュース100号発行おめでとうございます。第1号が発行されたのは1968年でしたが、その頃は、私が高校生で、甲虫に興味を持ちはじめた頃でした。昆虫学会や甲虫学会の英文の会誌は難しく読めないし、「昆虫と自然」が唯一の情報誌であった私にとって、先輩に見せてもらった数冊の本誌は、私の希望する情報誌そのものでした。早速会員にして頂いたのは言うまでもありません、1969年のことです。

アマチュアの虫屋である私にとって、最も関心のあることは、自分の採集した虫の種名を知りたいということです。本誌は、この私の希望に沿った編集内容で、タマムシやミツギリゾウムシ、水棲甲虫、テントウムシダマシ、ハネカクシなどの概説が毎号連載され、図鑑だけでは同定出来ない種を調べるのに重宝したのは私だけではないと思います。

本誌の特徴のもう一つは、短報のみによる誌面の構成ではないでしょうか。この短報の存在について否定的な学者がいることも事実ですが、アマチュアの虫屋にとって、自分の採集した虫の情報を気軽に報告できる場として、また自分の専門分野の虫の分布情報を得る場として大変重宝していることも事実です。

当初、甲虫ニュースの編集は黒沢先生がされていたように思います。そのせいもあってか、先生は積極的に雑甲虫の短報や最新情報を書かれていましたので、多くの有益な情報を得ることができました。例えば、オナガカツオゾウムシの食草の報告(15/16号)により本種はドクゼリをhostとしていることを知りましたし、日本新記録のシテムシの報告(19/20号)で八重山のアカモンオオモボトシテムシの存在を知り、私もアカモンオオモボトシテムシその後の採集記録(25/26号)を報告させていただきました。また、渡辺先生の潮間帯に生息するハネカクシ(21/22号)を見て和歌山県下の岩礁帯でハネカクシを探してみたこともありました。

市販の昆虫雑誌では、蝶、カミキリ、クワガタなどのような人気のあるグループの虫の記事に紙面のほとんどを使い、マイナーな虫の記事はほとんど載らないのが常ですが、本誌は編集委員の御努力により、いわゆる雑甲虫の記事が多く、今日の雑甲虫ブームをもたらした火付け役的な存在と言っても過言ではないと思っています。

記念すべき100号を迎え、今後のより一層の発展をお祈り申し上げます。

(和歌山県自然博物館、的場 績)

☆燈火にきたアオタマムシ

ワープロが普及して、日夜進歩していき、美しい文字が誰にでも瞬時に作れるようになった現在、昔のような“活字信仰”はかなり薄らいでしまったような気がする。便利な時代になったと思う反面、初めて自分が書いた文章が活字になった時の喜びも、これからの人は薄らいでいくように思えてしまう。

私が初めて虫の原稿を書き、それが活字になったのは、1970年11月に発行された「甲虫ニュース」11号で、タイトルは「燈火にきたアオタマムシ」。東京都下高尾山へ夜間採集に通っていた頃、目的のカミキリ以外にアオタマムシを何頭か採った。タマムシが燈火に来るということは聞いたことがなかったし、アオタマムシのような珍しい種が1晩に1~数頭飛来するのは、かなり面白いことのように思えた。しかし、「甲虫ニュース」は、当時高校生だった私にとって、色々な大先輩が書いたものを読む教科書のようなもので、投稿するなどという大それたことは考えられなかった。それでも、この大発見？をできれば書いてみたいと思うようになり、おそろおそろの当時科博にいた黒沢良彦先生にご相談したところ、それは面白いからぜひ書いてごらんと言われ、かなりの苦心の末、やっと原稿を書いた記憶がある。

それから20数年、書いた短報の数は数えてみたことはないが、100~200編くらいは書いたと思う。また、同時に色々な雑誌の編集をしてきた関係上、膨大な数の他の方々の短報の原稿を見てきた。「月刊むし」に年間掲載される短報は約250編。これを15年以上続けてきたから、もう4000編近い。ここ約20年間で、一番たくさん短報の生原稿を見た虫屋は私かもしれない。

そんな私の、短報の原点とも言える処女作が前述のものだが、ただひとつ残念なことに誤植がある。燈火にきたカミキリを列記した中に、「セミスジ、ニセリング」とあるが、これは「セミスジニセリング」なのである。いずれの場合でも実際にあるカミキリの名前なので発見しづらい誤植だが、22年後のこの機会に訂正しておく。リングカミキリ類が燈火にきた例は、私はまだ知らない。

(東京都台東区、藤田 宏)

☆甲虫ニュース初投稿以来10年経って

私が甲虫屋として活字デビューしたのは高校1年生のときで、当時、高桑正敏さんが編集長をしておられた「月刊むし」誌上に、ひどく稚拙な採集紀行文を書いている。この紀行文のことで、その後20年たった現在も、酒の席で意地の悪い先輩から冷やかされるのがしばしばあり、いきおい悪酔いの原因となることもある。

デビューでコケたからというわけではないが、甲虫ニュースに初めて投稿したのはずいぶん後になってからのことである。商業雑誌に比べると、プロの会誌のイメージが強く、敷居が高かったのかも知れない。今調べてみたら、10年前の1982年発行の56号に2編の短報が掲載されたのが最初であった。その後、現在に至るまで、短報や小文をいくつか載せていただいたが、思えばつまらないものをやたらと書いて誌面を汚したような気もする。それでも、ニュースに名前が出るようになると、虫屋仲間の交際範囲は自然と広がり、貴重な意見や情報を得る機会も増えた。とくに私にとっては、このニュース以降から、上野俊一先生ほか諸先生のご指導を受ける機会に恵まれ、少なくとも、趣味で虫を「集めてる」というレベルから「調べてる」くらいには育てていただいたつもりだから、その恩恵は計り知れない。

私の虫屋としてのデビューは20年前に遡るが、甲虫ニュースとの関わりはその後半部分である。それにもかかわらず思い入れ深いのは、このような貴重な人間関係を作りだしてくれたからなのである。

(株)環境指標生物、新里達也

☆少年老い易く、学成り難し

甲虫ニュースのバックナンバーは私の書架にコンプリートにそろっている(はずだ)が、それは私が甲虫ニュースの初めからの会員であったからではない。今から10年位前に、当時甲虫ニュースの幹事(?)であった秋山黄洋君の口車にまんまと乗せられて、全号買わされるはめになったからである。と同時にほぼ強制的にというか自動的にというか、会費をとられて、気がつけば100号まで来たという訳である。甲虫ニュースに原稿を書いたのは恐らく一度きりであるから、世間的な常識では、甲虫ニュースに対してほとんど何の貢献もしなかった事になる。しかし考えようによっては、文句も言わずに律儀に会費を払い続けてきたのであるから、このような会員こそ会に対する最大の貢献者であるとも言えないこともない。

さて、甲虫ニュースに載せてもらった記事は *Phymatodes lividus* というカミキリムシの日本初記録の報文である。採ったのは当時小学校3年生であった私の息子、採った場所は甲府市内の山梨大学の官舎(自宅)の庭である。「パパ、見たことのないカミキリ採った」と庭で叫ぶ息子の指の間でもがいているカミキリを見て仰天した。私も見た事がなかったからである。「ギャー、ニューだニューだ、おまえの名前つけてやっからな」と私が有頂天になって騒いだのは言うまでもない。

残念ながらこのカミキリはニューではなく、息子の名前をつけるという約束は反古になった。その息子も今では高校を卒業し、女子学生を食事に誘うと断られる程(危険ということ)若かった私も、今では逆に食事に誘われる程になってしまった。きっと口しか立たないと思われているに違いない。「少年老い易く、学成り難し」とはよく言ったものであるが、せめて一矢を報いたいと思う今日この頃である。

(東京都八王子市、池田清彦)

☆ムシ屋の楽しみと甲虫ニュース

「甲虫ニュース」には、以前はよく科毎の解説や概説が掲載された。特に、タマムシ(1~36号)、ミズスマシ(37~39号)、ミツギリゾウ(46~47号)、テントウムシダマシ(49~52号)、水棲甲虫(65~69号)は以前から興味を持っていたグループの解説であり、私にとっては非常に役に立っている。ところが最近、この種の掲載が無いのは残念である。このように感じるのは、ムシ屋(甲虫)の楽しみがそうさせているからと考える。

ムシ屋の大きな楽しみの一つは採集したムシの名前を調べることにあり、と私は思っている。そして、名前の判ったムシが大珍品であったり、あるいはそれが北限や南限の記録であったりすれば至上の喜びとなり、一人でニタニタしてしまう。しかし、ムシの名前を調べることはアマチュアには大変なことである。例えばカミキリのように、しっかりした図鑑類が揃っていてもなかなか簡単には済まない。ましてや、雑甲と呼ばれているグループはお手上げに近いものも少なくないようだ。

最近雑甲屋になりつつある私にとって、「甲虫ニュース」の解(概)説は大変にありがたい。もちろん、最近出版された図鑑類には検索表が付いている科(族、属)もある。しかし、これに従って実際に同定を試みると皆目見当も付かないグループすらある。また、グループ毎の特徴の表現には理解に苦しむ点もままある。これらを解決し、さらに素人好みする分布や生態等のコメントも付けた解(概)説が欲しいと願っている。それぞれの科を専門に研究されている方には是非執筆をお願いしたい。

とは言ってみても、『野外での採集はもっと楽しい』し、この楽しみをさらに発憤させるのが採集記録である、と私は思っている。このように「甲虫ニュース」は私に非常に貴重な刺激を与えてくれる存在となっている。今後の益々の発展を願ってい

る。(栃木県西那須野町、大桃定洋)

☆「甲虫ニュース」以前のお話

「甲虫ニュース」100号おめでとうございます。本誌発行にたずさわられた方々のご努力に敬意を表したいと思います。「甲虫ニュース」100号への思いは多くの方から寄せられることでしょうから、私は「甲虫ニュース」以前の思い出を記憶の定かなうちに、つれづれに書きとどめてみたい。

私が甲虫談話会に出るようになったのは、当会の名誉会員である草間さんに科学博物館の黒沢先生のところへ連れていかれたのがきっかけで、まだ高校生であった。

当時談話会に出席し、カミキリムシの研究をされていた方は、東京農大の服部仁氏、東京農工大の藤村俊彦氏らがおられ、始めたばかりの私などには何のことかさっぱり分からない話をされていた。雲の上人といえば、一度だけ江崎悌三博士がご出席になられ、また蝶の大家でありながら、なぜかよく磐瀬太郎氏が出てこられていた。すでに故人となられた野村鎮氏、玉貫光一氏、加藤晃氏など錚々たる方々がみえられたのも覚えている。

カミキリの思い出は、江田茂氏がお持ちになった当時としては(現在でもかなりの)とんでもない珍品の標本で、トゲウスバカミキリ、ヨコグロケシカミキリ、それに東京・高尾山産のオオトラカミキリ(採集年は記憶にないが10月1日のラベルが付いていた)を見せられて、ドギモを抜かれたものである。

私が天城山で採集したナガクチキを中根猛彦先生に同定していただいたところ、ネアカツツナガクチキで「なかなかの珍品ですよ」といわれ、カミキリ以外にも興味を持つようになったことも思い出深い。

最後に「甲虫ニュース」を編集される方へのお願いは、例会での一人一話等の中になりに重要な情報がありますので、これをうまく記事にして「ニュース」に載せてはいかがでしょうか。

(神奈川県逗子市、露木繁雄)

☆今のスタイルのまま

もう20年以上も昔のこと、甲虫談話会が会誌を出すというので、大菩薩のアラメハナカミキリについての短報を書いた。それは「甲虫ニュース」第1号に掲載されたが、当時は自分の書いた文章が活字になることなどはほとんどなかったもので、送られてきた掲載誌を何ども読み返したものである。また、「執筆者特典」として10部余分にもらうことができ、なんとなく得をした気分になったことを覚えている。

そんなこともあって、「甲虫ニュース」は私にとって気楽につき合える昆虫専門誌のひとつになっている。内容は平易でとっつきやすく、頭を悩ませることなく読めるし、巻頭の解説以外は短報を中心に編集されているので、誰でも気軽に参加(投稿)することができるのがありがたい。私もそうだが、本誌

に発表の場を求め、あるいは本誌から様々な情報を得ることによって、甲虫に対する興味を維持・発展させてきた人は少なくない筈である。そうした意味からも、本誌の発行を支えてきた編集幹事諸氏は文句なしにエライと思う。

これからの「甲虫ニュース」には、現在のスタイルを踏襲することを望みたい。要するに、短報を中

心とした投稿誌であり続けてもらいたいということである。そうしたうえで、ページ数がもう少し増え、写真(特に貴重な種類の)も多くなれば理想的といえる。予算上の制約や原稿の都合などもあって簡単にはいかないだろうが、是非とも検討して欲しいことである。そして、150,200と号を重ねることを期待したい。(東京都大田区、酒井 香)

◇例会報告◇

1992年第3回例会を9月15日(火・祝日)午後1:30より、東京上野・国立科学博物館4階の実験講義室で行ないました。講演は、日下部良康氏(東大農学部)による「日本産リンゴカミキリ属 *Oberea* について」。比較的良好に知られていると思われていたこの類にも問題点のあることが理解されました。(下記の講演要旨を参照)。質疑応答の後、続けて、斉藤明子氏(千葉県立中央博)が、昨年に続き今夏再び訪ねたウラジオストークから沿海州各地における日ロ共同調査の模様を、多数のスライド映写を添えて話されました。軍用トラックによる悪路の克服とキャンプ生活の有様が印象的でした。

少憩後の一人一話も多彩な話題が供され、和やかな雰囲気の中に午後5:00散会いたしました。参加者26名。なお、いつものことながら有志16名が上野駅前酒亭で二次会を行ない、さらに甲虫談義に興じたことをつけ加えておきます。

(例会担当、笠原須磨生)

日本産リンゴカミキリ属(*Oberea*)について

日下部良康(東京大学農学部)

本属中には農林業、園芸、また観光上の重要害虫である種を含むことからその分類体系を確立しておくことは応用昆虫学の立場からも実際の意義を持つと考えられる。しかし、現状の分類学的扱いは関連地域を含めた総括的な検討がなされていないため、その研究は将来に託された状況である。また、国内での分布に疑問もたれる種類についても同様で、暫定的な扱いがされている結果、図鑑類で扱われている種類数も異なっていた。最近、演者はその扱いを14種としたが、その中で、詳細に触れられなかった雄交尾器内陰茎(endophallus)等についての若干の知見を紹介した。

① *O. japonica* の地理的変異:最近、鹿児島県屋久島から採集された個体を各産地の個体と比較した

結果、前胸背、上翅の点刻、雄交尾器等に相違が認められた。

② *O. mixta* と *O. shirahatai* の種間関係と地理的変異:腹部第5節腹板・背板の形態、及び黒色状態、雄交尾器の陰茎(median lobe)、内陰茎(endophallus)に明瞭な相違が認められた。また、従来、両種を識別する特徴として重視されてきた上翅端部の形態、上翅基部の橙黄色紋は変異が多く、これらからの識別はできなかった。

③ *O. inclusa*, *O. infranigrescens*, *O. vittata* について:従来、*O. inclusa infranigrescens* (本州、四国、九州)、*O. inclusa inclusa* (対馬)、*O. leucothrix* (屋久島)が知られていたが、*inclusa* と *infranigrescens* は、別種であった。即ち、本州、四国、九州産は *O. infranigrescens*、対馬産は *O. vittata*、そして、*O. inclusa* の日本からの記録を削除した。

④ *O. shibatai*, *O. okinawana*, *O. griseopennis* について:腹部第5節腹板の形態、及び黒色状態、雄交尾器等に相違が認められたため、それぞれ独立種と認めた。

⑤ *O. nigriventris*, *O. fuscipennis* について:大陸、日本産の *O. fuscipennis* を比較した結果、日本産は *O. fuscipennis* ではなく、むしろ *O. nigriventris* に近い種(あるいはそのもの?)であった。

日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5,000円、次号は1993年3月下旬発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311、振替 東京 8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3)21129

電話 (03)3409-6401(ムシは一番)

FAX (03)3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200、桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870、送料一箱につき都内及第一地帯:3個以下 ¥1,300、4個以上 ¥850(以下同様)、第2地帯 ¥1,500、¥950、第3地帯 ¥1,700、¥1,050、其他、各種器具、針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話(03)3811-4547、振替 6-113479